

---

# 二人静 - ふたりしずか

かなこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人静・ふたりしづか

### 【NNコード】

N9328W

### 【作者名】

かなこ

### 【あらすじ】

大奥にやつってきた美女・静山<sup>しそやま</sup>。若き年寄り職にあつた月島は、静山の後見人を命じられる。謎の多い静山は一体何者なのか？ いっぽうの静山は圧倒的な性格の月島に、強く惹かれていく。互いの想いが交錯するなか、やがて幕府終末に向かう時代の渦がふたりを巻き込んでいく。

「ツイン・ソウル」「不安的な時代の変わり目にどう生きるか」をテーマにしております。ツインソウルは何も異性であるとは限らない

い。 彼女がいるから自分が輝ける、お互に照らしたい。 舞台は幕末よりちょっと前。 生き方を大きく変換させなければならない時代の人間たちを、 現代の不安定時代とリンクさせて書いてみたいと思います。

# 第一章 概論（概論也）

今朝はゞいつも騒がしい。

原因是 新しく入った 静山とこいつ中臓のよつである。

中臓は大奥で将軍の世話係。

身分も高くお手つきになりやすい立場である。

「越後黒川藩の家老の娘、とこいつとですが……」

月島は、少し思いやられるよつな声で 上臓年寄の万里小路にたずねた。

大奥年寄として実権を掌握している月島はまだ三十一を越えたばかりであった。

美しい顔と若々しい風貌から、実際の年よりはずいぶんと若く見えた。

「黒川藩は財政が厳しい。

家老の娘といえど安穩にはしておられんやつや。

あちらとしては婚礼にお金をかけて無駄にビロジに嫁がせるより、大奥にいれて出世をしてもらつか、側室にでもなつてもらう可能性があるほうがよい、といつゝとらじー

公家出身の万里小路は京都口調でやんわりと話した。

「しかし、旗本の娘と違つて藩家老の娘……大奥でつとまつましょうか？」

「頭は悪くなさやつやが……問題は、もつと別にある」

万里小路は口をつぐんだ。

ただならぬ雰囲気を感じて 丹島も黙つた。

月の高い晩だった。

庭には そろそろ大輪の菊が咲きはじめ その香がほんの少し所々に落ちていた。

「顔をあげなされ」

万里小路に言われて 見上げた顔に皆は息を飲んだ。

妖氣の漂う目許。めもと

人形のよつな綺麗なアーモンド型の目の中に、どこを見ているか分からぬ泥眼でいがんが、輝いていた。

泥眼は、能の面で高貴な美女の眼の中を金泥で塗りつぶした状態のものである。

きちんと眼球があるので、泥眼に見える妖氣が女にはあつた。

高い位置の眉は、そのままスッと可愛らしく弧をえがき、薄い唇と細い首が人形のよつで、ますます人離れしてみえた。

「しづやま 静山と申します。右も左も分からぬふつつか者でござります。どうぞよろしくお願ひいたします」

「ほ……これは」

顔に似合わぬ 低く強い声に 年寄四人は我に返つた。  
なかなかと根性のある娘のようである。

「大奥では 御年寄おとこよづといつのは、役職であり 筆頭御年寄を頂おとこよづ点に、上臍年寄じゅりやいよづ、御年寄おとこよづ、中年寄ちゆうよづ……となつてゐる。

名前は老人風であるが、比較的若い人もなることが多いかつた。  
しかし、大奥御年寄は 表向きの老中にも匹敵する権力をもつていたのである。

「ま、万里小路さま、静山は月島つきしまのやまと下しもともう決まつてしまつた  
のですか」

月島以外の年寄たちは万里小路に詰め寄つた。

名実とも大奥筆頭年寄である万里小路。  
年は四十歳を少し過ぎた頃か。

上臍年寄の万里小路は、京都から御台所みだいどしょつまり將軍の正室まよどに付き従つてきた公家の娘である。その御台所は数年前に他界していた。

「わたくしの所はこの間、中臍ちゅうりが病いいで宿下しゆげがりしましたゆえ、是非、わたくしのもとへ静山をお入れ願います」

しかし万里小路はきつぱりと言つた。

「月島さんと」と もう決まつてます。表にも部屋づきの報告はもうしました」

女たちは露骨にがっかりした。

将軍の田に止まる可能性が高い静山を自分の部屋に入れたい思いは大きかった。  
誰にでも将軍のお世継ぎの生母になれる可能性がまだ残っていたからだ。

正室は既に他界し、十数人の側室がいたが、いずれも子供は早死にしてしまっていた。

唯一の男子・家倖いえさちは十七歳であったが、知的に障害があり、父親の家賢いえよし自身も次期後継者としての決定を決めかねていた。

「ああ、万里小路さまと円島さまにやられた」

静山が円島に連れられて出ていくと、村岡が声をあげた。

「円島さまは、そんなことやる性格ではないと思いますが」  
おつとり系の美津波瀬みつはせが、苦笑いをした。

「分かりませぬぞ。第一見ましたか？あの美貌」  
「ええ。あれは尋常ではござりませぬ？一体誰の……」

さしがねなのか、と言葉を飲み込んだのは、三人目の年寄・夏川。

「いずれにしても、何か起こりそうな予感がいたします」  
「気を引き締めていかねば」

その後で、美津波瀬がくくつと笑つた。

「しかし、一見の価値はありましたわね」

「え？」

「月島さまと 静山の連れ姿。まさ牡丹と芍薬のよつで。悔しいですが、お似合いでしたわ」

「確かに」

村岡と夏川は 二人の姿を反芻はんすうした。

月島はかつて「大奥隨一の華」と呼ばれていたのである。

なのに、將軍・家賢いえよしの寵愛こうあいをさほど受けたのが無かつたのは ？  
変人？ だつたからと もっぱらの噂うわであった。

隨一の美貌とは裏腹に、月島は女として磨きをかけるより 何か妖しげな書物を読んだり、仏閣に口参したりと、おかしなモノに執着しつきを持つていた。

華美な衣装や道具をしつらえる決まりを守まつり（一応將軍のお手つきだったので皆もキツく言えず）、出入りの業者と懇意になることもなく（けど趣味にはつるをこ）、噂や権力にも興味を示さなかつた。

それでも、ずば抜けた知性は大奥では貴重がられキャリアを重ねていつたのである。

「我々三人としては、月島さまお預かりといつことでは 今回は痛みわけ、といつことでいざりますな」

美津波瀬は、  
静かに笑つた

静山は落ち着かなかつた。

円島といつ人物に『』惑つていたからだ。

人なつこさを感じさせる雰囲気の中に、藍色の澄んだ眼差しは、秘め事さえも すっかり見通してしまつような力を持つていた。

『今まで出会つたどんな人物とも違つ

けれど、そう

バレるわけにはいかない……

細い首を、ぐつと枕に押し付け、泥眼を閉じた。

「今年の菊はびひごや？」

円島は、部屋子筆頭の墨越すみこしに尋ねた。

御年寄りともなると、自分の部屋と部屋子を持つことが許されていた。

「はい、今年は尾張さまの 厚走りあつはしが大変に見事で。黒川藩の広物ひろものもなかなかでござります」

「やつが、静山はびひ思つた？」

「はい。尾張さま、黒川藩の菊も素晴らしいものでございましたが

「なるほど。では後で見にまいる」  
管物の紀州さま、熊本藩の肥後菊もなかなかのもの、とお見受けいたしました」

九月の行事、觀菊は月島が主催することになっていた。  
觀菊は將軍が配する大奥の庭に、菊の花壇をつくり、その後ろに諸  
家からの献上盆栽を飾るのだ。

「あ、いらした！」  
「どれどれ？」  
「月島さまのすぐ後」  
「え、月島さまもいらっしゃるの？」  
「あーん、よく見えない」

花壇の掃除をする 御末おすえの少女たちは色めきたつていた。

今話題の靜山を見られると聞き、御末のほか、用事もない御小姓の  
娘たちまでが十人近くいたのである。

「なるほど…」

庭を眺めていた月島は、嬉しそうにつづぶやいた。

「そなた、小菊が好きか」  
靜山にたずねた。

少し笑みを浮かべた靜山は

「……いいえ」  
と答えた。

「肥後菊がなかなか、だと申したではないか」

「はー。 もうらん肥後菊は素晴らしいけれども、それはあの位置より、もつ少し手前、やや、あの辺りに置いたら、もつと可憐で好ましくいります」

その言葉を聞いて、円島は静山の皿をじっと睨つめた。

円島は愛らしげに「ココと笑うと、

「およひ、その鉢をその辺りに置いてくれぬか

「はーー。」

およひ、と呼ばれた、色の黒い頑丈そうな娘は、嬉々として円島の下へと飛んでいった。

「よかつたですね。円島さまに気に入られたようですよ

墨越は控え部屋で、菓子を口に入れながら笑つた。

「やつでしょつか」

その言葉に、静山の涼やかにみえた美貌も、少しほほりんだ。

「円島さまは、とても頭のよい方なのですが……ひねり好きといつか

まじめそうな墨越は、ちょっと悲しそうな顔をした。

「 まともに小菊の鉢をもつと前にしたせうがいいですよ、なんて言つより、今日の静山さまのように言つまうが嬉しがられます。……わたくしこそ、それが出来ないです」

墨越は下をむいた。

新入りの静山は、何かを言つ立場ではなかつたので、黙つて聞くしかなかつた。

「 わたくし出すきましたでしょ、つか」

「 いいえ」

墨越はあつぱりと瓶をあげた。

「 静山さまは、聰明なお方。そして、その美貌。あつと、上様のお声がかかるのも時間の問題でしょう。いずれはお方さま、と呼ぶことになりましょ。それより何よつ……」

墨越は小さく息を吐いた。

「 あなたさまは違つのです」

静山を見る墨越の目は遠くを見ているよつだつた。

「 あなたさまや円島さまは……何か違つのです」

墨越は立ち上がると、棚にあった時絵で飾られた文箱を一つ取り、静山の前に置いた。

「これは？」

「『龍愛』が無くなつたなど、全ての嘘ではないか」

差し出すと墨越は部屋を出てしまつた。

文箱の中。

ひとつの中には大奥の女性たちからの、月島の対する恋文とおぼしき書が何部も入つていた。

そしてもうひとつの中には、將軍・家賢いえよしから月島への恋文。

三十路を一年も過ぎた月島は、もう將軍の相手をすることが出来ない。

それでも、想いを押さえることは出来なかつたのだろう。

『変人だから、『龍愛』が無くなつたなど、全ての嘘ではないか』

家賢の文を読んでみると、手にはいつても心が近づけない辛さはない、そして、今やその体さえも遠くから見るばかり、と言つたことが書きつらねてあつた。

将軍といえど、大奥の女であつてそれを手に入らなことな...

「やつしておるとまさに天女のようじゃな」

円島の顔に、文を読んでいた静山はさきよつとしつて飛び上がった。

足音をえりかなかつた。

「つ、円島さま。」

「……天女も驚くのか」

円島は田を丸くせた。

「も、申し訳ござつませぬ。お許しぐだせこませ、されば、その」

「ああ」

文箱の文を一瞥した円島は、何でもないかのよつじをとがらせた。

「墨越に捨てておくように書こ渡してあるのに……あの者は取つて

おくのだ」

「し、しかし、これは上様からの」

「……」

慌てふためく静山を、円島はまじまじと見つめた。

その瞬間、静山は、

深い藍色の瞳に、吸い込まれそうになり  
息をするのを忘れた。

急に胸が苦しくなった。

何か泣きたいような、甘酸っぱいような、そんな感覚が走った。

しばらく一人は見つめあつていたが、そのままでは何かおかしくなりそうだった。  
強い意志を取り戻したのは月島だった。

ぐるりと背をむけた。

「そこを片付けておきやれ  
「はい……」

文が散らばったままの部屋で、胸に手をあてたまま静山はひとりたずむのだった。

大奥には年寄とこよりといつキャリア組とは別に、お方様かたさまと呼ばれる寵妃ちようひ組もある。

つまり、将軍の子どもを産んだ女たちだ。

将軍の男子を産むと「お部屋さま」、女子を産むと「お腹さま」と呼ばれ、生んだ男子が次期将軍ともなれば、おふくろさま・生母さま、とも呼ばれ絶大な権力を持つことができた。

が、

通常のお手つきくらいでは、大したことなく部屋ももらえない。子供を産んで初めて部屋をもらえるのである。

「」に、お初の方といふ女人<sup>は</sup>がいた。

お初の方は、家賢<sup>いえよし</sup>の母方の娘で、寵愛を受けたのだが、生んだ子供はすぐに死んでしまい、そんなうちにお禱<sup>じとう</sup>辞退<sup>じりだい</sup>となつた。つまり、三十路をすぎたので伽<sup>じや</sup>は引退<sup>じりたい</sup>。

そななお初の方は、強引で激しい性格をもてあましていた。

前々から 同世代の月島にライバル心を持つていたのだが、いつの頃からかなぜか、よからぬ情欲を抱くようになつた。

しかし何度も文<sup>ふみ</sup>を送つても、無じのつぶての日々にギリギリとしていた。

「どうにかして月島をこちらへ来させられないだろ?」

「何かあちらの手落ちでも見つけて、それを盾に、こいつの言ひ事をきかせるといふのはどうでしょうか」

「月島に限つて手落ちなどありはせん……いや、しかし失敗するようにしむける、といふのはどうじや？」

急に田が輝きだした主人を見て、長柄は『しまつた』と感じた。お初の方がこういつた悪い顔をしだすと、ろくなことを言い出しかねないのを知つていたからだ。

「し、しかし、お方さま。月島さまが失敗されたのが、万一露見して大奥をお下がりにでもなつたら……」

「それもそうじや。では、大奥を下がるほどの失敗でない失敗を考えるのじや」

「……」

不可能な注文である。

「お方さまの」意向に沿つか分かりませぬが……今度大奥に上がりました月島さま付きの静山をまず呼び寄せてはいかがでしょうか？あちらは中脇でござりますし、お方さまに挨拶に来る」とて、何の違和感もございません」

「おおお、噂の静山か。美貌の天人にいちど会いたいと思つておつ

たのじせ

「お方ねが、静山はこすれ上様のお手つかとなられぬ身かと」

「分かってゐる。わたくしの田舎はあくまで田舎。鯿を釣ること何とやう、じや。」

早速、静山を呼び出すのじせ

## 将軍をおひせ

徳川 家賢いえよしをむかえての觀菊の日になつた。

静山は、おかしな気持ちだつた。

雲の上の存在であつた將軍が目の前におり自分をじつと見つめている。

『一見したところ凡庸ふのうそつなこの男が、公方さま?』

確かに品はよきわざで横柄なところはないが、將軍とはこんなものだらうか?

四十五歳で新將軍となつた家賢は、父である家成いえなりが長い間、大御所おおいのしとして君臨しており、政務を手放さずにいたためずいぶんと我慢を強いやられてきた。

就任一年後に家成が他界して、ようやく人心地ついたが、家成時代から続く老中や幕閣たちの政権争いは、依然悩みの種であつた。

「静山は黒川藩・横井 定利さだとしの娘か」

初めて見る顔の娘に家賢は声をかけた。

「はい」

家賢の視線には静山に対する興味の色が、明らかに認められた。

『やつでなくてはならぬ。そのために私はここへ来たのだから』

「深窓の娘に大奥は辛からひ…」

「いえ。大奥務めは徳川臣下の讐れでありますゆえ」

家賢はそこで不思議そうな顔をした。

「天女とおぼしき女人が、普通にしゃべつておるのを見ると……何かおかしな感じがする」

その言葉に月島は深く納得した。

「上様がそう思われるのも無理はございません。  
わたくしそどもも、未だに静山が天に帰つてしまつのではないか、と  
心配しておりますゆえ」

「月島、そなたが言つのは変だぞ」

家賢は笑つた。

「やうです。月島と静山。どちらも、この大奥に咲いた大輪の花。  
この世のものとは思えぬ美しさだと、みな口々に言つておりますよ」

口を開いたのは、家賢の隣にいたお美津の方。

唯一のあととり家侍の生母は、ふたりをほおつと見比べながら言つた。

「円島が昼なら、静山は夜。円島が蘭ならば、静山は睡蓮ではないか？」

「上様は、なんと上手く例えられるのぞ？」

「愛でてこそその花じゃ……」

家賢は少し寂しげに、つぶやいた。

静山は恋文にかかれてあつた家賢の悲しい気持ちを思い出していった。

秋の日は暮れるのが早い。

日も落ちてほどなくした頃、静山は万里小路の部屋に呼び出された。

「首尾はなかなかのよひやな」

万里小路は満足そうに、静山を見下ろした。

「上やんがエライ喜んではつたて、聞きましたで。このふんならお禰のお声もすぐに」

「そうでしょうか」

静山が不意に口を挟んだ。

「どういう事や。菊見の席に、あんたほどの美人がいて男が喜ばへん訳ないやろ。何か失敗でもしたんか」

「いえ。ただ、わたくしは……」

家賢は喜んでいたところより、なにか哀しんでいたように見えた。

「何や？」

「上様は、月島さまがお好きなんだと感じました」

「はあ？」

その言葉に、万里小路は顔色を変えた。

「……まだ、あきらめたらへんの？……あんたでもあかんのか？」

「……」

「何のためにあんたを呼んだと思うの？何のためにあんたを月島の部屋に入れた思とんの？……あんたと並べたら、年かさのいつた月島のほうが容色が劣るの、上さんに分からせるためやる？」

その作戦はあきらかに失敗だった。

静山と並ぶと同質エネルギーの交流によつてか、月島の容貌はさらり輝いていたからだ。

「ど、とにかく、なんでもええ。上さんの寵愛をもらつんや。月島への渴望が強いぶん、あんたへの欲望に火がつく可能性があるしな。こんなトコでぐずぐずする訳にはいかんのえ」

静山を下がらせてから、万里小路は大きなため息をついた。

『なんで、あれほどの美貌を持つてしてだめなんや。女の私がみてもクラクラする程の妖氣やのに。美しすぎるんか？もつと別のおなじのほうがええんか？

いや、あかん。今までは……

上さんの、丹島への情念が更に増してしまった今、平凡なおない』で立つべきではありません。どうやつたら、計画が進められるんか』

万里小路は 右手をぐっと握りしめた。

「お初の方が?」

円島は怪訝な顔した。

「はー。静山さまに一度顔を出せと」

墨越は困った顔で、文箱から伽羅きやりの香つのある文を取り出した。

“静山様へ”と宛名にある。

「円島さまに文を出しても無視されるからって、いつもこの部屋の静山さまに文を送りつけるなんて」

「せつこつ静山への文を、そなたは盗み讀んでるのあります。」

「ぬ、盗み、など……わたくしは局の責任者として吟味してくるのでござります。」

これは円島さまに対するイヤガラセです。……ああでも、断るわけにもいかないし」

文を読んでいる円島に向かって、墨越は屏口でしゃべり続けた。

「ふう。一度くらいお会いしてよこのではないか?」「はあ?」

「お初の方に、じつうされたる静山ではあるまー」

「し、しかし……好みのお初の方の元に行くのは危険ではありますねか」

「まあ、……危険であらひつな」

「円島さまー」

焦る墨越に対し、不遜な顔して円島は笑った。

「ふふふ、安心せよ墨越。上様の『寵愛を受けようかと』『静山に、まさかお初の方とて、無体しようとは思ひまつ』

「ほつ、やうで『ござりますね』

「だから、これはわたくしへの挑戦のつもりなのだ。静山は頭がよい。大丈夫じゃ。それに……」

円島の眼は、何かを企んでいるようだった。

「それに?」

「あの者のことが、少しほ分かるやもしけぬ

「それは、静山さま、の事で『ござりますか』

墨越の問いかに、円島は答えなかつた。

そう。

確かに、何を考えているのか分からぬ。

黒川藩が送りこんできた美しい刺客。

藩として単に大奥の実権に絡みたいだけなのかな?

後見となつてゐる万里小路は、すでに大奥の実権を握つてゐる。自分の推す娘を寵妃に加え、地位を磐石にしたいだけなのだろうか?

それでは、公家出身の万里小路と越後の小藩・黒川藩とは、何のつながりがあるのか？

万里小路に金をつんで大奥入りを狙う連中が山ほどいる中、財政のひっ迫していいる黒川藩が大金を出せないのは分かりきつたこと。

解せぬことが多かった。

「さすがじや」

お初の方はうつとりと声をあげた。

「お方さまには、ほんのお耳汚しで」

静山は琴爪をかくしながら頭を下げた。

「何を言つ。天女が爪弾いているようで、この世のものとは思えなかつたぞ」

お初に招かれた静山は、琴を披露してみせた。墨越以下数人の部屋を連れての訪問だった

「その赤みがかつた琴きん……滅多に見るものではない。なんと、その紅葉の打ち着と合つておつたことか」

楽器、小物、衣装、香などを テーナルに演出できるほど、相手をむむつ、と言わせることが出来る。大奥の上流階級は才女でなればやつていけなかつた。

「それは、『錦秋』といつ灘からの新酒さかぢや。静山とこゝしょに樂しみたいと思つての、膳と一緒に運ばれてきた杯。

朱塗りの椀には、紅葉の葉が一枚。そのまま酒がつがれる。

「わたくしは江戸から出たことがない。大奥に上がつてからは、もつと世間は狭くなつた。

そなた黒川藩の出身と聞いたが、ずっと藩元はんもとにいやつたのか？」

「はい」

「その割には、江戸風が板についておるの」

「三年前に江戸戸に上がつましにわこます」

澄まして静山は答えた。

「やうか。……黒川・越後はどんな所なのじや？」

「雪深い里さとでござります。冬はいつも果てるともない雪ゆきがしんしんと降り、丘も田畠も完全に白の壁におおこつゝれてしまひます。山は遠くにかすみ、吹雪ふぶきはいつおさまるのか見当みあわせもつません」

人間離れした静山の目に表情が表れた。  
少し遠い田は、凍てつゝ雪国をみていたのだろうか。

「そんな所でそなたを見たら、雪女かと見まじこそうじや。越後は雪ばかりなのか」

「いえ、水がぬるめば苗は育ち、夏は美しい櫛形山くしがたやまをのぞむことができまく」

「なるほど。そうそう、つむぎも、ひとり越後の者がおつての。」「  
れ、かよをこれく」

お初の方が呼ぶと、お犬と呼ばれる下つ端らしに十、十一歳の少女  
が現れた。

墨越はお初の算段が少し読めた。

お初も静山の身元を疑つてゐるのだ。

「かよ。おまえの藩は越後であつたな。どういう所ぢや？  
冬は前が見えぬほど雪が積もるのか？夏は櫛形山の眺めは素晴らしい  
のか？」

「は、はい。確かに雪は深いです」

上役に困まれる経験がない田舎娘は、顔を上げられぬままオドオド  
と答えた。

「櫛形山はどこですか？」

「櫛形山？」

かよは一瞬分からぬことを聞かれたため動搖した。

「夏になると見える山じや」

「お、いえあたしたちには、まつこ三しか見えませんでした……」

「まつこ三のお

お初はゆきくじと静山のまづを向いた。

『これは……』

不敵に微笑むお初の方が、急に歪む。

静山は、酒に何かを盛られたことに気づいた。

「あの」

墨越が取り繕おひと口を開きかけたとき、

「これは、したり！ そうで！」ぞこました

にひりと笑う静山があつた。

「農民たちは櫛形山が低く、棒状であったのをみて、ぼひこ山と呼んでおりました」

「ほお。なんと、どうであつたか。正式な名前を教えてくださいね」とは、さすが静山どじや。のう、ほほほ

うまく誤魔化したのか、どうか真実は分からなが……

笑いながら、どうして眠り薬が効かないのだろう、とお初の方は、いぶかしんでいた。

しかし、その瞬間。

静山はドサリツと崩れ落ちた。

「静山どじのー」

「静山やまー」

方々の声と手が、静山を取り囲んだ。

## 要注意人物

「で、わたくしに静山を引き取りに来い、と  
一連の出来事を墨越から聞いた月島は、別に何かを考えているよう  
だった。

「は」

墨越は青い顔をしてうなずいた。

「詰めが甘いな。お初の方は」

「はあ？」

類について少しなじるよつた口調の月島。

墨越には、なんとも幼く見えた。

「わたくしなら、もうちょっとマシなやり方を考える  
「マシとは、どういった？」

「色じかけとか……」

「……月島さま御自身で？可能だとは思いますが」

「冗談だ」

墨越に一本とられたようで、少し悔しかった。

そのまま奥の部屋に帰つていぐ月島を、あわてて墨越は追いかけた。

「あの、引き取りにいかなくていいのですか？」

「よ」

「え、ですが……あのつ」

「静山は自分で何とかするであろう」

奥に行つてしまつた距離からの声は少し遠かつた。

「何とかつて……」

墨越は眉をよせた。

「失神してゐるのこつ？」

口をとんがらせてつぶやいた。

まだ少しほおつとする頭を振つて、静山は御殿向きの暗い廊下を歩いていた。

墨越たちが部屋に帰されてから半刻ほど。  
はんじき

静山は倒れたふりをして、部屋の様子を伺つていた。

お初の方が月島を呼びつけることしか頭にないのを確認して、こつそりと静山は部屋から退散した。

「あかりさま」

「三吹！」

下働きらしい大柄の少女が部屋の戸口から静山に近づいた。

「解毒剤は、効きませぬか

「飲んでおらぬ。そんなに強い薬ではなかつたし……わたしには効きはせぬ」

「で、あつましょうな。マンネンロウで、眠気は覚めますが……」「よい。マンネンロウは覚醒しきるので嫌いなのだ」

その答えに共感した山吹は、静山の肩を遠慮がちに支えた。

「想定内のことだ。わたしが疑われるのは百も承知」「はい」

「お初の方に他意はない……それより、他の年寄・側室たちのほうが、目を光らせている」

「それは、月島さまも含めて……で、『わざこまますね』

一瞬沈黙がおりた。

「そうだ」

「あの方が一番の要注意人物だ」

なのに。どうしてこんなに心が乱れるのだ？

「わたしはあのお方が一番」わい

その言葉を耳にした山吹は、きょとんとした。

「いけませぬ。親方を裏切つては」

「もちろん裏切りはせぬ」

「では、なぜそのような“怖い”などと……わたしたちが唯一恐れるのは、親方だけ。一族の捷だけです」

違つのだ。

一族が結束するチカラとはまた違つた力で、月島は、静山を惹きつ

けるのだ。

「誰か来る！そなた、もつ行け」

山吹は闇に同化した。

「おばばの易、当つてたでしょ？」

「あの氣味悪い風体さえなきやね」

仲居か、お末の娘たちが、出てきたのは書庫からであった。

夜もふけ、亥の刻（午後十時頃）。

御火番が、回りだす頃であった。

一段低まつた板の間に、番台があり、その奥には背丈ほどもある書棚が、何十と並んでいた。

灯りは、その番台から洩れているらしい。

「そなた、新入りじゃな」

見えぬ存在に、静山は声をかけられた。

書庫の影になつて、白い頭にすぐに田線をつつした。

「ほほう、よう見つけた」

ボサボサに伸びた白髪頭に、すりきれた間着あいぎ、つまり打ち掛けを着ないままの小袖、背は非常に小さく、静山の胸くらいしかなかつた。

「一つの星が見える。禍々（まがまが）しい赤い星……そして、神

々しへ白い星じゃ。

恐ろしく大きな力を持つてゐる……その一つの星ばかりが本物なの  
か

田中まいりあじと輝き、黄色い歯をむこに近づこしてくる老婆の表情に  
おののいて静山は後ずさつた。

「そなた、何を考へておる

「わ、わたくしは……」

ぐつと息を飲み込んだ。

「円島さま部屋、中脇・静山です。あ、あなたにやうで向を  
「なに、円島の？」

質問には答えず、老婆はトトからなめ回すよつて視線を浴びせた。

「ふん。あの者の周りはおかしなヤツばかりじゃ……そして、今夜あ  
たり来そつじやの」

「つ、円島さまが?...」

静山はあわてた。

何やら足音も聞こえてきた気がする。  
急に胸がドキドキとしだした。

「今つとマズいのか?」

静山はぶんぶんと首を縦に振った。

「では、やうの奥の部屋に隠れておれ

番台の奥に小さな戸口があつて、戸を開けると、老婆の寝所らしい小さな部屋があつた。

静山は急いで、奥に入った。

老婆は、燭台の上にぱりぱりと番を垂りした。  
静山の番りを消すためである。

そのすぐ後

「おばば」

銀の鈴のよつたな声が響いた。

「おばば」

「なんじやい」

「つれないのお… 今夜は柿羊羹かきようかんを持ったのだぞ」  
その涼やかな声の主は、まわじく円島だった。

静山は息を潜めた。

「なに！？ 柿羊羹じやと」

老婆は嬉々とした声をあげた。

口を薄くあけ静山は、いつもそりと覗き見た。  
包みをのぞいて一人は、笑いあつてゐる。

「仕方ないの。柿羊羹を出されでは」

老婆は番台の下から、青い分厚い本を三冊取り出した。

それは洋書であった。

「せつぜつ手をつくして、やつと出島の知り合なじから送つてもうつ  
たんじや。

南蛮の……ふい、ふいそろひーとかいつ本じやつたな」

「わうわう。そじやー、フインロフイーー、お、アルケミーもある  
ーす」いではないか、おばば。でかしたわ」

円島は老婆に抱きつかんばかりの勢いだった。

想像も出来なかつた円島の嬌声に、静山は更に身を乗り出してのぞき見た。

「そなたは無理ばかり言ひ。そんな南蛮書ばかり読んでいつたい何をするのか……金も法外にかかることじや」

目を輝かせてページを繰る円島は、老婆の言葉などもう耳に入つてなかつた。

何か、タガがはずれたようだつた。

「これは、やはりエゲレス語  
ぶつぶつとしゃべり続けると、持つてきた風呂敷包みから、分厚い赤い本を取り出した。

青い本を読んで、またしばりすると今度は赤い本を開く。そして、何かを書く。

辞書を引きながら読み、翻訳していることが分からぬ静山には、月山の行動が不可解であつた。

「始まつたか」

老婆は慣れたように、あんどん行灯と火鉢に火を入れると、そつと書庫から出た。

「あれはな、書に没頭してあるのよ」

静山のいる部屋に入つてきた老婆は説明した。

「書を？お読みになつてゐるのですよね？」

「それも南蛮の書じや。以前は論語やうり、般若経やうりに凝つておつた」

老婆はあきれたように首をふった。

「あきれたやつじや。知識欲もあんこまでいけば魔物じや。女の身で、この大奥で……勉学をおさめて何とする」

「それで、円島さまは何とおおせに?」

「自分は、ただこの世のことが知りたいだけだ、勉学をおさめたい訳ではない、と嘆ひのじや」

しゃべりながら老婆は布団を敷き、着替えをはじめた。

「この世のことが、書に書いてあるのですか?」

「あての、わしには分からぬ。多少の易えきなら出来るがの。だが、円島は書には色んな世界が存在する、と面白がつてゐるのだ」

「このんな世界……で、何こますか?」

「だ、そうだ」

よつこじょ、と老婆は布団にもべつこんだ。

「わしがもつ寝る。そなた、帰りたければ帰るがよ。どうせ、円島は気つかぬ」

やれしくゆきられて静山は田を覚ました。

「静山」

眩しこ光の中こな、寝ぼけた子供のような顔をした円島が立つてた。

化粧もせず、崩れやすい片ははずしの髪が、ほどこじめじていた為、本来のあどけなさが更に際立つてみえた。

「そろそろ朝の勤めの時間じゃ。起きよ

「つ、月島さま！」

驚いて立ちあがつた拍子にドサリと肩から、打ち着が落ちた。いつの間にか眠つてしまつた静山に、月島がかけてくれていたものらしき。

書に没頭する月島から田が離せなくなつて見入つている間に起つてしまつたのだ。

静山にとつてこんな失態は、あるまじき」とやつた。

「わたくしは非番なので、大きな仕事はないが。昨日の件もあって、皆が心配しておるのでそなたは先に帰つたほうがよい」

「は、はいっ」

驚いたのと恥ずかしこのと氣まずいのが、混ざつて静山は顔をあげられなかつた。

逃げるよつに書庫を立ち去りかけた時、

「待ちやれ」

ふいに手をつかまれた。

月山はそのまま静山の頬から髪に、ふわりと手を触れた。

「髪が乱れておるではないか。せつかくの美貌が台無じじゃ。そなたはもうじき上様のお声がかかる身なのじやぞ。誰かに見られで

もしては大変じや」

間近で見る口元に微笑をたたえた円島の素顔。眩しくて胸が高鳴り、静山は息ができなかつた。

頬から髪をなであげる指は柔らかくて、優しくて。

自分はめちゃくちゃな姿をしているクセに。それが恐ろしくらい艶やかなのに。

声がかり候補の静山に氣をつかうのは、大奥御年寄の意識からだけだろうか。

それを思つと胸がちりつと痛んだ。

「円島さまは、どんな世界にお住みになつていらのじょつか  
ん？」

「書で色んな世界にいける、と書庫番の老婆が申しておつました」

「ああ」

円島は一ヤリと笑つた。

「いけるぞよ。天竺<sup>スリ</sup>でも唐でもオランダでもエジレスでも、あの世にも」

「あの世にも?...」

「……なあ、静山、そなた<sup>の</sup>の世は確かなものと思つか?」

そう聞かれると、急に足元があやふやになつた。

般若心経では、<sup>の</sup>の世は“空”と説かれているし、昔から<sup>の</sup>の世は“夢のまた夢”、“無常”と言わってきたからである。

「夢のまた夢”、“無常”と言わてきたからである。

「せうじゅ、いい加減なものじゅ。だがな、この世でわたくしたちは色々な苦しみにあつ。ほんに辛いこと、耐え切れぬことばかりじや。いんなに辛いのに、それを“空”でした、と言われてもな……」

自嘲氣味に月島は笑つた。

「だからわたくしは自分が納得できるまで、書を漁つてあるのじゅ。誰か教えてたもれ、助けてたもれ、と悪あがきをしてくるのじゅ」

大奥のトップに位置するこの女性に、そんなに苦しむ何があるのだろうか。

確かに月島は権力に執着が少なそうに見えたし、何か虚しく空うな時があった。

「それで……お分かりになつたのですか」

「分かつては遠のきじゅ……だが、自分自身であれ、とにかく」と一文には衝撃をおぼえた

「自分自身?」

「我々はこつも何かに惑わされておる。何かにならねば、何かをなさねば、と思わされておる。

大奥の年寄、武家の娘、母親、女のつとめ。他にも他人と比較して、自分にないものを数えて苦しんだり、嫉妬をしたり、はたまた出世や蓄財に励んだり。

……そんなこと本当は意味がないのだ。自分で作った、大きな山に苦労して苦労して登つてこよつたものなのだ。

『ああ、いい気持ちだ』と足を投げ出して、気持ちのよい草の上に寝こんでみたところを想像してみよ

足を投げ出す、など、娘としてあるまじき姿であったが、ずいぶんと幼い頃はそんな事をしていたような気もある。

静山は目を閉じて想像した。

春の草の香りを含んださわやかな風と、暖かな陽射しが、頬を撫で、どこからか小鳥のさえずりが聞こえてきた。

静山の表情に生気が灯った。

月島はその美しさと清々しさを見て微笑んだ。

「その時の気持ちこそ、自分自身でいる状態なのだ

「これが？」

「そうじや。その気持ちが本当の自分の姿なのだ。その姿でいる」とだけが大切だそうだ。

例え辛くともでも、病みやつれていよつとも、その気持ちでいられれば必ず状況はよくなる……

「本当にどうか

「分からぬ……が、わたくしはちょっと自分で試してみた。少しは効果があつた気がする」

月島は笑つた。

「どうしてどう？」

「一番自然な状態だからだそうだ。人間は無理をするとひずみが出る。ひずみはやがてどこかに溜まり、悪い状態につながる。

人間の知ることが出来る世界は、知れているそつじや。カエルは動いているものしか認識出来ないという。なら人間が見ている世界も、仏や神からみたら、まだまだ田隠しがれている状態なのではないか？」

静山は驚きのあまり声が出なかつた。

丹島の話しが、あまりにも突拍子がなくて、それでいてもつともつと聞きたい魅力に溢れていた。

「ああ、いかん！ もう時間じゃ」

配膳係りたちの声が遠く近くで聞こえ出した。

「ああ、でも……」

名残惜しそうにぐずぐずする静山を、丹島は書庫から押し出した。仕方なしに、早る胸を抑えて静山は廊下を歩くしかなかつた。

## 執心の女

「」にひとりの男がいた。

水戸、筑波山に集落をもつ、もはきつ裳羽服津衆の親方・炎才。

陽に焼けたがつしりとした体格に、きりりとした目と太い眉。  
渋い表情から生まれた皺さえも年輪を感じさせる、なかなかの美丈夫である。

年の頃は五十代の半ばといったところか。  
その炎才、囲炉裏の前で腕を組んで、何か思案に暮れている様子であつた。

「親方、どうされた？」

息子の龍才が尋ねた。

父親に似た風貌を持つていたが、その中に理知的な雰囲気が加わり、少し柔和されたものがあった。

二十代半ばのようである。

「…………」

炎才はしばらく無言で答えていたが、やがて口を開いた。

「今朝、お城より文が届いたのだが  
「はい」

「なかなか上様のお手がつかぬそうだ  
「まさか」

龍才は、信じられないといった顔をした。

「何か、あかりはしぐじつたのか？ それとも……素性がバレたとかつ？」

「落ち着け。しぐじつたりしどりん」

「では、なぜ？」

炎才は組んでいた手をほどいた。

「……わからん。ただ、万里小路さまの文には、上様には、他にご執心の女人があつて、あかりに気が向きたくのだろう、とあつたそうだ」

「」執心の女？』

その内容さえも理解できぬ、といつた顔で龍才はつぶやいた。

「わが妹に落とせぬ男があるとは……信じられぬ。それとも大奥といつところは、あかり以上のおなじが、『じりじりりこる、といつのか？」

「何を言つておる。あかりの器量以上のおなじなど、そうおりはせん。多くのお殿さまに田どおりしていただいた折り紙付きなのだぞ。それだけない。あいつには人を惹きつける？ 妖氣？ があるのだ」

「そう、そうだ」

龍才はうなずいた。

「とにかく、上様の『龍愛をいただからんことには、話がはじまらん。次期將軍候補のご注進など、夢の夢。まあ、今のところ、その『執心の女人は、すでに床さがりをしておるらしいし、懷妊しそうな特定の娘はそういう……我々にとつて悪い状況ではない』

「はあ」

不承ながらも、そう答える。

「奥の状況は悪くはない。殿に言われた命令は、ほぼ守れておる。あかりにすぐお手がつかなかつたのが計算外なだけだ。龍才、そろそろオマハの方の仕事にかかり

「はつ」

龍才は立ち上がりて部屋を出ていった。

いえよし  
家賢は数人の中脇、と、万里小路とで庭を散策していた。

「上様は、静山にはじめ興味あらじやいませんか」

万里小路は、声ひそかに尋ねた。

「ん……」

家賢は少し微笑んだ後、しばらく間を置いた。

「余も迷うておるのよ。……静山は何か、近寄りがたいのだ」

「それは美しそうなからですか」

「もちろん、それもあるが

歩を進め感慨深げな表情を浮かべた。

「何か……月島のことを思い出すゆえ」

それを聞いて万里小路は、やはり、とため息をついた。

「上様、静山は月島と違います。大奥のしきたりもよお守つてます

し、職務も見事にこなし利発で歌舞音曲の才もなかなかのもんです

「月島とて職務と歌舞の才は見事なものだ。だからこそ大年寄にまで抜擢されたのではないか」

「それは、そつでござりますが……若さが違います」

それを聞いて家賢はムツとした顔をした。

「もつ、月島のことはあきらめてくださいませ。幕府の安泰のためにも、一刻も早よひ若さをもつける」ことを第一に

「そんな事は、分かつておる」

そう言い捨てるど、家賢は万里小路から去つた。

家賢は悲しかつた。

月島を愛した日々が思い出されて、胸が痛かつた。

溢れる寵愛を『えたかつたのに、それに答えて欲しかつたのに。』  
懷妊できなかつた遠慮と、政治的な重圧に耐えかねた月島は、家賢  
から遠ざかつた。心が遠ざかつたのだ。

『余は……そなたさえてくれたらよかつたのだ。懷妊などしなく  
ても』

しかし、將軍には許されないことだった。

『世継ぎ、世継ぎ。そのせいで何人のおなごを抱かねばならんのか』

近頃では、好きな女といつより懷妊しそうな娘や年寄が推す娘を、  
義務的に選んでいる自分がいた。



月島は夢を見ていた。

赤い血が飛び散るのを。

真つ赤な血を浴びた狂氣の形相の父の姿。

恐ろしくて、必死に声を上げ逃げようとした

「はつ！」

目が覚めた。

胸がまだどきどきと鳴っていた。

「お氣がつかれましたか」

やさしい天女が微笑んでいた。 静山だった。

「わたくしは、どうした？」

「詰所でお倒れになつたのです。覚えておいでですか？」

「……ああ」

そうだ老中の土井と水野の対立意見書。

大奥から上様にとりなして欲しいと来た使者が鉢合わせしてしまつたのだ。

「あまりにも無礼です」

静山は思い出した怒りのため語氣を荒げた。

使者は我が我がと月島に嘆願を迫り、その露骨な身勝手さに月島は使者が帰つた後倒れてしまった。

「皆、保身のことしか考えぬのだ」

「『心痛をお察し申し上げます』

「職務ゆえ仕方ない」

『氣づくと部屋はもう真っ暗で、夜半のようである。

「そなたが付いていてくれたのか？墨越はまづいた？」

「墨越さまはお風邪氣味でして。あの、墨越さまをお責めにならないでください。わたくしが無理を言つておやばに屈させてもうったのです」

円島はわかつた、といった顔をしてから、額にあててあつた濡れてぬぐいを取り、身を起こした。静山は、少しほほとしたような顔で水を取りに行つた。

大奥の医者の見立てはいい加減だったので、静山は自分で処方した心労を少なくする薬を、医者からの処方だと言つて円島に飲ませた。

「つなされておいででしたが……」

薬を飲むと円島は少し落ち着いたようだつた。

「悪い夢をみた」

円島は手で額をおさえた。

髪がはらはらと肩をすべりおりる。

「色々と思い出したのだ」

そのまま円島は沈黙をした。

「そなた……人を殺めたことがあるか？」<sup>あや</sup>

思いもかけない円島の言葉に、静山は息をのんだ。  
「いや、そなたにそのよつな」とあるはずないの、  
苦笑氣味に笑つた。

「円島さま」

「ここ大奥は、分からぬ理由でよく人が死ぬ」

下を向いたまま円島は何かを思い出しているようだつた。

「その原因は色々だ。もともと体や心の弱かつた者もいるし、心労  
が多く耐えられなかつた者、妬みや呪いで死んだ者、色々とある」

しばらく間があいた。

「もちろん実際に殺された者もいる。……わたくしが年寄になるま  
で色々なことがあつた。事実わたしの手もきれいとは言わぬ。じゃ  
が、少しでもそういうことが無くなるように、どうしたらいいの  
かずっと考えておるのだが……未だに分からぬ」

「そのためにあんなに勉強をされていたのですか」

「いいや。大奥だけをどうこうという話でなく、わたくし自身がど  
う生きていつたらしいのか知りたかつたからじや。人間は生きてい  
くのに基盤が必要だと思わぬかえ？」

「基盤？信じる道とこうことでしようか」

「そうじや。そなたは神や仏信じておるのか？」

そう聞かれて静山は、答えられなかつた。

育ってきたのは、修験道、山岳信仰が強い地域だった。

だが寺もあり、それぞれの行事に参加していた。

どちらの存在も敬い、加護を得んが為、熱心にお参りをする里だった。

「わたくしの地元では神も仏もそれぞれに敬う地域がありましたが……それが生きていく基盤になつてているかどうかは不明です。

願を掛け、「利益を得る方法は色々と確立されてきたかもしれませんが、どう生きていつていいいのか、は分かりませぬ。分からぬときは知恵者や和尚様にお聞きしておりました」

「そなた、その答えに納得できたのか」

少し非難めいた口調で月島は揶揄した。

「納得できたものも、納得出来なかつたものもござります。納得出来ないのはわたくしが浅はかだから、と思っておりましたが」

そう言いつつ静山は、一方で答えを探してみいた。

「そなたが浅はかかどうかは問題ではない。その知恵者が、どうからその生きる方法を編み出したのかが問題なのじや。和尚なら、仏の道であろう。知恵者なら儒教や国学など学問からであらう。果たしてそれは正しいのか。

わたくしは疑り深い。だから自分で色々な道を勉強したが、実際的にどれもまだ使えぬのじや。わたくしが愚かであるからだろうか」

静山は息をのんだ。

円島の真剣なまなざしに青い光を見たからだ。

「わたくしょりすつと賢くこらひしゃぬ円島さまに向をまつ」とが  
できましょつ。……ですが、わたくしに一つだけ分かつたことが  
ござこまゆ」

斜め下から見上げた静山の顔。  
碧く濡れた瞳孔が光つた。

「それは何じや？」

「円島さまは答えを見つけるのが、すでに道となつておられる」と  
です。愚かなのではなく、答えがあるかどうかも分からぬものを  
追求する」ことは道のよつたな気がいたします。

そして、もうひとつは

「頭で考えすぎだと思います」

円島はハトが豆鉄砲をくらつたよつたな顔をした。  
思いもよらなに答えてあつた。

「いえ、考えるのは道として当然で」がこまゆ。ただ、心で感じる  
ことも必要なではないじょつか」

「…………」

「手を」

静山が両手を出して手の平を上に向けた。

「わたくしの手に円島さまの手をお載せください」

言われたままに従つた。

そのままやわらかな手がふんわりと月島の手を握つた。  
暖かなもののがなだれこんてきて、どこまでが自分のものか分からなくなる。

自分の細かな粒子と、相手の纖細な粒子が交じり合つ感覺。  
その粒子は月光のようなものであつたろうか。

「何か感じませぬか」

「ふわ、と暖かいものを感じる」

「わたくしもです」

静山の心臓の音と同時に、月島の胸は弾み、一人で共鳴しているようだつた。

それは今まで二人が生きてきて受けた傷だつたのかもしれない。  
嬉しさだつたのかもしれない

圧倒的な誇らしさだつたのかもしれない

誰にも理解されない孤独だつたのかもしれない。

不思議な満足感がふたりを満たした。

「ずっとおそばいたいのです」

「…………」

月島は静山の手をぎゅっと握りしめた。

「そなたとは何かが似ている」

「…………恐らく」

月島は腕を伸ばすと静山と静かに抱き合つた。

「よかつた…今朝は機嫌がよろしくて」

風邪あけの墨越がホツとしたようにつぶやいた。  
その言葉を静山は聞き逃さなかった。

今朝は、といつゝとは、他の日はどうなのだ。  
倒れるのが日常化しているのだろうか。

食い下がる静山に音をあげた墨越は、しぶしぶ口を開いた。

「円島さまは、職務の気遣いと、実家の気遣いが重なつてお倒れになつたのだと思いますが……ご実家も複雑なんです。昨日弟さまから文が届いてまして。せつとお金の無心です」

「（）実家つて、確か御家人の？」

「はい。代々続く旧家です。が、あまり財状がよろしくないりしく、円島さまにベツタリ頼られているんです。なにしろ、大奥の御年寄には大きなお金が入る、と思いこんでおられますから。しかし大奥では、出て行くお金も半端ではないのです。

亡くなられたお父上さまは放蕩家、後を継がれた弟さまはお金の勘定にうとい。ゆえに、いくどか騙されたりもしたらしいのです。

だもので、何か大きな相談があると円島さまにお伺いと、お金の無心の文がくるのです」

静山はうなずいた。

「月島さまは、未だに女の身で」実家のすべて背負われています。大奥で生き残るだけでも大変な重労働なのに、ご実家も負担をかけるのです」

墨越は、はああとため息をついた。

「冷静な月島さまも、じ実家には複雑な心情があるらしく、手紙が来ると決まって機嫌が悪くなります。よく体調も崩されます。……本当は、の方そんなに強くないのです。皆には、それが分からないのです」

「ええ」

静山はあいまいにうなずいた。

精神も体も決して強くないのは分かっている。  
あれだけ纖細なのだから。

でも、何かが違う。

そう。

その纖細な人間が、それほどの重圧に耐えていいる状況自体が異常なものではないか。

強くあらねばならぬ、とは何ぞ？

手足が抜けるような重り、たとえば5000kgの重りを持ち上げよ、という話と同じではないだろうか。そもそも不可能な事態。

それをやっている月島……

静山は強い不安にかられた。

大奥の警護を忍者がしていたのは、案外知られていない。

忍者たちは、今でいう総合警備会社のように大奥以外にも江戸城で、普通に要人のSPをしたり、出入りの業者をチェックしたりしていた。

もちろん諜報活動も行っていたが、それを使いこなせるのは、要人のうちでも少なかつたものと思われる。

諜報活動をする部下を月島は持っていた。

が、忍者ではなかつた。

それは大奥にいる自分の肝いりの数人の女性たちだった。

「静山さまに頻繁に来る文は黒川のふみご実家からのものだけのようです」

静山の部屋方に任命した、おまつが伝える。  
おまつは頭がきれ誠実な女である。

「どうにか中味を見よつと思つたのですが、すぐにお焼きになつてしまつのです」

「ふうん」

怪しい行為だ。

『何かを企んでいるのは必至であるが、持ち物はすべて検閲を受け

てこる。

「静山が常に身につけている道具や、特に『氣』に入つてそばから放さぬものはないか？」

「静山が常に身につけている道具や、特に『氣』に入つてそばから放さぬものはないか？」

「はあ」

おまつは記憶を辿つていぐ。

「分かりませぬ。『おひら』に来られてずっと身につけておられたのはないよつと思つます。かどぞしこなぢま……せり」

「どうした？」

「『せり』にえま、この間来た『つげば屋』は静山さま、『おひら』に来つました」

「『つげば屋』とは何ぞ？」

「かんざしや小物、化粧品などを扱う、小間物屋でござります。丹島さまのお部屋は『三条屋』御用達なので、おかしいな、とは思つたのですが、藩あがりの静山さまゆえ特別な『麗眞店』があるので、とか申されて」

「万里小路さまが出入りを許可されたのか？」

「おまつは、うなずいた。

「やうか。そこで静山は何を買つたのじや」

「確かに……かんざしを一本、髪あぶら、おしりい、だつたと思つます」

「おまつ、もし出来れば、静山が買つた……おしりい、を盗つ

てまいれ。紙に「つまみほび」と。出来るか?」

「はい」

「くれぐれも無理をせぬようにな

将軍が大奥に泊まるのは忌田以外の田で、月の半分くらいである。その中で、いかに将軍のおめがねに叶つか。

チャンスその一

権力のある御年寄のコネによつて、将軍の身の回り係りに送り込んでもらひ。御中脇である。

チャンスその二

朝の総触れ、つまり「お鈴廊下での謁見」時、声をかけてもらひ。から気に入った女性を、将軍が選ぶ。

チャンスその三

御庭御目見。旗本以上の娘が綺麗な着物を着て、庭を歩く。その中で、気に入った女性を、将軍が選ぶ。

通常、将軍に直接目通りが叶うのは、身分が高い“お目見え以上”のクラスだけだったが、歌舞や楽器の得意な者は、お目見え以下であつても田に止まることがあつた。

とこう訳で、

ここしばらくは、何となく無難に女人を選んでいた家賢であつた。

そんな中

とつとつ静山の名が、朝の総触れで上がつた。

「こつたいじうなることかと思ひましたで」  
万里小路は肘掛に体をもたせかけながら、嬉しさと不安が入り混じつたような声を出した。

そのまま前に控えるのは月島と静山。

「月島さん、あんたきちんと面倒みたつてや。分かつてやるやうつけど、粗相のないようにな」

「はつ」

月島は頭を垂れた。

万里小路が静山の後見であるかぎり、万里小路に静山の不審な行為を話したとて一笑に付されるだう。あちら側の人間なのである。

静山の意図が分かるまで、家賢との床入りは避けたかったのだが。

「最近は上さんも、お床入りした娘に手もつけんと休まれることが多々あつて……そりそろ、お年で役にたたんようになつたんかと心配してますんや」

「お年による、陰萎いんいであられるのでしょうか」

「分からん。侍医たちは大したことない、精力のつくもんをお食べになつて、ええおなごを側に置くのがええといづばかりや。まあ、いい加減なことや。けどまあ、それで」

「それで、静山を?」

万里小路はにやっと笑つて大仰にうなずいた。

「やうや。全く何が味方するかは分からへんけど……けど、今の状況は、重い」

「はあ」

重責任務というわけである。

「上さんも少し焦つてはるんや。男としても、お世継ぎのことをしても……」

そんな状況やから、静山

「はい」

「頼みますえ」

無表情のまま静山はうなずいた。

# あかり（前書き）

## 第一章

## あかり

「あかり、おまえももう十五になつた。これからはサエらについで、女人として新しい技を身につけるのだ」

十五歳になつた夜、あかりは親方にそう言われた。  
よく分からなくて、はい、と答えたが、新しい技ってなんだらう。  
早駆けや力技では男の子たちに叶わなくなつたとしても、道具投げ  
や吹き矢なんかじや、まだまだ自分の方に部があつた。  
またひとつ新しい技を加えられるなら、それは頼もしいことに思えた。

水戸筑波山の麓。

野山を耕し細々と生活する村人たちは、他の顔も持つていた。  
忍び裳羽服津衆としての顔である。

水戸藩の御用達にして密かに結成された諜報集団は、武士から分かれた一団であつた。

一族の長を中心に剣術を習い、然を読み、技を鍛えるといった伝統を持つていた。

その裳羽服津村のはずれに、あかりは母と一人で住んでいた。  
だが、その母も十二の年に死に、近所の人に面倒をみてもらひながら暮らしていた。

来るよう言われていた部屋に入ると、五つ年上のサエと同じ年頃の勘介かんすけがいた。

「あかり、今からあたしが勘介にする事をよく見ておくんだよ。次にあなたにやつてもううからね」

「……はい」

いよいよ新しい技の練習だ。

サエは勘介の肩に手をかけると、媚惑的な目をして勘介を見つめた。弾かれたように勘介はサエの口に吸い付くと、そのまま舌を絡ませる。あい息を上げた。

言葉も出ないあかりは、口を開いたまま後ずさった。

「あかりー・みく見ておきなセー」

「でも」

サエは片手であかりの腕をグイッと掴んだ。

「いひよー」

そのままサエはあかりの唇を奪つた。

「いひして……唇の弾力を楽しんだり……相手の舌を強く吸つたり絡ませたりすると、気持ちいいでしょ」

「あ、あ……」

サエの繰り返される愛撫に、あかりは腰から下の力が抜けそうになつた。

「ふう」

その様子をみたサエはあかりを離した後、肩を落とした。

「あんた、吸い口くらい見たことあるでしょ」

「うん……でも」

見るとするのと大違ひだ。

「「」の先したい？」

「うん」

何だからずかずして気持ちよくて、たまらなかつた。

「じゃ、勘介、頼むわ」

「おひ」

「からを見ていた勘介が嬉しそうに笑つた。

「えつ、やだ」

「え？」

「勘介はヤだ。サエがいい」

「なんだよ、それ」

「だつて」

なんだか男とするのは汚れるような気がした。  
はあ、とサエは大きなため息を吐いた。

「分かつた。……勘介、あんたもう行つていよいよ

「えー 今日はやれる思つたのに」

「仕方ないでしょ。お姫さまは、まだ男が怖いんだから  
ぶつぶつ文句をつづ勘介をサエは部屋から追い出した。

「あかり、今日は最初だから言つておくれ」

布団の上に正座をしたサエは、向かい合つたあかりの目をじつと見  
た。

「これからするのは技だといふのを忘れないよつてすること。女の  
忍びとして男を籠絡するのも技術のひとつなんだよ。ただ……最初

は快樂が大きいから体にひきずりないようにするのが大変なんだ

「ち、ちの口吸い技を思い出しき、あかりは「くつとつばを飲み込んだ。

「ち、サエはもう何ともないの？」

「ふつ、そんなことないさ。あただつて、気持ちよけりや感じるよ。だけどね、これはお役目だ、つてことをしつかり頭に入れておけば、心のどこかが冷静でいられるんだよ」

「ほんとに？」

「ああ」

「あたしには無理かも。だつて、ちの口吸われて、ぎゅっとされたら、その人のこと好きになっちゃう気がする」

「それはお役目だと思つてないからだよ」

「そりがな」

「それと慣れだよ」

「慣れるの？」

「ああ。手裏剣でも綱渡りでも練習するだろ？あれと同じだよ」

「ふうん」

そう聞くと大丈夫なような気がした。

サエはこれから起きたシビアな事実を、あかりが理解していない事が分かっていた。

「後は相手のやなところを忘れないようにする」とだ。あんた勘介のやなト「言つてみな」

「バカなトコ?」

「うーん、それもいいけど、口が臭いとか、田がヤラしそうとか、肌が汚いとか、そーいつた生理的に嫌なところだ」

「勘介そんなに悪くないと思つた。がざつでちよつと田がヤラしいけど」

「でしょ? あんたを見る田がいやらしげ、ねつとりしている、汗臭さやう…」

「そこまで言わなくとも」

あかりはきや、きやと笑つた。

サエはあかりを布団に押し倒した。

「でも、今日はいいよ。初めてだからね」

柔らかい乳房と乳房を合わせ、サエはあかりの臉を指で優しくなぞつた。

無邪気に頬を上気させて目を閉じているあかり。

その姿にサエの胸は痛んだ。

あかりは頭を抱えつづくまつていた。

毎夜、毎夜、男と交わり、快樂の地獄に落ちていた。

『慣れだよ』

サエが言つたのは、『慣れ』だったのか。

確かに、三人の男たちと順番に行行為を行えば、相手の人格など気にしていられない。

周到に用意されていた男たちは、みな妙齢で技巧達者。勘介など足元にも及ばないだろう。

相手を感じさせ、自分も気持ちよくなるよう、色々な指導が行われた。

言われたことが出来るようになるのに反して、心は冷め、体は快樂だけを求めていた。

「サエ、あたし、もうだめになっちゃうよ  
あかりはサエに泣きついた。

「あたし、最初サエにしてもらった時、びきびきして嬉しかったのに、何か心が暖かかったのに……もう今はやることしか考えてないの。好きものみたいになっちゃったの」  
「あかり……」

「あたし、もうダメだ。もうよく分からない  
サエはあかりの肩を優しく抱いた。

「大丈夫だよ。……あたしも通った道だからね。  
もう少ししたら、あんた月のものがくるだろ？ そうしたら気持ちも変わるし、その後は快樂に溺れていられない程、体を動かす修練が待っているから。

筑波山を何回も駆け上がったり、降りたりするんだよ。つらくてヘトヘトになるよ

「ほんとう？ それで、体の欲望はおさまるの？」

涙のたまつた目であかりはサヒを見つめた。

「ああ。大丈夫だ」

少し安心したあかりは、とにかく早く月経が来てくれるよう願った。

でももし……月のものがきても、おさまらなかつたら。

あかりは、一族に伝わる薬湯書を開いた。

今までに忍びの智恵として、薬草の知識は教えられていたが、自分から求めて探すのは初めてだつた。

数十冊からなる薬湯書は、驚くべき内容を記していた。

毒物・幻覚薬・媚薬・解毒薬……気になつたのは、墮胎剤や避妊剤の項目。

『あたし……やや子が出来てたりしないだらうか』

月経が来る日づけから換算して性技巧の修練が行われていたのは分かつていたが、やはり心配であった。

色々考えながら、薬湯書を真剣に読んだが、結局、色狂いを治す薬を見つけることは出来なかつた。

## 龍才（つゅうさい）

「親父<sup>おやじ</sup>の…」<sup>おやじ</sup>してあかりに鳶<sup>つた</sup>かずらの業を行つた…」

十八歳の龍才<sup>つゅうさい</sup>は田を走らせて、袴羽服津衆の長であり父親の炎才<sup>えんさい</sup>の首元を締め上げた。

馬を走らせ飛び降りてから、一瞬のことだった。

「あかりはもう十五だ。そろそろ女として」

「そんな事を言つてゐんじやねえ！」

周りにいる長老たちが、あわてて龍才を引き剥がそうとした。

「あんたはつ！ 自分の娘になんて事をしたんだ」

「…娘だから」<sup>むすめ</sup>、一族の辻には誰よりも従つてもらわねばならん。おまえこそなんだ龍才。後とりともあろう男がなんてザマだ

「うぬわこつ！」

龍才は自分を取り押さえていた男たちの腕を振り払つた。

「あかりはあんたの何だ？ 使い勝手のいい道具か？

それじゃ、あまりにもあかりが可哀相だらう…本当の娘だという事も知らず、ずっと下人として一族の辻に従つてきたんだぞ」

「おまえはあかりが妹で、抱けなかつたことに腹を立ててているだけだ」

龍才はぐつと黙つた。

「親父どのが悪いんだ……俺は、俺は、ずっとあかりを」「だから、おまえの居ぬ間に薦かずらの業を行つたのだ」  
あさり、と歯を鳴らすと龍才は、「うわー」と叫んでそのままへ飛び出した。

悲しくて、悔しくて、死んでしまったかった。  
なぜ、俺は忍びなんかの家に生まれてしまつたのだろう。  
なぜ、あかりは妹だったのだろう。

炎才が憎くてたまらなかつた。

あかりは筑波山を駆け登つていた。  
息があがる。

今日はこれで四度目だ。

サエが言つたとおり、倒れそうなほど激しい修練が始まつたのだ。  
ただし、用のものはまだ来ていなかつた。

『どうして来ないの』

赤ん坊を孕んだかもしれない恐怖を覚えながら、毎日を過ぐす。

あまりにも激しい運動のため夜はあつとく間に寝付いてしまつて  
いたが、それ以外の時間はずつと不安を感じていた。

『もし、出来ていたらあの薬を使わきやいけないんだろうか』

薬湯書の墮胎剤が何度も目に浮かんだ。

そんな日が続いて四日目。  
ふいに月経がきたのだった。

「いたた」

遅れてきた月経の痛みは強かつた。

山登りを免除されたあかりは、家で薬草を煎じていた。

「あかり」

「龍才さま」

ひきつった笑い顔で龍才はあかりの元を訪れた。

あかりは母親が死んでから、ひとりで小さな家に住んでいた。  
蓑羽服津衆の集落内ではあつたが、ひつそりとした場所にあつた。

「何を作つておるのじや」

「痛み止めです」

「どこか痛いのか」

「ええ、ちょっと腰が……」

あかりはあいまいに笑つた。

「いかん、いかん。俺が煎じてやるから、おまえは寝ておれ」  
「でも、龍才さまにそんな事をさせては……」

「いいから。おまえは寝ておれ」

強く促されあかりは、布団に入った。

土瓶に入った薬草をしばらく混ぜかしたり濾したりしていた龍才だつたが、作業が終わると出来上がりに持ってきてくれた。

「さあ、飲め」

体を起しすのを手伝いながら、あかりに湯のみを差し出した。

血の氣のない白い顔は、夕顔のようでこつそつと優しく思えた。

「ありがとうございます」

「そうじゃ、おまえに花かざしを買つてしまつたが。おまえ、前に欲しがつておつたろう」

「ええつ？」

龍才は懐から、布に包まれた花かざしを取り出した。

銀色の地に、先に大きな円がついており、その中に牡丹の透かし彫りが品よく彫つてあつた。

「わあ、何てきれい」

「気にいったか？」

「はい」

町で金持ちの娘たちがつけている、ビラビラと揺れるよくな飾りのついたものより、シンプルで技術の高にかんざしのほうが、あかりは好きだった。

「あの……でも、龍才ちゃん、こんな高価なものにただいてよこのでしょうか」

「あかり」

龍才は真剣な顔をした。

「おまえには、安物は似合わん」  
不思議そつにあかりは首をかしげた。

「おまえはな、じんなり口臭い、鄙ひなで埋もれているような女じゃな  
いんだ。

御殿女中のよつて贅沢で、きらびやかな世界じゆへ、おまえにふさわ  
しい」

「龍才さま？」

「あかり、じんなトトにいたんじゃおまえは一生草モノだ。それじ  
やあんまりにも惜しい。

どうだ、俺といつしょに江戸えどにいかねえか？」

「江戸えどに？」

「ああ」

「龍才さまといつしょに？」

龍才は力強くうなずいた。

「俺とめおとになつてくれねえか  
あかりはぽかんと口を開けた。

あまりにも突然で、理解できなかつた。

龍才はあかりにとつて、次期親方として敬う人物であつて住む世界  
が違う人間であつた。

「俺の事が、きらいか？」

「いえ。決してそのような……ただ、あたしにとつて龍才さまは尊  
敬する方であつて、その」

「尊敬なんかするな！」

龍才はあかりを抱きしめた。

「あ……」

その瞬間、あかりはそくそくとした鳥肌がたつた。

だめ。

肌を合わせられると、欲望の波に押し流されそうになる。

「だめですっ！」

あかりは龍才をつき離した。

「あ……」

そして目が合つた。

ふたり一様の感情。

龍才の眼には驚きと失望が。

あかりの眼には恐怖と後悔が。

龍才は一瞬つなだれたように視線を落とし、そのままあかりの家から出て行ってしまった。

ある日、衆の若者・三五郎さんごろうが殺された。

二十一歳の三五郎は、忍びとして遜色もなく力自慢の男であったので、村では騒然となつた。

首の後ろを鋭利な刃物で深く刺されていた。

よそ者がやつたのか、それとも内部の者か？

何度も長老たちが、集まりを持ったが手がかりはつかめなかつた。

そんな中、龍才は竹吉の様子がおかしい」と云がついた。

「ちょっと来い！」

竹吉は村の若者衆の一員で、ずるがしこいネズミのような田をした若者だった。

「いてて、いて、痛いですって」

「おまえのやつた事は分かってるんだぞ」

「えつ！何を」

「三五郎のことだ」

「お、俺は三五郎を殺してません！」

「違う。おまえと三五郎は」

「違つんですっ！俺は止めとけつて止めたんです！」

「何を止めとけつて？」

鋭い眼差しで睨む龍才。

ハメられた事に、気づいたが既に遅かった。

「あ、ああ……」

と、竹吉は言ひついで口を開いた。

「俺たち、薦かずらの済んだ娘に、夜這いをかけよつて話しひなつて。いや、その昔からの慣例だし、薦かずらの娘は体が欲しがつてしまふがいいから、これは人助けにもなるつて」

「薦かずらが済んだ娘？」

「あかり、ではないか！」

「なんだとお」

龍才は眼球をひんむかんばかりに見開き、竹吉の首根つじを締め上げた。

「「めんなさい、「めんなれ」」

息が苦しくて最後は声にならない。

龍才は力をゆるめた。

「話せ」

「「ううう……お、俺があかりの家に行つた時は、すっげー抵抗にあつて、結局何もせずに帰つて来ちました」

「おまえの他に、あかりの家に行つたのは？」

「三五郎です。おれが前の日に失敗したの聞いて、『俺は大丈夫だ。おまえみたいな失敗はせん』って息巻いてまして……」

三五郎を殺したのはあかりなのか？でも、じゅうりき強力で忍びとして経験もある三五郎とあかりじや、どうみても三五郎に部がある。

あかりが殺される事はあっても、三五郎が殺されることはあり得なかつた。

「絶対にあかりが三五郎を殺したんですって。誰も信じじやしないだろうけど、俺には分かる」

「なんで、そんなことが分かるんだ」

「あかりを襲つた時、俺は殺されかけたんです」

「それは、おまえが忍びとして未熟だからだ」

「や、そりや、俺は龍才をまや三五郎とは違つてへボですけど、あかりはその、ものすこく強いんですよ。……のうで、あの家には忍びの俺たちにも分からぬほどの仕掛けが山ほどあるんです」

あかりの母親が女だけの家を守るため、何か特別な仕掛けをしていたのだろうか。

「三五郎は、ひっかかるなかつたのか？」

「知りません。止めとけって言つたんですよ。なのに、余計やる気を出ししちまつて」

自分の能力に自信がある三五郎の性格では、あかりめはしないだろう。

「だけど、三五郎はあかりの家ではなく、自分の家で死んでたんだぞ。あかりが家で殺したのだったら、あの者を運ぶのは、かなり骨折りだ。馬もない、不可能だ。やはり、あかりが殺したなど、つじつまが合わない」

「いや、あの女です。妖術を使って三五郎を運んだんです」

龍才は竹吉の話など、もう聞いていなかつた。

竹吉を十分に脅して口止めをし、他の若者にも一族の娘に手を出さぬよう言ひ渡した。

歩きながら龍才は、考えた。

あかりが手を下したのではないとしても、何かあったのは確かだろう。

竹吉の言ひ口づけから考へても、あかりが無関係とは言つきれない。

急に三五郎の首の傷と、あかりにせつたかんざしが頭に浮かんだ。

『あかりのか?』

## 生ある道

龍才が家に帰ると、炎才が呼んでいるとの言伝を受けた。

炎才の部屋に入ると、あかりが居た。

龍才は驚いたが、何気なく髪にさしたかんざしに皿をやつた。艶のある黒髪に、銀製の花かんざしはきちんとおさまっていた。

「龍才、来たか。座れ」

跡取りとしての座場所は、炎才の右隣と決まっていた。

あかりとは向いあう形になる。

竹吉から聞いた話と違い、あかりは不気味なほど落ち着いてみえた。

「龍才、あかりは、今日からこの屋敷に住む」「はあ」

「村はずれの一軒屋におな」「一人でいると、何かと物騒のよつでな」その言葉を聞き、龍才はびくんとなつた。

炎才は横目で、息子を見ていた。

「三五郎は修練の失敗で死んだのだ」

その言葉に龍才は息を飲んだ。

親父は、三五郎の事件の犯人を知つていてる?

「ではまさか」

あかりは、無表情で龍才を見つめていた。

そうだ、と返事したも同じであった。  
それがどうした、という表情にもとれた。

「よいな、三五郎は修練中に死んだのだ。おまえ、あかりの面倒を  
みてやれ」

そのまま炎才は、ふたりを残し部屋を出ていった。

しばらく無言の時間が流れた。

「あかり……三五郎を殺したのか

「はい」

「どうやって殺した」

「三五郎のうちに行つて誘惑をし隙をみて殺しました」

あかりから三五郎の「うちへ？」

「なぜ？」

「…………」

あかりは口をつぐんだ。

「大体の話は竹吉から聞いている。おまえを責めているのではない。  
ただ、三五郎よりも非力なおまえがなぜそこまで出来たのか……三五郎を誘惑したとて相手は忍びぞ。そつそつ簡単に気をぬくとは思えん」

しかしあかりは今度も口を開かなかつた。  
炎才はそれ以上の質問は止めた。

言いたくない事を、それ以上聞く必要もなかつたからだ。いつたい、あかりは何を考えているのか。

この間まで無邪気に笑つていた少女は、人を殺め、何を考えているか分からぬ無表情な娘へと変貌してしまつていた。

三五郎事件は修練の事故といつことで、袴羽服津衆内は解決した。もはきつけ炎才と長老たちが、そう決めたからだつた。

不透明な仕事をしている忍びには、長が決めたことを詮索しない、という不文律があつた。

また、三五郎が独身であつたこと、皆からあまり好かれていなかつたこと、などから、決定に反対するものは無かつた。

「なぜもつとあかりの面倒をみてやらん。薬草を取りに連れて行つて欲しいと言われているのだろう」

不機嫌な龍才に、父親は声をかけた。

「……親父どのこそ、あかりに大甘ではないか。今頃になつて父親面か？」

炎才はにやりと笑つた。

「おまえは、本当に子供だ。あかりのほうがよつぽどしつかりしておる」

「では、あかりに後を継いでもうえばよからう」

「おまえは、あかりの何を見ておる。あかりの忍びとしての腕は相当だとは思わんか？自分より実力のある三五郎を倒したのだぞ」

「それで、親父どのは喜んでおるのか」

「おひよ」

炎才は腕を組んで少し遠い目をした。

「人間はな、ぎりぎりで追い詰められた時、本来の力が發揮されるのだ。あかりは三五郎に体を奪われた。

しかし、その後でちゃんと相手を倒してある。復讐心に燃えただけでは、三五郎を倒すことなど出来なかつたであろう。事を達成するには氷のような冷静さと炎のような情熱が必要なのだ」

あかりは三五郎に体を……？

龍才はその言葉に衝撃を覚えた。

『だから、あかりは何も言わなかつたのか？』

茫然とする息子を見て、炎才は少し声を落とした。  
「おまえも、いい加減にあかりの事はあきらめろ。  
いや……近くにいて、それは無理な話か……」

背を向け去つていく炎才。

初めて父親が息子に詫びて居るよつと見えた。

袴羽服津の長として生きると決めたときから  
親としての愛情を優先させることははずつと無かつた。

そしてそれは

皮肉にも息子が、母親の違う妹を慕う結果にもなつてしまつた。

あかりは乾燥させた益母草やくもやくを、黙々とくだいていた。

薬草園にある小屋は、薬庫であり調剤所でもあったのだが、最近ではそこにすっかり入り浸つていてあかりであった。

小屋は炎才の従弟である雲才うんさいが管理をしていた。

雲才は体が弱いため忍びとしての実践を行うことが出来なかつたが、聰明で知識が豊富な男であつた。

一族の医者も兼ねていてといつてよかつた。

しかし、今小屋にはあかりひとりだつた。

龍才はあまりにも熱心に作業をしているあかりにしばし見とれた。

台の上には色々な薬草と書が散らばり、一方では火にかけた土瓶がぐつぐつと音を立てていた。

「また、新しいくすりを作つておるのか」

龍才はあきれたように言つた。

「龍才さま」

あかりは緑色に染まつた手の動きを止めた。

「だつて、女人の病に効く薬が全くないんです。雲才さまつたら…  
揃えてないんです。

材料もぜんぜん足りません。芍薬がもつと必要なんですが、この時  
期じやもう手に入らなくて…

来年に向けて今から植え付けないと困ります。ああ、そりだ

龍才さま…」

「な、なんだ?」

「今度、町で市が立つ日は、連れて行つてもらえませんか  
「市に?」

「はい。畠山の薬売りも店を出すと聞いています。それを見たいのです」

「龍才どのほうが詳しいのではないか」

「龍才わがは、お金を出し惜しみをなさぬよ。」

異様なあかりの迫力に飲まれ龍才是市に連れていく約束をしてしまつた。

しかし、じとじとあかりは凝り性であったのか。

いや、水を得た魚のようだ。

薦かずらの業や三五郎の件を考えると、別人のようだつた。

龍才是知らなかつたのだ。

一つの事件があつたからこそあかりは田覚めた、といつひとを。

忍び、と女。

この一つが重なると、過酷で苛烈な運命は必至となる。

自分の体と心を守ること、薬はなくてはならぬものであった。

催淫剤や幻覚剤だけでなく、妊娠しないようにする薬や、月経痛を軽くする薬が欲しかった。

また、男に体をあずける任務を実行するにあたっての幻覚剤の工夫もしたかった。

今回はオオカミナスビを服用する事によつて覚醒状態を保ち三五郎を刺殺した。

感情が麻痺し任務は遂行しやすくなる。

ただ薬は危険でもあつた。

オオカミナスビを使用した後の気分の悪さといつたらなかつたからだ。

麻薬は量の調節や使用する部位がむずかしくまだまだ情報と実験が必要であつた。

あかりは薬に没頭していった。

## 新たな打診

それから数年がたつた。

雲才を凌ぐ知識と薬剤の在庫を持つ事になつたあかりは、一族では女医師として認められるようになつていた。

反面の悩みは、年頃になり美しさに磨きがかかつてきた事であった。尊敬を集めるのに淫靡なる美しさは大きな障害だつたからだ。

薬草を探して山を歩く姿を見て妖術を使うのだ、などと言つものもあつた。

一部の者からは炎才や龍才が親子共々あかりに骨抜きにされているのではないか、という噂もたつていた。

炎才を悩ますそんな事態に、朗報とも言える使者がやつてきたのは、暖かい春風ふく菜の花の咲く季節のことであった。

「こ」の間、お城からのご使者が来ての

龍才とあかりを目の前に炎才は口を開いた。

「裳羽服津衆から頭のよい美しい娘の隠密が欲しいと言われたのだ」

「何ゆえにござりますか」

龍才はあかりに該当する話なのだと推測した。

「今は詳しい」とは言えんが、いざれは江戸城大奥に御殿女中として入りこむためだ

「ご、御殿女中！江戸城大奥に？」

あかりと龍才は顔を見合わせた。

「そ、それで、あかりをそのお役目へ？」

「そうだ」

めずらしく炎才はキセルを口に持つていった。  
すうつと吸い込み、しばらく待つて、ふうーと煙を吐いた。

「だが、その任務は何人かの候補を立て最終的にひとりだけが選ばれる。お城での検分や、武家の娘としての修練が終わつた後、一番相応しいものを選ぶのだそうだ」

「ではあかりが大奥に行くと決まつた訳ではないのだな」

「まあ、そうだが…」

炎才は少し口調を濁した。

「わしとしては、あかりに行つてもらいたい、と思つてある  
キセルの中の灰を落とすため、囲炉裏のふちをカンカンと叩いた。

「今、村であかりの存在がどう言われているか、分かるな」  
その言葉にハツと顔をあげたあかりは、しばらくして「はい」と答えた。

「それは村の連中の勝手な言い草だ。あいつらあかりに助けてもらつたクセに、妖女だの何だとバカなことを言いやがつて……そんなやつら放つておけばいいんだ！」

「龍才！」

「だつて、そうだろ親父！あかりは」

「いい加減にしないか」

切れあがつた眼がキツと龍才を睨んだ。

「もはきつ裳羽服津衆は、お城の殿からずつと過分な期待をかけていただい

ておるのだ。今度のお役目は天下の大事業ぞ。藩とて伸るか反るかの大博打なのだ。

もし我々がしくじれば我が藩はタダでは済むまい。それほどのお役目なのだ。それを……その榮誉を殿は我々に与えてくださつたのだ。なにおまえは何というたわけた事を言うのか

「申し訳ありません」

龍才は打たれたように頭を下げた。

「あかり、今言つたことは本当なのだ。お城の殿さまは、今のお上では決して世情がよくならんと思われておる。実權を握つている大御所さまは大奥に何十人も妾を囲い浪費し、その側女一派が世事を牛耳つておる。

一方地方では、庶民の暮らしは厳しく一揆や飢饉も起つておるのにだ。他にも度々不穏な外国船が近海に出没しているとの話しあるのだ。このままではいかん、放つておけん、と御三家の殿は立ちあがらうとされておるのだ

「そんな重大なお話とわたしの大奥での御殿勤めに何が関係あるのです?」

「詳しいことはまだ言えぬが、大奥の威力をおまえは知らんのだ」

「…………」

「大奥は將軍や表の人事さえも動かす大きな権力を握つておるのだ。大奥がすべての実權を握つておるとは言えぬが、政治の重要な要素であることは確かなのだ。時期將軍に関わる場所でもある。

ただ、あまりにも謎に包まれた場所ゆえ何人か息のかかつた者を送

り込み、状況を知りたい、と思われてゐる」

衝撃的な内容にあかりと龍才はしばらく口がきけなかつた。

腐敗政治。

御三家の反乱。

外国船の渡来。

五里霧中の大奥。

「とにかく、大奥へ入つたら何が起こるか分からん。だから、これは誰にでも出来るお役目ではないのだ。……あかり、おまえにしか出来ないお役目である、とわしは思つておる」

炎才の目に愛しい光が宿つたようにあかりは思えた。

強い信頼感を感じた。

そうだ。

親方には十五の時よりずっと恩義を受けている。

三五郎の件もおさめてくれた。

薬草の勉強も、お金だつて沢山かけてくれたのだ。

何より炎才が、折々にかけてくれた声の暖かさをあかりはちゃんと覚えていた。

そのようなことずっと見守つていってくれなければ出来るものではない。

それに

大きな世界に出ていく。

この小さな村から出て江戸、それも江戸城に行くのだ。

十八の娘には胸高鳴る出来事であるのは間違ひなかつた。

あかりは役目を果たす決意をした。

「龍才、嫁を取れ」

あかりが出て行つた後、炎才は龍才に静かに言つた。

心外な顔をして龍才は父を見上げた。

「おまえも、もう二十一だ。結婚してもいい年だ」

「ですが…」

「『才のアヤ』はまだつだ？」

今年十七になるアヤは又従妹にあたるおとなしく素朴な少女であった。  
その無口さは忍びの女房としては相応しいものであったが、何につけても普通であった。

「もう少し頭のいい娘でないと跡取りの内儀は務まらぬ」

「そんなに悪い訳ではなかつ。あんなものだ。そのうち機転が効くようになつてくる。女は年月がたつにつれ自覚がめばえしつかりしていくのだ。おまえの母親もそうであったぞ」

「俺は元から頭のいい女が好きだ」

「おまえの好みなど聞いておらん。とにかく結婚するのだ。  
よいか、あかりはもうおまえの手の届かないところに行く。あかりめるんだ、ひとつ結ばれぬ運命だ」

龍才は狼狽したような悲しきような顔をして黙つた。  
どうして。

## 何千回と唱えた呪文。

こんなに愛しいのに。

こんなに間近にいたのに。

あかりしか見ていなかつたのに。

ああ、やはり、あの時一緒に駆け落ちしてしまえばよかつたのだ。

誰も知らない場所へ……

あかり……

## そして内命

あかりが蓑羽服津もはきつ村を離れて約三年がたとつとしていた。

江戸小石川にある水戸藩江戸屋敷。  
十八万坪もある広い広い庭。

それを配す邸内に、あかりは居た。

江戸屋敷での扱いは、家老・安藤帶刀あんどうたてわきの娘としての奉公である。  
日中は藩主の奥方の世話をし、夜は安藤家で休むといった日々であった。

藩邸に上がったのはここ半年ほどで、その前は安藤邸にてみつちりと武家作法・習い事を仕込まれていた。

小石川後楽園に咲く菖蒲が田にも鮮やかとなつたある日。  
藩主・為昭なりあきにあかりは召されたのだった。  
側には養父である安藤帶刀も控えていた。

「今日はな、そなたに大事な話があつて呼んだのだ」「はい」

一通りの挨拶が終わつた後、為昭は一段声を低くした。

「この幾年、そなたはよう頑張つてくれた。礼を申すぞ」「お勤めに上がつてもうつことになつた」

「身に余るお言葉、痛み入ります」「では、わたくしが?」

「ん」

為昭は選ばれたのはあかりである、と大仰につなずいた。

「ここにやつてきた客人たちが何人も、そなたを嫁にもらいたい、と言つた。また、黒川藩主の柳沢どのや家老の横井どにも太鼓判を押していただいたのでな。

わしはな、そなたが美しいというだけで、この役目をそなたに決めたのではないのだ。何よりも聰明である」と、機転が効くこと、度胸があること。これが何より大事じや

あかりはうなずいた。

「大奥は魑魅魍魎ちみもうりょうが跋扈ばっこしておる。女の業わざが渦巻く世界じや。そこでやつていくには、並大抵のことではない。美しさだけではやつていけん。否、美しいがゆえ嫉妬じとの的ともなるのだ。よいか、あかり」「はい」

「そなたは大きな陰謀に巻き込まれるやもしれん。女としての人生を狂わし、立ち上がれないような事もあるつ。しかし、それでもやつてもらいたいのだ」

「はい。今までお殿さまに受けた」恩忘れませぬ。袴羽服津衆もはきつの一員として、またわたくし個人としても精一杯、お役目を遂行させていただきたいと思います」

あかりの姿を、養父である安藤帶刀は笑みを浮かべながらうなずいていた。

「詳しいことは、わしから話そつ

優しげな声で安藤はあかりに向かって、膝を向けた。

「そなたのお役目は、大奥に御中脇として入るところから始まる」  
安藤は、あかりの前に詳細を記した紙を置いた。

大奥役職の一覧のようである。

「御中脇は上様の身の周りのお世話をするのが仕事である。もつとも上様のお手がつきやすい役職じゃ。じやが、最初から新米の中脇が上様直々のお世話をさせてもらえる訳もない。まずは、有力な御年寄の下で働きながら大奥のしきたりを学ぶのが先である。

融通のきく御年寄の元に配属されれば、大奥の仕事に忙殺される事はなく、われわれのお役目に重きを置くことができる」

「上様のお手がつきやすいよう」、とのことでございましたが、お役目としてお床入りは、どれほど重要なのでしょうか「今までの経緯から考えても、美貌は大事な要因であった。しかし、それだけが仕事とは思えなかつた。

「さすがだ、あかり。上様の「ご指名は重要である。はつきりいえば寵愛を一身に受けてもらう必要がある。その為の床技巧や媚薬を使つてもらうのも構わん。だが」

安藤は少し言ひよどんだ。

「もしそなたが上さまの世継ぎを生んだとしても、その子は将軍で

きぬ

「……はい」

返事はしたが意味がよく分からない。

「つまり、そんなに待つておれぬ、といつことじや

「それは外国船問題があるからでしょうが」

「……………ああ、もう少しだけ」

「醜な」と嘯いてゐるといひ。しかし、もつ猶予せないものじゃ。

た折には、わしが考える次期将軍候補を推薦してもらいたい」

それに

「それは政局をみて、おいおい沙汰いたす。上様は現在のお世継ぎであられる家<sup>いえ</sup>倅<sup>さち</sup>さまに心許ない思いをされているのは確かだ。もちろん、わしらも家<sup>いえ</sup>倅<sup>さち</sup>さまでは困るのだ。乱れた時勢を変えるには、次期將軍として強い実行力をもつ方が必要なのじゃ」

間近でみる為昭の眼光は力強く真剣であつた。

「家偉さまは体もお弱い。いつ身罷みまかられるか分からぬ。だからと言つていつまでも、」健在であられて困るのだ

その言葉の裏の意味があかりにはすぐに分かつた。

「では、わたくしに家作さまを？」

「いや。それはまだよい」

あかりの眼を覗き込むようしゃがんでいた為昭は、立ち上がった。

「だだ、忍びの情報からも、いま世情がどうなつてあるか、そなたも多少は知つておるづ。……多くは言わぬ。しかし、わしを信じてお役田を果たしてくれ」

あかりは、はい、とうなずいた。

「大奥の様子は逐一報告して欲しい。寵愛を受けている女人や、その権力構図、噂話まで必要じゃ。また、老中たちが御年寄にこそそ頼み事をしている内容などは大事である。これは年寄付きであるからこそ出来る仕事なのだ」

「わたくしが配属される御年寄は決まっているのでしょうか」

安藤が口を開く。

「万里小路さまという京から来られた上臈御年寄じや。万里小路さまは、現在の大奥で強大な権力を持つておられる。その手腕は公家出身としては異例のこと。

そなたも重々気を抜かぬことだ。万里小路さまはこちらの計画を大方ご存知であられる。しかし、藩としての内情までは話さぬことじや。そなたは、ただ上様を籠絡して溺れさせるのがお役目である、と心得よ」

「はい」

「この計画は絶対に洩れてはならぬ。そなたは黒川藩、家老の娘として入台するのだ。それゆえ文を書くときは、家老横井殿の江戸藩邸をあて先とし、用向きがある時も横井殿に頼むのだ」

先ほども出でてきたのだが、なぜ、黒川藩なのだろうか。

そういうえば何回か黒川藩の藩主や家老にお茶を出したことを思い出した。

「黒川藩の娘として振舞う理由を、そなたが知る必要はない。ただし、黒川藩の処々はそなたは知つておく必要がある。明日よりそなたは黒川藩 越後に向かうのだ」

「越後」

「くに元から来たといつ身元になつておるゆえ、越後を見ておくのも大事じや。その後は横井どこの江戸屋敷にて過ごしもらつ」

政治的思惑は、怒涛のように動き出した。

早る胸と緊張を抱えて、あかりはこれから日々に思いを馳せた。



小ちな紙に包まれた、白い粉を円島は観察していた。

静山の部屋から、おまつが盗んできたおしろいである。自分の京おしろいと比較してみて、色や匂い味は大きく変わらないように思えた。

『動物に与えたとて鉛である白粉自体、有害……これでは確かめようがないではないか』

当時使われていた京おしろいは鉛でできており、大量に使う舞台役者や大奥では鉛中毒者が多くたと言われている。

その事を知っていたものは、『くわづかであったが、円島は知っていた。

情報通の円島は代用品として、タルクのような粘土に化粧水や椿油を混ぜて使っていた。

『これは京おしろいであろう。……とするべ、もつと他に何か隠してある場所があるに違いない』

しかし、今日は探索どころではなかつた。

部屋局として、上様への褥入りを準備せねばならないからだ。

「おまつ、これを神田白壁町の遊玄ゆうげんといふ町医者に届けさせのうだ」一つのおしろい包と文と金子を渡す。

これが確かに京おしろいである、ということを綿密に調べて欲しい

との皿を手紙には記していた。

遊斎はオランダから入ったといわれる顕微鏡を持っていたし、何がしかの実験をして反応から同じ物質であることを確かめてくれるだろうとも思っていた。

月島は大奥御匙医の無能を知っていたので、自分のお抱え医師を持っていたのだ。

静山は入浴後、米ぬかで念入りに体を磨かれ、髪を乾かされ、襟足や鬚を剃られたあと、綸子の夜着を纏わされた。今までに嗅いだことのない甘く爽やかな香りが、夜着から香る。

これは、いったい何だろう？

化粧はごく薄く施され、結髪から降ろし髪となつた。鏡に映つた自分の姿を見る。

静山は『大丈夫だ』と肯いた。

大丈夫、素顔に近いほど、わたしは美しい。

母に似てきた容貌に少し恥ずかしさを感じたが、母の思い出は裳羽服津の存在にすぐに変わった。

『さあ、しつかりしろ！あかり。お役日本番だ。今日は何も細工はしない。武家の娘として、上様の寵愛をいただく努力をするだけ』

「月島さまがおいでになりました」

部屋子が言うと同時に、黒地の打ち掛けを着た月島が静山の部屋に入ってきた。

「どんな様子だ？」

「「」指示どおり用意が整いました。大変美しかったわこまく」

部屋子の娘が自慢げに返事をした。

座っている静山を立つて見下ろしていた月島は、静山に立ち上がる  
よつ命じた。

「うん」

少し距離を置いて静山を見た月島は満足げに頷いた。

「やはりそなたは薄化粧のほうがよい。本当はいつもやうしていればよいのだ」

そう言つ月島は、今夜はやけに厚化粧であった。

肌が見えぬほど真つ白におしろいを塗り眉も薄かつた為、何かグロテスクな風体であった。（それが大奥高位の本来の化粧であったが）

不意に月島は静山の髪に手を入れた。

「指示どおり、髪は八割乾かしただけだの」

そのまま静山の後ろに回つて、止め紐を解いた。  
ふわり、と髪が広がった。

「「」からはわたくしがする。皆、下がつてよい」

部屋たちは、一礼をすると、衣装や道具を持って出て行つた。

再度座るよう指示された静山は膝を折つた。

椿油が入つた壺や道具を身元に寄せた月島は、慣れた手つきで髪に

付ける油と香油を調合した。手の平で温め、静山の髪に手を入れた。

「髪油は、まず髪の内側からつけ、そのまま毛先に滑らす。毛先も少し多目に付けるが、着物に触れる場所ゆえ沢山つけてはならん。そして手ぐしで何回も梳く」

手ぐしで髪の性質を確かめながら、油の量を調節していく。

「やや少ないくらいの状態でつづ櫛で梳いていく。すると調度よい手触りとなる。もし油を均等に付け、そのまま櫛で梳ぐとベタツとして野暮つたく、触った時気持ち悪いのだ」

しどね禢経験のある月島だからこそ気遣いである、と静山は分かった。結髪とは違った手入れの方法だった。

否。

これは月島独自の方法である。

蒸留法で作られた香り油を見たことがなかった静山は、非常に驚き惹かれた。これを、薬として術として使うことは可能ではないか、と。

香り油は今でいう精油。静山の予測は外れてはいなかつた。

甘いお香に似た香りのほかに、微かだが蜜柑のような香りがした。これは夜着にかかっていた香りと同じだつた。

「そなたは若いので乳香だけを纏うより、少し爽やかである香りが入っている方がよい。蜜柑と同じ種の香油を混ぜてみた。どうじゅ少し軽くなつたであろう? 香木では出せぬ香りだ」

「いい香りです」

香油のことを聞きたくてたまらなかつた。が、それ以上に月島に髪

を触つてもいう感触が心地よく、うつとりした感覚に浸つてしまつた。

「大体こんなものか。触れてみよ、手入れが終わつたのを確かめさせる為、静山に髪の状態を確認させた。

「柔らかくてしつとりで……それでいてさらさらしています」  
適度な水分、油分、自然な手触り。

このような髪の状態は初めてだつた。

『なんて月島さまの知識と技術はすごいのだろう』  
静山は改めて月島という人物に強く惹かれた。

月島は何度も髪を広げては、手を離し髪の間に空気を入れた。  
羽毛のように、髪がふわりと微かに頬にあたる。鼻腔の奥にはうつ  
とりする香。

それは官能的であり、空氣から体全体を愛撫されているような感じ  
であつた。

「上様は、お気に召すと思つぞ」

月島は慈しむよつ言つた。

その言葉が静山を現実に引き戻した。

一瞬、沈黙が降りた。

「静山？」

一点を見つめたまま固まつてしまつた静山は、状況を理解しようとしていた。

「はい。わたくしの為に月島さま自ら、しつらえてくださりお礼の  
しようもございません。精一杯お役目、務めさせていただきます」

深々と頭を下げる。

月島に会つといつも調子が崩れてしまう。お役目を忘れて自分に戾つてしまいそうになるのだ。そのギャップに心が分裂しそうだった。

将軍の閨ねやとは完全に開かれたものだった。

とうきんする女人と將軍の両脇には、御伽坊主おとぎぼうしゅと他の御中脇が控え、常にふたりの情交・会話を聞き、次日に御年寄に報告する義務むぎがあった。御伽坊主とは剃髪した女の坊主のことである。

それだけでない。

隣の御下段の間では、また他の御中脇と御年寄が宿直として寝ていたのである。

そんな中、將軍・家賢いえよしは御小座敷にゆっくりと入ってきた。

御下段の間（寝室の手前の部屋）で頭を下げている月島を見て、家賢は一瞬ざよつとした。

静山の後見でもある月島がいるのは当然であるし、他の田も何度も宿直をしてきたのも分かっている。

しかし、今日だけは居てもらいたく無かつたのだ。

「……」

家賢は御上段の間に入った。

「顔をあげよ」

白い夜着に着替えた静山は、静かに面をあげた。

その名の通り、夜に冴える静かな湖のよつた表情だった。

美しい。

だが、それだけではない。

体の奥底、いや、もつと根源的なものから発せられる、熱いものが静山にはあつた。

意思の強さなのか、情熱的な感性なのか、聰明なる意欲なのか。すべてのものがいまぜとなり存在感を感じさせていたのだ。

「落ち着いておるの」

「とんでもございません。喜びで胸がいっぱいになりました」

家賢は静山の髪に手を入れた。

そのまま、裾に手をすべらせる。

「完璧じゃ……」

囁くような小さな声で家賢はつぶやいた。ふたりとも思つていいことは同じだった。

「そなたのようなおなじの心を射止める者は、どのよつた人間であろうの」

静山の表情が一瞬だけ崩れた。

「例え将軍といえど、人の心までは好きに出来ぬ」

そのまま家賢は静山の横に腰を下ろした。

「人間には質というものがある。身分には全く関係なく生まれつき備わっている質は、どうあがいたとて手に入らぬのだ。無い者にと

つては眩しい程に心惹かれるのに、自分を顧みて、その差に愕然とさせられる

表情は変わらなかつたが、家賢の胸から張り裂けるような思いが伝わつて來た。

「 静山、そなたは余と質が違つのだ。つまく言えぬがその

「上様」

静山はわざわざつた。

「 何を仰せに「じやこ」ます。ほんの小娘ごときに、天下の將軍さまが劣るなどありよつも「じやこ」ませぬ。いいえ、例え將軍さまがうと家賢さまは聰明で努力家で心の綺麗なお方だとわたくしは思つております。質が誰かに劣る、などと、幻想で「じやります」

ああ、円島さまならもつと氣の効いた事が言えるのに、静山は歯がゆかつた。

だが、家賢は驚いた子供のような顔をすると、じつと静山の顔を見た。

「 そのような事を言われたのは、初めてだ

しばらく沈黙が降りた。

「 武家の男子は強うある」と、聰うある」と、御家を榮えさせること、を眞としておるので、心が綺麗であることに大きな価値があるなど気づかなんだ」

「 辞氣じきを出して、斯いだに鄙倍ひばいに遠ざかる。見ていれば分かります。上様が人を誹謗中傷されたり悪し様に言われたりするのを聞いたことはありません

「それは徳であるのであろうか。ただの意氣地なしではないのか」「いいえ。もしそうであるなら曾子が間違っていることになりまする」

「はははっ。言ひの」

静山も笑つた。

そのまま家賢は静山を引き寄せた。

家賢の緊張が解けた空気が感ぜられた。

「久しぶりに心が温こうなつた。礼を申すぞ」  
ゆっくりと静山はうなずいた。

家賢の影がしづかに静山に重なつた。

隣の部屋では円島が、まんじりともせず一人の会話を聞いていた。

冬至が過ぎると大奥は、ほつとできる時期となる。あと半月もすると、年末のすす払い、置換などバタバタと忙しい行事に突入する。

冬の高い空と、黒い厚い雲が北風に、どよどよと流れれる田のことがあつた。

月島は遊玄からの手紙を読んでいた。

？先日預かりし物、本性にて候？  
と、一言だけであった。

『やはり……京おしろいで間違いなかつたか。では、なぜつづけば屋なる小間物屋から、わざわざ物を買つた？ 何があるはずだ』

「月島さま、佐賀藩主、鍋島斉正さまがおいでになつたそつぞうざいます」

墨越が控えから声をかけた。

「分かつた。すぐに行くと申し伝えよ」

鍋島斉正は当時の藩主としては機才で、藩学校を作つたり、自ら蘭学を学んでは蘭癖大名と呼ばれるよつた人物であった。

佐賀という土地柄から外国との交易の重要性も早くから熟知しており、幕末に向かい近代化に向かい大きな役割を果たしていくのだが、それはもつと先の話である。

月島と知り合つたのは、斎正が藩主をついで五、六年たつた頃であつた。

蘭学好きな月島を喜ばせようと家賢いえよしが、斎正に会わせたのである。

それ以来、気が合つたふたりは時折文を交換し、お互に何かと情報手に入れては、國の安否いのうを憂うといったことまで書きつらねていた。

「斎正さま、お久しぶりでござります。」健勝であられましたか

役人らと会談する御広座敷は、いやに暑かつた。  
囲炉裏が、過剰に置いてあつたからだ。

「ん。月島どの、久方ぶりじゃの。いや相変わらず美しい」  
が、少し瘦せたようだ、と言おつとして止めた。そんなことは月島  
が一番分かっているはず。大奥御年寄ともあろう立場、気苦労が多  
くない訳がない。

藩主を継いで十一年。斎正は二十八歳。

少し細めの切れ長な目、ハの字の眉がどこか可愛らしさを感じさせ  
た。

すっと伸びた鼻と顎の形は、育ちのよい品のよさを現していた。

だが、この凡庸な外見とは裏腹に、その中味は明晰で鋭利であるこ  
とを月島は誰よりも知つていた。

「これからわしは国元に帰り申す。その前に年末の挨拶を兼ねての、

月島どのの顔を見ておこつと思つたのじや」

「それは、それは。このよくなばばの顔を見てとは、ご醉狂な。道

中、ひつわお氣をつけくださいませ

「まばなだ、思つてもみぬことを」

斎正は大仰に笑つた。

それより、と斎正は周りを見渡して、声を潜めた。

その真剣さと空氣を感じて、月島は立ち上がりて斎正に近づいた。

「いま大奥で家賢さまの、ご寵愛を一身に受けられてるのは、静山どのとこのお方であり、その静山どのは月島どjiの付きと聞いておるが、確かであらうか？」

「今のところは……そうですが。それが何か」

「いや

一度斎正は口をつぐんだ。

「お世継ぎの事を何か聞いておらぬか。上様は、家臣さまを、どう思つておられるのか」

月島の顔つきが変わつた。  
眼光に光が点り、唇がくいっと上がつた。

「上様は未だ決めかねておられるようですが、お心ひでまは家臣さまに継いでいただきたいと思つておられるようですが」

「この状況で、そんな事を言つておれん

音に出ない声で、斎正は強く言ひ放つた。

冷静な顔で月島は受けた。

この先を続けるよう促す表情であつた。

「そなたにも何度か文で書いたが、わが藩近海に、この数年頻繁に

異国船が出没するようになつた。昔は幕府との取り決めを守つておつたのだが、色々な国の船がやつてくるようになつて、近頃では横暴なふるまいが頻発しておるのだ。

大型船が漁場を荒らす、勝手に陸に上がり商売をする、地元の者と騒動をおこす、など収集がつかぬ。しかし、最も困つてゐることな、脅迫めいた大砲を撃つたりすることなのだ

切れ者で行動家の斎正でさえ憂つ、自体であることはすぐに理解できた。

「あの力を見せつけられると、この国の武力ではもう全く歯がたたぬ。何でも言う事をきかねばならぬ、と思わされるのだ。……そんな状況を知らず、幕府の者は寝ぼけたことばかり言いおつて、真剣に対処しようとはせぬのだ。いや、誰ひとつ出来ぬ、と言つのが正しいのだが」

斎正の言ひたいことは分かつた。

「そんなにその大砲とやらはす」このですか？」

「ああ、大筒の数十倍はあるだろう。それが数十と船に設置され船上から、海へ玉をぶっぱなすのだ。どかーん、海の水が、どばーん！－と十丈（約30メートル）ほども立ちあがる」

「十丈も？」

「地響きもものす」い。地震のよつよつと音がしたかと思うと、津波のような波が岸へ押し寄せるのだ。海で一発撃つただけであれば。あの玉が陸に向かって何発か打たれたら、小さな山など

ひとたまつもあるまい……」

「なんとこゝへ

円島は恐ろしさの余り口を手で被つた。

そのよつに恐ろしい破壊道具が存在するとは……もし、そんなものを使う戦が起これば、この世は地獄ではないか。「ひすとる」という自動短筒が存在することは知っていたが、大型兵器を実感したのは初めてだった。

暑いはずの御広座敷で、ぶるると円島は震えた。

「どうすればよろしいのか。その事、当然上様はじめ老中も存知でありますようが……」

言つたあとで無能な人事を思い円島は首を振つた。この難局に対応できる柔軟な頭の者は誰ひとりいなかつた。

「じてじや

「どうされまする?」

「今、この危機に気づいて真剣に動いておるのは幾つかの藩だけだ。薩摩、長州、水戸、黒川、そしてわが佐賀……」

黒川藩?

円島の中で静山の出身に結びつき何かが琴線に触れた。

「皆、それぞれに幕府に異国船対策を言上しておるが遅々として進まぬ対応に、どうどうしひれを切らしたのだ。暗愚な幕閣連中ではどうにもならん。

あやつらは異国が攻め込んだら、幕府も大奥も藩も、もちろん朝廷さえもなくなってしまう、という事実を分かつておらんのだ

「幕府も大奥も？」

「朝廷もだ」

齊正は律儀に追加した。

月島にとつては実感がわからなかつた。

連綿と続いてきた、この大和の国が属国になつてしまつといふことが。それはすべての基盤が崩れ去る、ことを意味していた。

「わが日本は神国ですぞ。神風が吹いて蒙古も退散したではありますねか」

「では、なぜ大砲を神風は吹き飛ばしてくださらぬのか」

その通りだ。

東インド会社という組織が、アジアを侵略しつつあり、隣の清国がエゲレスと戦争をして大敗したのを、知つていたはずだ。

日本は大丈夫であろう、などとどうして思えよつ。

「では、いつたいどうすればよいのです？」

「圧倒的に強い将軍が、とにかく今は必要だ」

月島はうなずいた。

老中や若年寄の言動に翻弄される将軍では困る。

自ら意思を持ち、この難局を乗り越えられる家臣を揃える。

「一百年の太平は終わったのだ、とはつきり理解出来る人物が必要であつた。

「田安家の徳川 慶<sup>よし</sup>匡<sup>かわ</sup>さまを推していただきたい」

「田安家の徳川慶匡さま？」

「慶匡さまは、若い頃から全国を放遊されてきた方で見識も広い。学問好きで頭が固いだけの学者がぶれでもない。実践主義者だ。こういった異例の経歴の持ち主でないと、前例のない出来事には対応できぬ」

「慶匡さまは、次期將軍としてのお話、お受けになつてているのですか」

「打診はしたが、ご本人は何とも言われぬ。こういったことは危険であるから。だが、ご本人も外国の脅威は何よりも憂いておられるのだ。實際、異国船や異国人を知つておられるのだ」

思わず「はあ」と、小さなため息をついてしまつた丹島だった。

今の家賢に自分の言葉が届くかどうか、分からなかつたからである。

實際、靜山への寵愛が深いのは確かであつたが、のめり込むのを堪えてい、一步引いて崇めている、といった感があつた。

その上、家倅を押しのけて、田安家の人物を跡目にするなど、家賢の中では論外な話であつた。

『せめて、家倅さまがいなければ、まだ話は可能であるが……』

「円島どの、そなた家倅さまがいなければ、と思つたであらひ、あくまどする円島に、再び声を潜めて齊正は迫つた。

「やつ、憂うな

「な

齊正はにせりと笑つた。

何か手を打つてあると嘗つことだと、円島にはすぐ分かつた。

恐ろしい男。なんといつ切れ者であるつか。

「家倅さま以外の方が跡目となられたとて、上様がご隠面されるとはまず思えませぬ」

「それは、その時よ

円島は気が抜けた。

さんざん脅かしておいて、

しかし、確かに時期將軍の決定のほうが、すでに將軍となつてゐる家賢よりも大事な点ではある。

「そなたは頭もよこつて、やり手である。ここまで話聞いておれば、どう動くはあちうけお任せする。家倅さまのことは、いつも何とかするゆえお気に召されるな」

「そんな言葉だけでは、あまりに勝手でござりますぬ。それではこちらはござんで上様にござり申しあげたらいいか、一向に分かりませ

「ぬ

「いいや、そなたは分かつておられるはずじや。……時期じや。時

期をみて、そなたは上手に上様のお心を動かされるよう動けるはず。  
お願ひじや、この日本がこのままでは異国の属国にされてしまつ  
だ

それは円島にもどつても、じつとしていられない事実だつた。

「分かりました。何とかできることからやつてみますゆえ」

「頼みましたぞ」

心からホッとした様子で、斎正は破顔した。

「ああ、忘れておつた。一うちら、円島さま御用達、三条屋から仕入  
れた化粧品と、長崎より仕入れた香油をお持ちした。これで、いつ  
そう美貌に研きをかけてくだされ。あまりに美しくなつたら、もう  
わしなどにおお会いしてくられぬかもしれぬので、そこそこにしてく  
だされ」

三条屋の化粧品、円島専用の粘土おしりこは特注品である。  
また、香油は珍物で、外国から取り寄せなければならぬ。

細かに好みを調べてみやげにするなど、斎正は女の心を掴む腕も  
一級であつた。

反面、美しさに磨きをかける道具、つまり円島を通じて靜山にもた  
らされるはずといつこどが分かり、任務の重責も感じた。

「かすていら、も沢山お持ちしたゆえ、部屋の脇で分けてくだされ。  
そして何よりプリムローズ」

そう言つて斎正は手を叩いた。

控えから、御付きの者が桃色鮮やかな花が咲いている鉢を持つて  
きた。

「これは南蛮でプリムローズと呼ばれる、さくら草の一種だそうだ。この鮮やかさと華麗さは、艶やかな月島どのに、一等似合つと思うての。お持ちしたのじや」

「これは何と美しい…」

薔薇に似た中ぶりのプリムローズが、鉢に可憐に咲いていた。南蛮風に艶やかで華麗であったが、どこか品があった。

「今日いただいた中で、最も嬉しうつむこます。心が満たされます」

「その花だけは、純粹にわしの気持ちじや。すまぬの…」

少し頭を搔きながら照れる様子が、斎正の憎めないとこりだつた。

『全く得な性分のお方じや』

月島は素直にこの斎正の均衡感覚が好きだった。

『これからの人間はこりでなればならぬ。人を動かすのは何より心が大事だ。こういつたお方がいる限り、まだまだ日本も捨てたものでない。暗い側面ばかり考えるのは止めよつ』

## 不意の縫合術

鍋島斉正にもうつたカステラを部屋子たちは、ややつややつと喜んで食べていた。

静山の部屋子も呼んだので、いま、隣の静山の部屋は無人のはずである。隠し物を調べるのにいい好機だ。

密かに浴室をでた月島は、静山の部屋に向かつた。

「ん？」

今誰かが静山の部屋に入つていったように見えた。

搔取かきとりを着ていなかつたので、御端下の者であるよつて思えた。

『手癖の悪い御犬であろうつか』

障子の隙間から覗くと、やはり棚のあたりを探つてい。

がらり！

月島は障子を開け放つた。

「そなた、ここで何をしてござる！――」

「はつ」

息を飲んで見返してるのは御末とおぼしき少女。

年は十七、八といった所であろうか。

「そなたどこの」

そこまで言いかけて月島は棚の先にあるものを見て驚愕した。

小物を入れておく小箪笥。

その前部分が、そつくりそのまま引き上げる形で開け放たれていた

のだ。

各段ごとに引いて開閉は出来ない。つまり、カラクリ細工の小箪笥であった。開け放たれた小箪笥の中身は棚があり、懐紙に包まれたものが沢山入っていた。

『こんな所に隠してあつたのか…』

少女は何かをぎりりと考へているようであつたが、一瞬のひきこもるから懐剣を出した。

「見られたからには、仕方あつません

「誰かっ！」

月島が叫んだと同時に少女は月島に襲いかかった。

一撃目はかわした。  
しゅん！

そのまま、横に懐剣が振り回される。  
避ける。

少女は攻撃を止めない。

「ああっ」

懐剣を避けきれないと思つた。

その瞬間。

動きが止まつた。

静山が、前に…いた。

少女は起こつた出来事が理解できぬまま目を見開いていた。

「おけがはごぞいませんか？」

静山は月島の肩に手を置いた体勢で優しく微笑んだ。

「ああ、あかりさまつ」

「騒ぐでない山吹」

低い声で静山が凄んだ。

「この方を傷つけることは許しません」

山吹と呼ばれた少女と月島は茫然とするしかなつた。静山は左手を背中にまわし刺さつた懷剣を確かめた。刺さつた部位の下側を静山は押さえた。

「静山…」

「大丈夫です」

痛みをこらえながら静山は荒い息をした。

「障子を閉めてください、月島さま」

恐慌状態であつたが、月島は言われた通り人影を確かめ障子を閉めた。

「山吹、まっすぐにゆつくりと懷剣をぬいて」

「でも」

「大丈夫だから。そんなに深く刺さつていない。……それと布

「布か」

月島は部屋の和箪笥に駆け寄つた。血、血を止めたり拭いたりできるサラシ……か何か……  
ない。風呂敷があつたので数枚手に取つて戻つた。

「月島さま、山吹が懐剣を抜いたと同時に、傷口を布でしつかりと押さえてください」

「わかった」

山吹が懐剣を抜くと同時に静山はグッと腹筋に力を込めた。

「ううう

力を入れたのは出血を抑えるためであつたが、みるみる打ち掛けは血で染まつた。

「だめじや静山、御匙医おきじいを呼ぼつ」 \*御匙医・大奥づきの医者風呂敷で押さえていた月島は半泣きになりながら叫んだ。

「いけません。もつと強くもつと強く押さえてください！」 山吹、  
蒲黄ほがまを布に塗つて、それを傷口に当てて…

「はいっ

先ほどのカラクリ箪笥に走ると、山吹は一つの懐紙を取り出した。箪笥からはみ出でていた腰巻を裂くと、懐紙に包んであつた黄色の粉を塗りだした。

「横になるのじや

立つたままで押さえているのは困難であり体力の消耗も激しい。

「その前に搔取と帶を解き、傷口あたりの衣服を切つてください」  
「分かつた」

傷は左のわき腹、少し背中にまわつたところから斜めに六分（約1・8㌢）ほどあつた。どうやら帶が防いでくれたらしく。

想定よりも小さな傷口だったので、三人とも少し冷静を取り戻した。蒲黄が塗られた布をどんどん交換し圧迫し続けた。

山吹があて布をつくり、月島がそれを受け取つて押さえるところの何度も繰り返す。

「山吹、傷の深さはどのくらい？」

「恐らく五、六分（約1・8cm）」

動くとすぐに傷口が開く状態であるのが静山には分かつた。蒲黄の圧迫止血で流れ出るような出血は止まつたが、じわじわと出る出血は続いていた。

「静山、冷水で回りを冷やすのはどうだ？」

月島が急に思い出したように言つた。

「いいと思います。怪我をした時、冷たい水でぬぐいで冷やしますので」

「すぐに取つてまいるねえ」

月島は圧迫を山吹にゆずると、立ち上がって部屋を出ていった。

が、不意に思い出したようにカラクリ箪笥に向かうと開いていた扉を閉め、そのまま急いで部屋を出ていった。

数個のタライとてぬぐい、大量の紙とサラシ、海綿を月島は用意した。

医者もよほど呼びたかったのだが、静山の意思を汲み、なんとか思いとどまつた。

しかし、人手はどうしても必要だつた。

信用のおける墨越とおまつだけは、口止めをし、静山の部屋へ伴わせた。

「なんという!」と……」

墨越は部屋に入るなり顔色を変えた。

「ううたえるでない。おまつ、次の間にふとんの用意を。あとで大きな油紙を持ってきたもれ。ふとんを敷いたら、ここにの畳の掃除を」

「はい」

表の間は血で汚れていた。すでに黒く乾いていたので完全には落ちないだろう。

「墨越、静山を奥に運ぶのを手伝つてたも」

「分かりました」

静山を動かすと、傷口からまた血が吹きってきた。白くなつていく顔色をみると円島はいても立つていられなくなつた。

「静山、このままでは死んでしまう、御匙おしゃじ医を呼ぼう。皆には分からぬよつにするから」

「こんな事くらいで死にませぬ。わたしは野山育ちです。大きなケガも沢山してきました。大丈夫です」

静山は薄く笑つた。

「ですが……ちょっと試してみてもいいかもしませぬ」

「何を試すのだ?」

「縫つ、のです」

「縫つ?」

「傷口を、お裁縫のよつてやへれくつと縫えば血が止まるとか  
半分樂しそうに口に出した。

山吹、円島、墨越は顔を見合わせた。静山が混乱のため気が触れたのかと、誰もが思つた。

「何をふざけた事を……」

「南蛮かぶれの円島さまでも、ござ存知ないのですね。紅夷外科宗伝には、傷口を酒で洗い、そのあと木綿の糸で傷口を縫つてから軟膏を塗るようになります。

強い焼酎を用意してください。そして針と木綿糸も。ああ、一応白糸で御願いします」

静山は笑つた。

「そ、そのような事、本気で申してあるのか

「円島さまは、お裁縫はお得意でござませんか」

「静山!」

しかし静山の瞳には強い意志が宿つていた。

「円島さま、お願いします。これはあなたさまにしか出来ません」

それは啓示ともいえる、絶対の信頼感だった。？円島には出来る？といつ。論理的な理由は全くなかつたが、なぜか確信していた。

円島は口を閉じた。傷口を思い出す。

「中の肉はどうする」

「どう、お思いになりますか?」

「思うに、表の傷口でなく、奥のほうも裂けておつたように見た。そうなると、一段下の肉も、一針縫つたがよいやもしれぬ。ただし、細い糸と針でじや。木綿よりも絹糸のほうがよい気がする」「では、そのようにお願いします」

「奥を縫うとき、一旦傷がまた開くぞ。そのうえ、開いたままにしておく必要がある。そう、箸か何かで押さえておく人がいる」

「山吹、お願い」

「分かりました」

「表の傷は木綿糸とするがよいのか」

「たしか、そのように書いてございました。……そうです、確か糸をするのです」

「抜糸？」

「はい、幾日かして傷が癒えたら糸だけ抜くのだそうです」「そのような事が可能であるのか」

「ふふふ、また調べてください」

丹島は覚悟を決めた。言われたものを用意し、手燭、行灯、囲炉裏を五つほど仕入れた。

「これで、終わりじゃ」

木綿糸を玉留めし鉗で糸を切つた。

静山は処置中、一言も声を漏らさなかつた。

『なんとこう精神力』

手燭をかざしていた墨越は静山と月島のふたりを見て驚きを隠せなかつた。

「血が出てきません」

縫合した皮膚を焼酎で拭いていた山吹が嬉しそうに声を上げた。軟膏がないので静山が持っていたドクダミと馬油をませ塗布しサラシを巻いた。

「よう頑張った静山。もつ寝るのじゃ」

「痛つて眠れませぬ。月島わまじん、早つお休みくださいませ」

「……痛み止めは、あるのか」

「山吹に出してもらいます。もつお部屋にお戻りください」

「分かつた。……山吹とやら、そなた御末か」

「は」

「では、御末部屋にそなたは今日より静山の部屋子になつたと伝えておくれ、ここに静山を見るのじゃ」

山吹は一瞬驚いた顔をしたが「は」と答えた。

「墨越、今夜はおまつをここへ泊まらせ、何かあればすぐこわたくしの部屋に報告するよつ申し伝えておくれ」

「承知いたしました」

縁側へ出ると雨が降つていた。なんと寒いはずだ。

少し血に酔つた体になは、その冷たい空気が心地よかつた。とにかく、今夜はもうゆっくり休みたい

異常な緊張が解けた為か、感じるのはひどい疲労だった。月島は自分  
の部屋へ倒れこむようにして入った。

「困ったの」

万里小路は月島の報告を聞いてため息をついた。

「当分、上様には静山はひどい風邪をひいたとお伝えください」「しかし傷跡はどうしますん?」

「考えたのですが、灸が失敗したとするのは、どうでしょうか? ひどい火傷を起こした為、傷が残つたことにするのです。御床は暗いですし、そう分からないと思います」

「分かる分からへんの問題やあらへん。上さんのお気入りの女人に傷がついた、ということが問題や。わたしらにも責任がかかってきます」

万里小路が強い口調で言つた。

「そんなもの、黙つていれば分からぬではありますぬか」「きつぱりした月島の口調に、万里小路は一瞬ぎょっとした。

「ほんに、傷は分からへんのか? 懐剣で刺した傷やろ」

「見た限り、上手くいけばかなりきれいに治るでしょう。それに大体、上様はわき腹の後ろまで熱心に触られる方ではございませぬゆえ」

月島はくくくと笑つた。

自慢のか家賢への嘲笑なのか万里小路への嫌味なのか、区別のつかない発言に万里小路は顔をしかめた。

「あんたが言つんやつたら間違いないやん。わっしに任せるとかいに。ほんに、せっかく上さんの寵愛が向いてきたゆつのに運の悪い。村岡んとこの<sup>かずの</sup> 笹野とかゆー娘が最近ちよちよしてかなわん」

笹野は年寄の村岡が呼び寄せた、若い部屋子であった。

「村岡の姪とか言つてゐるけど、まあうんや。証拠に村岡にちいと似ておらん。ナビ、そんな事はビリでもええ。あの<sup>かずの</sup> 笹野とかいう娘自身が問題じや」

「はい。男好きする美人で、ナビこます。肉づきが良くなかなかそそられまする」

「ナビちが天女風やと思つて、そつちでできおつたわ」

「もう少しでしたね」

楽しそうな月島に万里小路は不審がつた。

「なにが、もう少しや」

「ご存知ないのですか」

「だから、何がや」

「静山は御床も達者です。 笹野がどうにつけた素性の者かは分かりませんが、その気になれば上様の体を望外に喜ばすのも、さほど難しいものではありません。単にそつしなかつたのは上様がそれほどお若くないのと、それをそれほど望まれていない、と考えたからでしょ」

「う」

「何といつ自信。」

「自分の部屋づきが負けるはずがないと思つてゐるのだ。」

「そら、あんたが御床の作法まで教えたたら、他の者は勝たれへんや

るな

「わたくしは、そのような事いたしません。 静山の」とさわたくしより万里小路さまの方が「ご存知なはず」

万里小路はぐつとなつた。

女しのびが特殊な体の技術を持っているとは聞いていた。  
それが、あの静山だとどうしても実感できなかつたのに、月島には分かつたのだ。

「風邪は止めて、貧血がひどい事にしましょ」「は？」

「本当に出血しましたし。 静山は血が少ない病。そのため少しの間床入りはむづかしい、としましょう。 うまくいけば上様の情けもひけますゆえ。 美人薄命は世のならいでありますし」

「何といつ

もはや口が出せなかつた。

「それより万里小路さま、今回の件に関しては大きな貸しでござりますよ」

自分が殺されかけたこと、と、静山の素性を知つてゐる万里小路に 対する牽制だつた。

はあ、と万里小路はまたため息をついた。

「分かつてゐる。 で、何が望みや

「しばらくはわたくしの好きにさせてもらひますゆえ、 お田いじめしを」

「『ひのせ好きに』してゐるやなこの。それだけでええんか  
『わうわんに』『わこま』

艶やかに笑つと円島は頭を下げた。

可憐なプリムローズが一輪、枯れかかっていた。

山のような見舞いの品に埋もれながら、静山は物憂げだった。

「上様のおなりで」『わこま』

その言葉のすぐ後に家賢が静山の部屋に現れた。ふとんから身を起し立ち上がるつとした静山に「よー、よー、そのまま」と家賢はたしなめた。後ろには円島らが付き従つていた。

「じりじりや？ 様子は？」

「はー。おかげで少しよくなつたよひに思こます」

「つと、まだ顔色が幾分白い。御匙医は色の濃い野菜や動物の肝を食べれば元気になると言つておつたや。食べておるか」

「上様、静山どのは苦手な肝も頑張つてお食べになつておつます。ほんに素直な方で」『わこま』

月島が口をはさんだ。

「ふふふ、怖い御年寄が付いておれば食べぬとは言ふま」

「上様」

とがめる言葉と同時に円島は笑つた。

家賢は口端だけあげ静かに微笑んだ後、尋ねた。

「静山、何か欲しいものはないか？ すぐに用意をせぬぞ」

「いいえ、上様からは、もう沢山お見舞いの品をいただいております」

「では、何か芸でもさせようかの」

「いいえ」

首を振つていただけの静山の田に不意に意思が宿つた。

「……どうした？」

「……円島さまの舞いが見たいのです」

一斉に皆の田が円島に注がれた。

狼狽したのは家賢だつた。

「円島？」

凍りついた表情をしていた円島は口を開いた。

「何を言つのです。わたくしは踊子ではありませんぞ」

「静山、踊りが見たいのであつたら踊り師匠に舞わせよ。ついでに、じゃ、囃子方も一流をそろえよつ」

「いいえ」

震えるよつて静山は田を閉じた。

「失礼なことを申し上げました。踊りは結構にござります」

静山は深々と頭を下げた。

どう言つていいか分からなくなつた家賢は、また来ると残し、部屋を後にした。

どうして静山は円島の舞いが素晴らしいと云ふことを知つている

のだろう。どこで聞いたのか  
家賢は忘れていた胸の痛みを思い出した。

そう、月島は軽やかに、情熱的に……また叙情をたたえ、陽氣で、艶やかに舞つた。

あまり感情や欲求を持たないように見える月島が、舞を舞っている時だけは別人のように生き生きしていた。

御三の間にいた月島が、家賢の田に止まつたのはその舞の才ゆえだつた。

\*御三の間…武家の子女の勤める一番下クラス、掃除や雑用、踊りなども披露した。

格式ある踊り元などに言わせると型破りが過ぎると不評であつたが、誰が見てもその活力には惹きつけられた。そんな舞手だつた。

探り

「上様？」

ぼうつとしていた家賢は、自分を覗き込んでいる藍色の瞳に引き込まれた。

月島だ。大奥女中は将軍を部屋まで見送るのが礼儀だった。

「どうされました？」「気分がすぐれませんか？」

「……」

甘やかで懐かしい香が、月島の肌の下から漂つた。

不意に家賢の中で何かがはじけた。

月島の手首を掴むと、自分の御子座敷まで一気に連れ込んだ。

「誰も来るな」

月島部屋の女たちは動搖していたが、それ以上は追つてこなかつた。急くよつと月島の着物を脱がすと、畳の上で全身をまさぐり吸いあげた。

よほど飢えていたのか事が終わるのに数刻もかからなかつたが、それで終わりではなかつた。何度も何度も求められ、とうとう月島は気を失つてしまつた。

ふつと氣付いたときは、家賢の腕の中だつた。

「氣付いたか

「うえさま？」

「大丈夫か……もう少しで御匙医を呼ぶところだつた」

「大丈夫でござります」

御匙医を呼ばれると、他の御年寄の耳にもはいる。それは嫌だつた。

肌襦袢をはおりながら不意に今、自分と家賢が一人きりであるのに気付いた。

『そりだ、今なら聞きたい』ことが聞ける』

月島はふわりと家賢を後ろから抱きしめ、囁いた。

「上様、最近わたくし新しい御札を手にいれましたので何か祈祷しそうと思つております。何かよい願い『』とは『』ませんか。大変によく効く御札だそうです」

「そなたが言う御札なら、よく効きそうであるな」

会話の間も月島は家賢の頬を指先で愛撫する。

「はい、大変によく効くと評判に『』ります。特にまつり『』とに最適だと言われておりますが、わたくしは上様の健康を『』祈願するのがよいと思つてゐるのです」

「健康はもう十分に他でやつてもらつておる。それより、そのようなことをされると……」

家賢に再び月島の体を触れつつ戯れた。月島はそのまま話しあを進め、いつも味気ないセックスをさせられている家賢は、自由になつて氣も大きくなつていたのか、ついに口をすべらせた。

「じつはオランダ国王より国書がどぞいての」

「国書？」

「そりなのだ。それが困つた内容で……そりじゃ、そなたの意見を聞けばよかつたのじや」

家賢は小姓を呼ぶと、さつと国書を取りにやらせた。

蘭語から訳された内容を読んで丹島はつなかつた。

それは世界情勢を説き、鎖国政策を廃止することが得策であると述べられており、開国を勧める内容だつた。

「異国は蒸氣船を作る技術を持っている、とあります、船にも動力がつけてあるということでしょうか。わたくし、蒸氣機関車という鉄の車が走つている絵は見たことがあります、船は知りませんでした」

「鉄の車の絵こそなぜすぐに余に見せなかつた」

「本物か空想画か分かりませんでした。まさか、そのような鉄の車が存在するなど。後で上様にはお持ちいたします。ええと、開国について、でござりますね。蒸氣船が本当であれば」

「蒸氣船は本当だ。ただ、清国をやぶつた話や、植民地の拡大云々はどうも話が大げさに書いてあると、老中たちは言つのだ」

「そうでしょうか。ずっと交易してきた蘭国が、今更大げさに書く理由があるでしょつか。しかも国王直筆です」

「それが問題なのよ。あちらに返答せねばならぬ」

「開国の勧め、あくまで勧めですので、お茶を濁しておくことは可能でしょつか。本題は強い将軍がしつかりと国をまとめていけるかどうかです」

「では強い将軍とはどのようにするべきか」

「まずは国の防衛力をあげるべきかと。しかし、そういう新しい政策は必ず古い体制に阻まれ進みません」

「やうじや、そのとおり。金がないの、前代未聞だの遅々として進まぬ」

「ですでので、しつかりと上様の意見を通すことが必要になつてきましょう。それに、お世継ぎ体制も整えておかれることが大事かと。今後の幕府は異国問題を避けて通れませぬゆえ、お世継ぎの方にも異国対策を十分に学んでいただかねばなりません」

「はあ、それが問題じや」

憂鬱そうに家賢は顔をそらした。家倅が出来ないことは分かりつつていたのである。

「月島、そなたが子を生んでくれたなら家倅の跡目は形ばかりにして、その子を家倅の養子とし跡継ぎにする。そなたが産んでくれた子なら聰いに違ひあるまい」

「力不足で申し訳ござりません」

月島は深々と頭を垂れた。

「もう少し頑張ってくれぬか」

それは床入りをせよ、との意味である。しかし年寄りである皿川規則を破るわけにはいかない。それは家賢とて分かつていた。

月島は申し訳なさそうに頭を伏せた。

「まあよい。今回で懷妊する」とも考えられるのでな

「上様、そのようになつておられませぬ」

「余とて……分からぬのじや。異国対策など、どににも教えもない。周りのものは口を揃えて鎮国することが祖法だと云つ。少数の変人

とも言わるものだけが開国を勧めている。これでは、鎮国でいくしかないである。」

「少數の変人ではありますぬ。幾つかの藩主は開国も念頭においておりまする」

「そなたは開国派なのか」

「いいえ。開国すれば恐らく國は大混乱に陥るでしょ」

「では鎮国でいくのだな。」

「……はい。ですが、出来るだけ防衛力を高めるよう力をそそがねば

「分かつておる」

完全に今までどおり鎮国でいけるとは思えなかつたが、家賢にはこの意見が限界だらう。

結局、世継ぎのこともあれ以上は言えなかつた。

『「」の先は鍋島斉正の動きを見てからでも遅くない（つまり暗殺計画）』

そんな恐ろしいことを考えつつある円島を家賢は抱きしめてきた。ゆっくりと揺らしながら甘えるように口を開いた。

「むずかしいことはもうよこ。せつかくそなたと語るのだから。何か膳でもひらひらと運ばせようぜ」

「上様が『』注文すると、やつてくるまでに半時はかかってしまう。わたくしの部屋子に用意をせましょ」

月島は妖艶に笑つた。



## それぞれの役目

「よかつた、それほど傷は分からぬよつだ」

抜糸を終えた円島は、いつぶしてこる静山の體中の傷を確認した。

「…………」

「どうした？」

「傷など治りなくともいいのです」

円島は田を見開いた。

側で片付けをしていた山吹やおまつ動きも止まった。

「何を言つ

「わたくしが傷ものになつたら、円島さまの経歷にも傷がつきますか」

少し黙りこんだ後、円島は静山の体に静かに襦袢じゅばんを掛けた。

「なぜ無言なのです。なぜわたくしをお避けになるのです。ややこしい女だからもう係わり合ひになりたくないのですか。田も含ませてくださいな。…それなりにこれから追い出してくださりませ」

「せ

静山は今にも涙がこぼれそうな田で、きっと円島を見あげた。

おまつはちりと円島を見ると、山吹を連れて部屋を出て行った。

しばらべ無言で座っていた円島は小さく息を吐いた。

「すまぬ、わたくしが悪いのじや」

確かに事件以来、月島は静山を遠ざけていた。カラクリ棚や山吹の存在を知つてしまつてから、どのように扱つてよいのか分からなかつたのだ。怪しい女人が家賤の寵愛も深いといつことも、年寄りとしては混乱する。

それ以上に別の気持ちもあつた。

「わたくしは自分の気持ちが分からぬ。そなたに対してどう接していいかも分からぬ。こんな思いは初めてだ。そなたを愛しく思う気持ちとそれを歯止めしなければならぬ、といつ思い、それがないまぜになつておる」

静山は襟元を持ったまま少し顔をあげた。

愛しく思う気持ち？

その言葉に静山の心は高鳴つた。

「本当にござりまするか？」

「本当じや。だから困るのじや」

「わたしは困りません。お慕いしてゐるのです」

静山は襦袢を跳ね除けて、月島の腰に抱きついた。みずみずしい肌が露出した。

「いたつ！」

月島は顔をしかめた。

「月島さま？」

異変に顔をあげる。下腹部に何かあつたようだ。

「す、すまぬ。……少しどこへづられ

円島は苦笑いして、静山の頭をやさしく撫ぜた。

じつと観察するような目で見ていた静山は、上半身裸のまま驚くべき速さで起き上がった。

「失礼いたしますー！」

言つが早いが、あつという間に手は円島の裾を割つて、恥骨や秘部のあたりを確かめた。信じられない非礼に円島はしばらく何が起つたか理解できなかつた。

「何をするのじゃー やめよ

「これば……」

手についたのは血の混じつた帯下たいげだった。

\* 帯下 = お

りもののこと

「こつからですか。御匙医には見せたのですか？」

語氣も荒く静山はせつた。

「……一日前からじや。すぐ治る必死で秘部を隠しながら後あつた。

「いけません。放置しておいたら  
「交わつたあとほつもなのだ  
「え」

観念したように円島は打ち明けた。

「上様に所望されたのじゃ」

静山にはすぐに理解できなかつたが、部屋の者たちがなんとなく様子がおかしかつたことを思い出した。

「本当は辞退せねばならぬ立場なのに、大きな声で言えぬ

何だか静山は悲しくなつてきた。

月島の体では、床の相手をすることは無理なのだ。奥の仕事の総責任のつと、夜の相手までは荷重すがた。

「お願いです」やれこま。わたくしの薬を使つてくれださつませ。あつとよくなつますゆえ

「ん……」

静山の薬は信頼していたのか、月島はすぐうなづいた。

「もひ、あまり無茶はしないでくださいませ。わたくしから上様に申し上げます」

「それはダメじゃ」

「いいえ。体を壊しては元も子もありません」

「体を壊しても、しなければならないこともあるのだ」

「それは何ですか

「それは……大きな願いのため

「大きな願い？」

「それは、そなたにとつての?お役目?と同じようなものかもしだれ

ぬ

## お役目

裳羽服津である身。静山にもその重さは分かつていた。そう。水み戸為昭に命を賭してもやりとげる、と誓つてきたのだから。

「だから、上様にはだまつておいてくれ」

じつと見つめ合つしかなかつた。不承な気持ちであつたが、月島の言つことは分かつた。しかし、月島のいう大きな願いが何かは想像できない。

「分かりました……」

そのまま着物でくるむように月島を抱きしめた。

「もう少しのままでこたせてください」  
大切に包んで癒したかった。

月島はいよいよ安心感を感じていた。重い鎧が無くなつていいくような感覚だった。

静山には、なぜかすべてをあづけられる気がした。

魂の片割れのようだ。

## 月に舞う

数日後、江戸城に激震が走った。

家賢の跡継ぎ、家徳が倒れたのだ。御匙医の見立てでは毒物を飲ませたのではないかと言うことだったが、依然として詳しいことは不明であった。

母親であるお美津の方は半狂乱となり寝込んでしまった。大奥では華やかしいことは一切禁止となり祈祷の日々が続いた。

家賢の奥泊まりも当分はないとのことであった。

静山は夜の庭で池に映る月を見ていた。

今回の事件に龍才たちが関わっているような気がして胸騒ぎを押さえることが出来なかつたのである。大奥に上がってから袴羽服津衆たちからの文はいつかいなかつた。

水戸からの指示として、龍愛を受けよ、との大まかな指令がくるもの、手紙は一からの方通行がほとんどである。

大きな海に一人放り出されたような気分だった。家族もなく、情報もなく、不安なまま、誰も知らない場所で囮われたまま一生過ごすこと。

なんとつらく孤独であろう

皆、こじのよつな思いをしているのだろうか。お宿下がりが叶わぬ者たちは、だからあれほど上様の寵愛を競い、贅沢をし権力を欲し、人を貶めずといられないのだろうか。

静山は胸元から笛を出した。唯一、母からもらつた形見だつた。唇に当てると息を吹きいた。

中音から始め旋律を奏ではじめた。

もの悲しげな音色に入り込む静山 あかりは目を閉じた。冷たく澄んだ空氣にのせて、どこまでも笛の音はしみいつた。

「まだけは…… まだけは」の音色と共にこじよつ

笛に入りこんでぐらいたつたろう。

不意に気配を感じて静山は振り返つた。月明かりの中に髪を下ろした月島が立つていた。

「なんという美しく悲しい音色じゃ」

「……」

「心が苦しいくらいに震えた。そなた、笛ふきか」

静山は少し目を伏せた。

「そなたわたしが舞えるとなぜ分かつた」

「中指に扇の指だこがあります。それほどになるには毎日、相応の練習をなされていなければなりません」

「バサツ。

月島は持つていた扇を広げた。銀地に金の月がかかつた舞扇だつ

た。

「わたしに会わせられるか？」

そのまま円島は扇を返すと腕を前に出し構えた。

「お身体は……」

円島は答えず、視線を固定し舞いに入る氣を放つた。静山は、そのまま引き込まれたまま円島の姿を見据え、笛に息を入れた。

能「松風」の一場面の形から入った舞は、どんどんと形を変えた。羽のよつに空を上昇したかと思つと、海の波のようになつねり落ちていいく。

胸が高鳴るほど躍動しかと思つと、月の映つた水面のよつに静かになつた。

円島は自由に舞つた。静山は寄り添つよつと奏でた。

なんて、なんて気持ちいい

いつしかふたりは微笑んでいた。互いの瞳を見て。

躍動し、躍動し、このまま上昇して…

「お止めくださいー」

てあんじん 手行灯を持った墨越が歪んだ顔をして立っていた。

「こよつな夜更けに、いくら円島をまとめて見つかればただでは済

まれませぬ

「心配のし過ぎやじや」

扇をたたみながらすねたよつて答えた。

「大奥では只今過分な歌舞お離子は禁じられております」  
「過分だと申すのか」

「「」のよつな時期に相応しくない」と申し上げて居のです

月島はふう、と小やくため息をついた。

「静山、帰ひつ。冷氣が傷にさわる」

「は」

静山は胸に笛をしまった。

嫉妬の怒りに燃えた墨越の日が痛かった。

でも、やはり月島もまた素晴らしい舞手だった

ふたりで協奏した興奮を、静山は押さえることが出来なかつた。その余韻は官能的で耐えよつもなく気持ちがよかつた。月島も同じだつた。

もつと舞いたい。静山の笛に合わせて

墨越に分からぬよつて、そつと熱い息を吐いた。

## 再会

家<sup>いえ</sup>倅<sup>さち</sup>は小康状態を取り戻した。

大奥でも快氣祝いと称して各部屋で歌舞や祝いの会が催されていた。

しかし月島はイライラしていた。

夜の年寄り会。議題は、大奥への経費削減を阻止するべし、であり、皆が皆、どうやって今ままの贅沢を続行できるかどうか、だけを口々に議論していたからだ。

異国がわが国を狙っているといつのこと、何と悠長な

いつだって大奥の女たちは改革というものを頓挫させてきた。大名たちは貧窮し商人たちに莫大な借金をしている一方、そのつけを百姓に負わせようとして一揆も頻発している。飢饉も起こり深刻さは増すばかりであった。

「皆さま、どうしてそう伝統にこだわるのです。少しずつ行事の規模を小さくしたとて、不都合はありますまい。今は江戸の町まで打ち壊しがおこっています。このまま放つておけば、もしや、ということもありまする」

「もしや、とは？」

夏川は口をとがらせて月島を睨んだ。

「江戸城にまで暴徒がやってくると誰のひのですか」

「かもしれませぬな。そんな時、幕府の役人の数が少なく、我々を守ることが出来なかつたらどうしましょう」

「十分な数のお役人が江戸城にはいるではありますか」と、村岡。

「給金もまともに払えぬようになつた幕府では、お役人の気概は自然、落ちておりまする」

おつとりしてみえる美津波瀬でさえ信じられないといった顔で反撃した。

「月島さまは、役人たちが江戸城を見捨てる、というのですか。ありえませぬ。大体、この江戸城に町民がやつてきたとて千や一千では落ちませぬぞ。神君、家康公が作ったお城ですから」

「そういうた問題ではありますぬ。下々へのまつりごとが上手くいつていないと、いすれは我々にもそのつけが回つてくる、と申し上げていいのです」

「なぜ下々の生活と我々の生活が関係するのでしょうか。我々が商人たちに金を落としてやれば、そのぶん下々の者たちにも資金が回るのが筋ではありますか」

「実際にそうなつてないから問題なのです。商人たちは我が懐に沢山の利潤を入れますが、下々には雀の涙ほどしか与えなければどうなります。

また、田舎との格差は増すばかりで農民たちの貧窮はひどくなっています。ひとえにこれは、貨幣経済が自給自足の土地経済を破壊したからではありませんか」

「だからって、わたしにそれをどうすることが出来るの。大奥が僕約したからって、その農民らが救われるという話にはならんやろ。農民の話は藩のまつり」とのせこや」

万里小路さえもいやな顔で反論した。円島は心の中で、大きなため息をついた。

これでは、全く話が通じない。

正月に向かうこともあってか、外の雰囲気は少しつまらなきていた。

遠く近くに女中たちの騒ぐ声が聴こえる夜。

御池のあたりで、静山は笛の練習をしていた。

もしかしたら円島さまが来てくださるかもしれない  
淡い期待を胸に、笛を吹いていた。

ほー、ほー、ほー。

三度のフクロウは裳羽服津衆の合図であった。

静山は御池周りに生えている一本の松の木に目を移した。

「ほーだ、あかり」

音にならない声は龍才だった。

素早く廻りを見渡して静山は松影に近寄った。

「どうして龍才さまがここへ？」

「おまえに会いたくて來た」

「どうやつて…」

なんといつ危険であるつか。家侍毒殺未遂以降、警護は厳しくなつていゐる。

「静山」、ひと、あかりは青くなつた。

「昼間に運ばれた衣装の長持ちに隠れていた。ここへは山吹が案内してくれた」

あたりを見渡してみると山吹は見当たらぬ。

「山吹は？」

「周りを見張つていゐ」

はあ、とあかりは一息ついた。

「何かあつたのですか」

「お役目が、もう少しかかりそつだと伝えに来たんだ」

意味が分からなかつた。

「おまえが裳羽服津を離れて四年以上になる。今の状況が分からぬと困るのではないか」

それはそうだ。あかりはうなづいた。

「そなたからの文は水戸の殿で止まつておるので、俺らにも詳しいことが分からぬ。……こつちは家侍さまの事でな」

「では毒薬を仕込んだのは」

龍才はじつとあかりを見たあと、強くうなづいた。

「しかし結果は失敗だつた」

蓑羽服津衆の失敗は、水戸藩の失敗でもあり血頭を危つへせざる。

失敗したしのびが許されるはずなかつた。

「お、お咎めは？」

「俺は死ぬ覚悟だつた。が、殿はお許しにならなかつた。死んで詫びるなど許さぬ、生きて役にたつてこそつぐないだと申されて。今のところ証拠が一切ないので、お殿さまも溜飲を下ろされたのだと思つ。なにより……」

龍才は一息入れた。

「お殿さまは、強制隠居させられての」

「え？」

水戸為昭みとなつあきが強制的に隠居させられたのは、過激なまでの尊王思想と下級藩士による軍事力の強化に幕府が驚異を抱いたからだつた。

「だが、家俸いえどさま暗殺はまだあきらめではおられぬ

「では、再度？」

「ああ。でも、わしらを使つのではなく他の方法を探しておこでじや  
「他の方法？」

「それは分からぬ。同じ方法では足がつく可能性もあると言われて  
…他藩の殿さまたちと相談されておるよつだ」

「では蓑羽服津のお役目はまだ決まっていないのですね」

「そうだ」

あかりは悲しそうな顔をした。

「本当に家僕さまの命をいただく必要があるのでしょうか。天真爛漫に過ごされているだけですのに……」

「それを決めるのは我らではない」

しのびに判断は必要ない。  
それは分かつていて。

だが実際に見る家僕は子供のように純真で無垢な人間であった。命が助かつたと知った時、あかりは心から嬉しかったのだ。

その家僕を殺す？ お役目だから？

また胸に何かが詰まつたような感覚が起つた。

「あかり」

龍才が優しく名を呼んだ。

「気にやむな。これは言わねばよかつたな。俺は失敗ばかりしておる」

愛情を感じさせる龍才の声に、あかりは懐かしい暖かさを感じた。あかりにとって家族は裏羽服津であり親方であり龍才だつた。その近しい感覚は、安心感とホツとさせるものを持っていた。

「少し顔を見せてくれ」

龍才は蠟燭に火をつけ、あかりにかざした。

「なんと美しい。……本当の姫のようだ。いやそれ以上だ  
「もう夜ですから、化粧もとれおりましょ？」

本当は円島の好みに合わせて薄化粧にしていたのだが。

「いや、とても美しいぞ、あかり。やはりそなたは、そつでなければ」

「何がそつだ」

あかりは笑つた。

いつか龍才是、贅沢な御殿女中のようににならねば、とあかりに言った。

「これでは上様も」執心になれるはず……やはりあの噂は嘘だな」「噂？」

「上様がおまえの他に心奪われている女性がいるとかいう話だ。おまえが上がる前の話であろう」

あかりは微笑んだ。

「いいえ。大奥はやはりすごい所です。綺麗な方が大勢おられます」「本當か？信じられぬ」

「見田麗しい上に教養も高く歌舞の才も素晴らしいのです」  
誇らしげに語るあかりに龍才是少し疑問を感じたが、嬉しそうな顔をしていたので安心した。

「顔見て少し安堵した。大奥は特殊な場所ゆえ、あかりがどうしておるかずっと気になつておつたのだ。親方も口には出さぬが、おまえの事を恋しがつておる。サエや勘介も」

懐かしい名前はあかりの顔を緩めさせた。

「何か欲しいものはないか

あかりはふるふると頭を振った。

龍才の顔を見られただけで十分だった。

「龍才さま、もう来ないで下さい。見つかったら命はありません」

「守りが手薄な道を」

見つけたので大丈夫、と言いかけた時だった。

何か悲鳴が聞こえた。

そして匂い。長つぼねの方からだ。

「あかりさま、火事です！」

山吹が駆けてきた。

御対面所棟の向こうから、白い煙がもうもうと立ちあがっていた。

「あれは、一の長つぼね……！」

月島たち御年寄の居所は一の長つぼねにあった。

「月島さまあ！」

あかりは駆け出した。

## 大火

「火事にござります！火事にござります！」

その声に、いつせいに年寄たちは立ち上がった。老女詰め所は、松の御殿奥にあった。

「どうからじやー！」

万里小路は廊下を駆けてきた女中に叫んだ。

「東の一の長つぼねあたりからの出火でござります。既に一の長つぼねは半分以上が焼けております。現在、東の御錠口、二のつぼねにも引火、こちらも危険でござります。すぐにお逃げください！」

「なんとー！」

真っ青になつたのは夏川と村岡だつた。一のつぼね東に自室があつたのは、その二人だつた。

「御対面所の廊下からお庭に出て、その後中奥へと逃げよ。我らが行つて御錠口を開けさせねば。中奥におられる上様も危ない。急がなくては」

万里小路は震える声で指示した。

「中奥には後で参りますので先にお行きください  
「丹島ー！」

走りゆく丹島を部屋の墨越だけが追いかけた。

静山……おまつ、山吹

部屋たちの安否が気かりだった。

一の長つぼねの端廊下までくると、きな臭い匂いと煙、遠い悲鳴が渦巻いていた。

足元が熱い。火は床下を這つてきていようつだった。

七、八間進んだあたりで、円島は足を止めた。熱気と火の勢いが強くなり命の危険を感じた。

「もうダメです！逃げましょ！」

墨越が叫んだ。

「一いつちじや」

円島は廊下から庭へ飛び降りた。

少し先にある自分の部屋に田をやると柱や支柱は残すものの、すべての空間からは火がぬらぬらと舌を出していた。

「静山一、おまつ、山吹一」

絶叫しながら部屋へ走り寄つたが誰も答える者はいなかつた。

『みな逃げたのだろうか』

その時だつた。

屋根が崩れ落ちてきた。

火の粉を振りまきながら真っ黒なものが、自分に向かつてきたのが、はつきりと見えた。時間が伸びる。

避けられない

その瞬間、月島はふとび、したたかに背中を地面に打ち付けた。  
さつきまでいた場所に、ガラガラと屋根が落ちてきた。

再び顔を上げると

墨越はいなかつた。

かわりにあつたのは燃えさかる火。

火……火。

何も。

聴こえなかつた。

御池の庭を横切り、御対面所に近づこうとした瞬間、あかりは手首を掴まれた。

龍才だつた。

「だめだ、あかり！」

「離してくださいっ！」

「この勢いじゃ危険だつ

「離して！」

あかりは大きくもだえた。何度ももみ合い、龍才是ついに当て身

をしてあかりを失神させた。

そのまま肩にかつぐと走りだした。

そうだ。逃げるんだ

遠く、遠く……

龍才はひたすら火から、江戸城から遠く離れることしか頭になかった。

一方、山吹はあかりが龍才に助けられるのを見届けると、火元に向かつた。

女たちが悲鳴をあげながら、転がるように逃げていく。月島らしい人影を探すが見つからない。

火の勢いが一番強いのは、やはり一の長つぼねだった。

庭から近づくのが精一杯。東側の火勢が最も強かつたが、今や一の長つぼね全体に燃え広がり、火の海となっていた。

がらがらと木材が落ちている。

「月島さまあ！」

何度も叫んでみたが、煙の勢いで声も響かない。息が苦しい。

ごほつ、ごほつ。

目が痛くて涙が出てきた。

もう無理。逃げよう

命の危険を感じ、山吹が逃げようと後ろに下がったとき何か柔ら

かいものを踏んづけた。

月島だった。

ところどころに火傷を負つていただが息はあつた。山吹は焼けた打ち掛けを脱がせると、月島を背におぶつた。

先ほど静山といった御池まで来ると振り返つた。

もうもうと煙をあげた大奥は、火に照らされ不気味に明るかつた。風の向きと、建物の構造、土地の高さから、火がどう広がるか推測する。

山吹はしばらく考えた後、月島を背負つたまま西の桔橋はねばしに向かつて歩き出した。



## 逃避行

田を覚ましたあかりは飛び起きた。

どこにいるのか分からなくて辺りを見回す。  
暗いが何となく見える。質素な住居はどこかの町家か旅籠のよつ  
だ。

隣の布団の中で龍才が眠っていた。  
自分を無理やりこんな知らない場所へ連れてきたのだと思つと腹  
がたつた。

『こんなトコでられない』  
着物を探す。

「どこへ行く」

ぎょっとして龍才の方を見た。

暗闇の中でもじつと見られていることが分かつた。

「大奥に帰ります」

一刻も早く帰つて月島の安否を知りたかった。

「帰つてどうする？ また籠の鳥になるのか」

龍才が何を言つているのか分からなかつた。お役目を放棄せよと  
いつのか。あかりは、着物を着る手を休めなかつた。

「あれだけの火事だ。おまえが死んだとて不思議はない」  
「言われていい意味が分かりません」

あかりは顔を歪めた。

「あかり」

龍才は体を起<sup>こ</sup>した。

「お役目を捨て、俺と一緒に生きていかぬか。どこか小さな田舎で過<sup>ご</sup>せば、おまえと二人なら何とかなる」

あかりの動きが止まつた。

「龍才さま……」

『まだわたしの事をそれほど想つておられたのか』

「いけません龍才さま。抜け忍は一生狩られます。それに……親方たちを見捨てることが出来るのですか」

「覚悟のうえだ」

低くはつきりとした声で龍才は答えた。そのような事あかりに言われるまでもなく分かつていた龍才だった。

「俺はな……ずっと迷つておつたのだ。忍びとして生まれたこと、生きること。お役目の為ならどんな不本意なことでもやつてきた。だがな、本当にそれでよいのか？」

俺たちは、たまたま忍びの里に生まれただけなのに、そりやつて操り人形のように生きていく事が正しいのか

あかりは息を飲んだ。それは何千、何万と考えて答える出なかつた問<sup>い</sup>である。

「そう思つておつた時、火事が起<sup>こ</sup>つた……」これは天の采配ではないかと思つた。おまえと俺、ふたりで生きよ、と

あかりは龍才の眼をじっと見た。  
少し夜が明けてきていた。

「例えそうであつても、今のわたくしには出来ませぬ  
「なぜじや！ 僕が嫌か？」

「いいえ」

「抜け忍狩りが怖いのか？」

「いいえ」

立つていたあかりは龍才の前に正座をした。

「龍才さまは、わたくしの兄上さまではござりませぬか」

龍才は一瞬、雷に打たれたように衝撃をうけた。

『なぜ知っている？』

全身の血が凍り付いていくような寒気を感じた。

「何をいつているのだ？」

「親方と一緒に住むよくなつて、父上さまであらうな、と感じた  
ことが何度もありました。親方が母の形見の刀と同じのものを、肌  
身はなさずに持っているのを見た時、わたしの直感が間違つていな  
かつたことが分かりました」

「そんなことは知らない」

龍才は信じたくないかのよくなに首を何度もふった。

「龍才さま。申し訳ござりません。一緒にに行けませぬ

「だめだ、あかり。もう、お役目など終わりだ。大奥は焼けてしま  
つたのだから」

その言葉に、あかりはハツと現実にかえつたが、我を失っている龍才は気付かない。

「たとえ大奥が焼けたとしても、大奥そのものがなくなつたわけではありません。もう、いかなくては」

立ち上がつたあかりの手を龍才はつかんだ。

「いくな、あかり。今を逃すともう一度とも自由になれぬぞ」「すみませぬ。龍才さま。たとえ妹でなくとも、わたくしの心は、龍才さまに差し上げることはできません」

それを聞いた龍才の顔は、以前にも見たことがあった。めおとになつてくれと言われて、つき押した時の、その表情だった。

「誰か、好きな者があるのだな」

あかりは視線を落とした。

龍才はうなだれるようにだまりこんだ。

そんな龍才を振りほどくように、あかりは髪と小袖を整えると障子を開けた。二階から見た景色は、そこが街道沿いの旅籠であるのを教えてくれた。

龍才は馬でここまで来たのだろう。冷気が入ってきて上半身を包み込んだ。旅籠で見ると豪華すぎる打ち掛けだつたが、防寒のため裾からげをして羽織つた。

「馬をお借りします。お助けいただきありがとうございました」

頭を深々と下げるとき、あかりは部屋を出ていった。

階段を下りていく足音。

龍才はそれを、じつと聞いているだけだった。

江戸城本丸、大奥から出火した火が完全に鎮火したのは三日たつてからのことだった。

幸い城下に燃え広がることもなく本丸を四分の三、焼いた程度で食い止められた。

将軍は居城を西ノ丸に移し、本丸にいた女たちは西の丸と二の丸にある大奥に分かれ過ごすこととなつた。

が  
城では依然、混乱状態が続いていた。

反面。

郊外に逃げていた町人たちは火が治ると、あつと言う間に戻つてきて、すぐに元の生活を始めた。

江戸っ子にとつて火事は大惨事であつたが頻回に起つるものでもあつたので、いちいち気にしてはいられなかつた。

それよりもお城が、今後どう再建築されるかというほうが気になつた。税が課せられるのでは、普請に入手がかかるので仕事口が増えるのでは、材木問屋が儲かるのでは、などなど、噂があちこちで飛び交つた。

そんな師走の半ば。

神田にある診療所、くもあん雲庵に笠をかぶつた一人ずれの女性がやつて

れた。

日も暮れた、夕七つ半（午後五時頃）のことだった。

「雲才さま、山吹でござります」

真っ暗になつた土間入り口から声をかけた。

「なに山吹とな」

玄関の奥から柔和な顔をした初老の男が顔出した。  
町医者らしく剃髪せず、中肉小背、深縁の綿入れの上下を着ている。

「おまえ、無事であつたか。今までどこへ行つておつたのだ……ん  
？ そちらの方は？」

山吹の後ろに隠れるよつこじていた女性は、ゆつくつと笠をはずした。

夜目に白い顔が現れた。

「小夜、と申します」

落ち着いた低い声。線の細い美女に似つかわしくないその声は、女性の知的な部分が現れていた。

「雲才です。この辺りで医者をやつております。まま、そこでは寒い。お上がりください」

薬草の匂いが家中に漂つっていた。

ふたりは奥に通されると、座敷に腰を下ろした。

「薬があるので暖を入れておらるのです。寒くて申し訳あり

ません」

急いで炬燵に火をいれ、火鉢を近くに持つてくる。

「「」はすぐに開業出来たのですか」

山吹は小夜を座らせるとい、お茶を入れている雲才を手伝いながら聞いた。

「ああ、城下は被害がなかつたのでな。一時は荷車にありつたけの薬剤をつんで逃げたんじやが、すぐに帰つてきた。しかしあそれからが忙しい忙しい。逃げる時けがをしたやら、心の病が出たやら言うて沢山押しかけてきての」

「そうですか……」

山吹は少し黙つた。

「今日うかがつたのは、小夜さまを診ていただきたくて来たのです」

「うん」

暗がりで見た時は分かりづらかつた小夜の顔。その顔にあつたのは火傷だった。右こめかみから頬にかけて薄い赤い跡があつた。

「すいぶんと治つている」

「はい。しかし跡が残らないか心配で。すぐに冷せなかつたのです」

雲才は行灯を取つて、小夜の火傷の様子をじつと見た。

「もう痛みはありませんな」

「はい」

「」の様子じや後ひと月くらいで赤みも引くでしょ。跡は徐々に消えると思われます」

「よかつた！」

山吹は大きな安堵の息をついた。

「後でいい薬をお出ししよう。それを貼つておれば、きれいに治るでしょう。その上でお化粧をしたらほんとんど分かりません」

「ひとり用、ずっと貼つておく必要がありましまつか」

小夜は尋ねた。

「外出する時は外しても構いませんが、なるべく長い時間貼つておくほうがいいです。あと陽に当るのもよくありません」

小夜は何かを考えるような目動きをした後、「はい」とうなずいた。

「他の部分は大丈夫ですか」

「あの……その事なんです」

山吹が小夜の代わりに口を開いた。

「小夜さまは火事の後、お心が弱られて……記憶も混濁し、『自分

のやられていたお役目は自信が無いと申されているのです」

「ほお。食欲はありますかな」

「食べることは出来ますが……もともと食が細い方なので判断がつかないでいることがあります。それにすぐにお疲れになってしまわれます」

「夜は眠れていますか」

「あまり眠れません」

今度は小夜が答えた。

「氣鬱の症状が出ておりますな」

「どの位で治りますでしょうか」

小夜が不安気に尋ねた。

「早ければひと月ほどで軽快する者もありますが……この病は個人差が大きいのです。大事なことは焦らない、ということです。お薬を飲んでゆっくりとしておくことが必要です」

「そんな……」

小夜と山吹は信じられないといった表情をした。

「大奥御年寄がそんなに長く休めません」

山吹はつい口を滑らせた。

「本当にそうですかな?」

大方の予測がついていた雲才は驚きもせず尋ねた。

「確かに幕府の御役目は大事であります。しかし、あなたがいなくても仕事はまわってあります。そんな事、聰明な小夜さまは分かっておられるであります。」

その上でお焦りなのは、御自分の役職が無くなること生きる場所が無くなることに対する、どうしようもない不安なのではありませんか

か

「その通りでござります」

「しかしです。ここでは引くことも大事な時期に来ているのではありませんか

いでしょうか

「引く?」

「そうです。先陣を切つて進むことだけが大事なのではありません。

引いて自分の中に入る時期も必要なのです。人間は障害がないとかなか立ち止まれませんからな」

「頭では分かるのです」

「頭で考えめさるな。これ、山吹、薬湯をすぐに煎じて差し上げろ」

「はい」

山吹が立ち上がり隣の部屋へ出ていった。

「最近は記憶もはっきりしません。今までこんな事はありませんでした。こんな事ではお役目など絶対に出来ません。だからといってわたくしには他に何も出来ないのです……」

小夜はつらそうに息を吐いた。

雲才は何度もうなずいた後こう言つた。

「分かりました。二二二〇一九九九で集中的に療養される必要がありますな」

「それで治るでしょうか……」

「良くなると思いますぞ」

にっこりと笑つた雲才の顔を見て、小夜は迷子が母を見つけた時のような安心した顔をした。

「山吹と一緒にじぱりへ泊まつていきなされ」

薬湯を服用した後、小夜は療養所となつてゐる一階で深い眠りに落ちた。

「大変だつたの。何があつたんじや」

雲才は孫と話すように優しくに静かに山吹に尋ねた。思わぬ優しい言葉に、山吹はうつすら目に涙を浮かべた。

「気づいた時、大奥は火の海でした。わたしは月島さま、今は小夜さまと呼んでおりますが……月島さまを猛火の中で見つけました。氣を失つて倒れておられました。

とつさに火から逃れる為、わたしは江戸城から月島さまを連れて抜け出ました。そのまま春口通りを上がり護国寺の裏を回り、雑司が谷に行きました

「雑司が谷は將軍家の御鷹狩御用地ではないか?」

「はい。その為、木もなく飛び火の可能性が低いと思われたのです。それに……人目に付きくなかったのです」

「大奥の上役女人は江戸城から出てはならぬとなつておるでの」  
「その通りにござります」

「雑司が谷の、どこにおつた?」

「付近の農家に金目のものを渡しておいてもらいました。御用地近くの農家は鷹狩りの用向きを事づかつたりしておりますので武家の人への対応も慣れておりました」

「大奥の者とは気づかれなかつたか」

「恐らく。城下の火事から逃げてきた旗本の奥方と名乗つてはおきましたが……大奥が火元という噂が耳にはいれば分かりません。かたく口止めはしてきましたが」

雲才はふうふと息をつくと茶をすすつた。

「しかし、どうしたものか……あの調子では小夜さまは御年寄の仕事など出来んじゃん」

「はい……先ほどは申し上げなかつたのですが、火事のおり月島さまづきの部屋局へやつぼねが月島さまの身代わりで亡くなつたそうなのです。目の前で。時々は思い出されるのですが、普段はその記憶を消しておしまいなのです」

「それで記憶が混濁してあるのか……辛すぎる現実を忘れるため取つた防衛手段だな」

山吹は深く肯いた。

「最初気がつかれた時は、月島さまと呼んでも反応がなく『わたくしは小夜です』と言われて……どうしようかと思いました。大奥にあがる前の記憶に戻つてしまつていたのです」

その頃の月島の様子を思い出すだけで山吹は、胸がいっぱいになつた。

そこには大奥御年寄の威厳もなく、ただ哀れな少女がいただけだつた。

「大丈夫じゃ。一三日ただ食つて寝ておれば体が元気になる。そう

すれば前向きに考える」とも出来るよつてなる

「やうでしょうか」

今まで状況から考えて雲才の言葉は樂觀的すぎるよつな氣がした。

「あのな、山吹」

雲才は微笑んで諭たとした。

「一足飛びにはようならん。じゃがな、ああいつた患者には周りの者の愛情がなによりも必要なのだ。そなたはそばに居て『大丈夫です、わたしがそばにおります』と言い続ければよいのだ」

その言葉に山吹は急に顔色を変えた。

「あかりさま!」

山吹は口を手で押さえた。

「あかり?」

泣きそうな顔のまま山吹は黙り込んだ。

「あかりがどうした? 死んだのか?」

山吹は首をぶるぶると振り否定した。

「では生きて大奥にあるのだな?」

また山吹はぶるぶると振つた。

「では、どうしたのじゃ?」

「……分からないのです。龍才さまがあかりさまを連れて大奥から逃げられたことしか見ていないのです」

雲才は渋い顔で黙り込んだ。

龍才のあかりに対する想いを知っていた。そして、龍才の妹だと  
いふことも。

何か嫌な予感がしていた。

一方。

山吹は『愛情が薬』と言われ、あかりの事を強く思っていた。  
月島さまに必要なのは、あかりさまの愛情では?  
ふたりが強く惹かれあっているのを知っていた。

しかし……

今的小夜さまに、果たしてあかりさまが分かるのだろうか……

恐ろしい疑問が沸いていた。

## 死んだ月島

山吹らが雲庵を訪れたよりも、数日前にさかのぼる。

江戸城の平川門に血相を変えた女人が現れ騒ぎになつた。

質素な旅装束、草履はいうに及ばず脚半までぼろぼろ、であるのに自分は大奥の御中臍である、万里小路さまに会わせると言つて聞かない。

門番たちは疑つていたが、やつれ汚れていても女人の容貌がいつとつ美しかつたので、もしや、とも思い、万里小路まで取り次ぐことにした。

あかり、こと靜山であった。

「あんた……何ちゅうことをしはるんや」

万里小路はあまりにストレートな靜山の行動にこめかみを押さえた。

「大奥から出ただけでも大問題やのに、真正面から江戸城に入ろうやなんて。あんたを預かってるわたしにもお咎めが及ぶんやで」

静山は平身低頭するしかなかつた。  
だが、どんなお咎めも平氣だつた。御中臍から御末になろうとも大奥にいられれば、それでよかつた。

「しかしまあ、よつ無事やつた。あんたやつたら上さんをお慰めで

さるかもしれん。……ともかく早よ、風呂に入つて着替えといで

「あの……丹島さまは御無事でしょうか」

いの一番に聞きたかつた事だ。

万里小路はついつと後ろを向くと

「その話はまた後ほど」

と話を避けた。

静山は嫌な予感で真つ青になった。

「お願いいたします。お教えください」

「そんな姿で丹島に会つつもりですか？」

そうまで言われては、着替えるしかなかつた。

西の丸の大奥は勝手が違うので万里小路付き部屋子に一から十まで従う。

久しふりに身体を身ぎれいにし、旅のほこりを落とした。

やがて部屋子はひとつ部屋へ静山を案内した。

上段に大きな仏壇が配された部屋。

万里小路は座つて手を合わせていた。

「いらっしゃく」

自分の隣を開けると座布団に座るよひ促した。  
静山は黙つて従つた。

「これは、月島の位牌」

万里小路はひとつ位牌を指し示した。

白木に小さく字が彫つてあつた。月ややり秀やら女やらが入つている。

なんだ……これは……

静山は理解できなかつた。

「うちらと一緒に逃げておればこんな事にならんかつたんです。あの子おは愛情が深いから火事やて聞くと、長つぼねの部屋子らが心配で駆けていつたんや」

万里小路はそう言つて、涙をこぼした。

「一の長つぼねはひどい火事やつたから、遺体もよつ分からん。一緒に行つた墨越ものうなつたみたいや……そやから、あんたもてつくりのうなつた思てましてん。……本丸大奥では三十人以上の女中が焼け死んだり不明になつてます」

説明する万里小路の言葉を静山はまともに聞くことが出来なかつた。

「わたしが見つかったといつことは月島をまも生きている可能性があるつてことですよね」

「もう思いたい……でも一の長つぼねに駆けていくといふをわたしははつきりと見てましたんや。火元や。助かる可能性はほほない。それに月島はわたしらに言いました、中奥に後で行きますから、てな。でも中奥に来た形跡はなかつた」

「そんな事ありません。死んでません！死んでません！」  
静山は絶叫しながら首を振つて否定した。

万里小路は辛うじて下を向いた。

「円島さまは生きています。きっと他のところにおられます。……  
そうです。どこか他のところに」

何度も繰りかえすと静山は気が触れたよつに立ち上がり、「こんな  
ものっ！」と位牌を壁に投げつけた。

そして  
ござり、と倒れた。

「気づいたか」

静山が田を開けると家賢いえよしが座っていた。周囲には万里小路や部屋子がいた。

「上様……」

「よう戻つてきてくれた。月島もそなたも焼け死んだと聞いて……余はもう生きているのが嫌になつておつたのじや。ほんによう戻つてくれたの」

家賢は田に涙をためて静山の手を取つた。

「上様、月島さまは生きておられます  
その言葉に周りの者は動搖した。

月島の死を信じることが出来ない静山は未だ錯乱している、のだと。

「あなたの気持ちは分かる。余も未だに月島が死んだなど信じられぬのじや」

「そうです、生きておられます。上様、わたくしを本丸大奥に行かせてくださいませ」

家賢は田を白黒させた。

焼け跡に行きたい、と言つのか

静山は床から、がばりと身を起した。

「お願いいたします。どうか……お願いいたします」  
頭を床につけ懇願した。あまりに必死さに誰も口を開くことが出来なかつた。

家賢はしばらく考えた後、口を開いた。

「分かつた。そなたが思う通りにすればよい。……余も、一緒に参らる」

「上様！」

万里小路が顔色を変えた。

「火事跡は危のうござります」

「この城の主として焼け跡を確認するのは当然の義務だ。まだ出火の原因もはつきりしておらんのである」

「いいえ、上様に何かあつたらどうされます」

「その時は阿部らが何とかしてくれよう」

阿部とは老中首座・阿部正宏のことである。二十五歳で老中についたやり手であり、万里小路とも懇意である。

しかし今、家賢の身に何かあれば次期將軍は家倅に決定してしまう。それは避けたかった。

「いけません上様。まだ火いが完全に鎮火しておらんかもしだせませ

ん

「なら火消しを待機させておけばよい。静山、体がよくなつたら言

「せじやう」

「もう大丈夫でござります。今から行けまする」

静山、何を血迷つてあるか  
万里小路は叫び出したかつた。

静山に急かされて、家賢もすっかりその気になつていた。もともと月島の死を信じたくないのは家賢も同様である。  
ふたりの素早い行動に万里小路は止める術もなく見送るしかなかつた。

静山の執念の行動に家賢は茫然と付き従うしかなかつた。

一の長つぼねの検分は言つに及ばず、中奥、遺体の状態までも念入りに行つたのである。

目を留めたのは遺体であつた。

十七体の遺体は炭のようく黒くなつたもの、半分焼けたもの、外傷が少しだけのもの、など色々な状態であつたが、その大きさはまちまちだった。

普通の女なら田をそらすだらうゾッとする遺体も、静山にとつては何でもなかつた。とにかく必死だつたのである。

身元不明の遺体は八体。衣服の一部が分かるものが三体。全部、月島に該当しない。

残る五体は真っ黒の炭状で、月島と体格がよく似ているものが一  
体だけとなつた。この一体は一の長つぼねから発見されていたので  
月島のものとも思える。

「こちらの御遺骸のそばに何か落ちてませんでしたか」

「さあ……柱か何かの下敷きになつておりましたので落し物とい  
ましても」

屍回収係は首を振つた。

「この御遺骸は一体だけあつたのですか？ 近くに他の遺体があつ  
たりは？」

「いいえ、この一体だけです」

この遺骸が月島さまだとしたら一緒にいた墨越どの遺骸がな  
いのはおかしい……それに山吹はどこへ逃げた

火事だと駆けてきた山吹が、生きているのは確実である。よしん  
ば月島を助けにいって死んだとしても、大柄の山吹に該当する遺体  
もなかつた。

大体、身軽で聰い山吹が、あれくらいの火事で死ぬなど考えられ  
なかつた。

月島さまは山吹といふ。そして、どこかへ逃げた

これが、静山の出した希望的答へだつた。

「どうだ、静山？」

家賢は不安気に静山の顔をのぞきこんだ。

「……分かりません。しかし、一の張りぼねで見つかった御遺骸は大切な方の者と思われます」

墨越か円島。

どちらかの遺体である可能性は大きかった。遺体が墨越あつても静山にとつては衝撃的な事実である。墨越とも、昨日まで話したり笑つたりしていたのだから。近しい人が、こんな姿になってしまつなど、到底信じられない。

「どうこいつことだ？」

「一の御遺骸は、円島さま、あるいはその御つきの墨越さまのどちらかである可能性が高いござります」

それを聞いて家賢と静山は、悲痛な面持ちでじつとその遺体を見つめた。

「これがもし墨越だとしたら、円島はどうかで生きているかもしねのだな」

「はい」

静山はしつかりうなずいた。

そう信じていた。

ふたりは腰を下ろすと強く手を合わせて遺体を拝んだ。

「どうして、一なんことになつたのですか。墨越さま

胸が痛かった。これが墨越であるなど信じられなかつた。

家賢は真っ黒な物体が月島ではないと思ったかっただし、静山は墨越の躯とも信じたくなかった。が、状況から考えると、そつもいかない。月島か墨越、大切な人であることは間違いなかつた。

「」の遺骸を丁重に葬らせよ。そして四十九日間、読経をあげ続けるのだ」「

家賢は立ち上がり命令した。  
そして決意していた。

江戸城中、いや江戸中を探しても月島を見つける。

一方の静山は、山吹の行方を探ることにした。

蓑羽服津との連絡をどう取るか

山吹が窓口だつたので、蓑羽服津との糸が切れてしまつていた。

黒川藩の養父・横井、ひいては水戸の為昭から蓑羽服津に連絡を取つてもらうしかないのか……あまりに遅々とした道だ。

静山はじつと考え込んでいた。



茶店の椅子に腰を下ろして小夜はひとりの男の子を見ていた。

まだ、五、六歳であろうか。

すりきれた木綿のかすりを着て、他の子供たちが出店のおもちゃを買ってもらうのをじっと見つめていた。

今日は縁日である。小春日和に、楽しげな音曲の音色と、物売りの声、ガラガラと天井鈴を鳴らす音……

『よののすけ陽乃輔はどうしているのだろう』

小夜は弟のことを思つた。弟の陽乃輔は氣も弱く、頭も少し弱かつたので、いつもぼうつとしていた。そんな弟に父はいつも辛くあたつた。父の期待にこたえられない陽乃輔は、どんどんと自信をなくしていった。

小夜は弟にこれ以上プレッシャーを与えないため、自分がしつかりして家を盛りたてようと考えていた。それは自然にそうなつていた。だから大奥に入つたのだ。それと、もうひとつ理由があつたのだが。

火事の後、実家には小夜は焼け死んだ、と知らされていた。小夜からの仕送りもなくなつた今、頼りない母と弟はどうなつたのか。

だが、今の小夜は、実家の生活にまで考えが回らなかつた。ただ、記憶の奥にある陽乃輔が、目の前の男の子と重なつただけである。

「あ、泥棒！」

その声に我にかえつた。

おもむちやをじりと見ていた男の子はおもむちや屋から品物を奪うと走つて逃げだした。すぐに大人に追いつかれるべ、万引きした商品を取り上げられた。失敗である。

「なんてことしやがんだ、このガキ！」

店主は子供の頭をゲンコツで叩いた。

「うわーん」

大声で子供は泣き出した。

「泣いたつて許されやしねえ。やー、てめえの親はどうこころひ」

「うわーん」

「言わねえんなら、お奉行所につきだすぞーー。泥棒は打ち首だからなー！」

真つ青になつた子供は、しゃくりあげながら答えた。

「お、おいら親はいねえ……あ、あんじゅさましかいねえ

「あんじゅさま？」

「みょ、妙安寺の庵主さま……」

やう言つと庵主さまが恋しくなつたのか、余計に泣きだした。どうやら親無し子のようである。

妙安寺は、孤児院のよひなことをしてゐる尼寺だった。

「仕方ねえなあ……妙安寺のガキかい」

親のいない不憫さ、泥棒はいけないことだとこわしつか、びつちを優先せらるか店主はとまどつてこむよつだつた。

「この子のことは、お任せくださいませんか」

小夜は思わず立ちあがつていた。

「わたくしが、その妙安寺まで連れて行きます。もちろん、泥棒したことも庵主さまにお伝えしてしかつてもらいますわ」

「あ、あなたは……」

引き込まれるような雰囲気に店主はほほつとなつた。あまりに場違いな美女である。本当はひとりで出歩くと山吹にしかられるのだが、今日は雲庵が忙しかつたので、近所を歩くことだけは許してもらえたのである。

「通りすがりの者です。まづせ、ちょっとしててらっしゃい」  
小夜の優しそうな声と綺麗な顔に安心して、男の子は言われたとおりの場所に行き立ち止まつた。

「ひつそり男の子の欲しがつていた商品を店主から購入すると小夜は、男の子の手をとり、わらべ歌を歌いながら歩きだした。

「ぶらぶら、ぶらぶら……」

リズムよく振られる手の感覚は楽しく、時折、小さな手できゅつと握られる感覚に胸が熱くなつた。

妙安寺は、神社からすぐによつた。子どもの足でも十分歩ける距離

中から出でたのは、初老の尼僧と、小夜と同じくらい年の尼僧のふたりだった。

「本当に申し訳ありません。三太は普段とてもいい子なのですが……」のよつな事のなこよつ、よく言つてきかせます」

初老の尼僧は妙安みよあん、若いほつての尼僧みよあんは眷心けんじんといつた。

奥では十一、三人ほどの孤児こじたちが手習いをしていた。

「いちらは三太が欲しがつていたコマですが……ひとりだけに渡さないほうがいいでしょうか」

小夜は遠慮がちに尋ねた。

「まあ、買つていただいたのですか」

「あまりにもじつと見ていたので不憫で。最初は、もつ泥棒なづなをしない、と言えば、これをあげつもらつたのですけど。他の子たちのぶんが……」

「あつがとつぱります。もし、いただけるのならコマは畳で使ひことにします」

妙安はこつと笑つて、コマを小夜から受け取つた。

妙安は子供たちに小夜からコマをもらつたのでお礼を言つよう促した。小さな子供たちは歓声をあげて小夜の周りに近づいてきた。三太は小夜の脣部にまとわつつく。

「あのね、おばちゃん、おいら字書かるよ

「ほんと?」

「うん。あのね、見て見て」

三太は手習いをしてくる年長の子供たちの部屋へ行くと、墨をとつて字を書き出した。

「あたしのも見て！」

「あたしのも」

そう言われた小夜は、すっかり妙安寺で時間を過ぎこしてしまった。

## 失火の犯人

江戸城では、月島と山吹の人相書きが手配されることになった。

これを町奉行所に配りこつそりと探索してもらうのである。大奥女中の失踪事件なので、あくまで内密に、との指令であった。

心もとない方法に静山は、ぎりぎりとするしかなかつた。そんな中、待ち望んでいた裳羽服津衆からやつと手紙が届いた。

要約すると以下である。

- 一、裳羽服津は山吹の消息を知らない。火事で焼け死んだ訳ではないのか。
- 二、山吹の拠点は江戸神田の雲才の屋敷、診療所・雲庵であった。
- 三、雲才へ山吹および月島といつ年寄りの消息を尋ねてみる。
- 四、上様の更なる寵愛を受けよ。多少強引な手を使つても可。

以上、四点であった。

山吹の行方は裳羽服津でも知らないようである。それよりも山吹が死んだと思っていたなどおかしな内容である。山吹自身が裳羽服津との接触を断つているのか、はたまた連絡できない状態にあるのか。

だいたい龍才が報告していないのが変である。なぜ火事に關して詳しい報告をしていないのだろう。

『まさか、あのまま、抜け忍になついたら……』

静山は首を振つた。龍才のことまで考えるのは止めた。

とにかく、神田に雲才の診療所があることが分かったのは収穫であった。

『そこから情報を得てみよう。それにそこから薬も手に入る』火事で焼けてしまつた為、薬の調達に困つていたのだ。

「静山さま、大変にござります」

おまつが血相を変えて、部屋に入ってきた。急いで手紙を袂たもとに隠した。

「なんじゃ」

「火事の火元が月島さまのお部屋だと言われております」

「なんだと」

静山は顔色を変えた。

「火が一の長つぼねから出たのは間違いない。その出火部屋は月島部屋だともっぱらの噂で……」

「誰がそのような事を」

「どうやら村岡さまの部屋子たちが言つてゐるようです。けど、夏川さまも絶対に関係しております。火元に近かつた東側の部屋の方々は自分たちに責任が及ぶのを恐れて、月島さまに責任をなすりつけたのです」

死人に口なし。よしんば月島が死んでいないとしても現在大奥にいなければ反論も出来ない。

「卑怯な……」

静山はこぶしを握つてぶるぶると震えた。

「表のほうもその噂を聞いて、近々我々にお取り調べをすむとの」と  
「取り調べ?」

「円島さまの部屋子は全員、老中指示のお取り調べを受けるところです! なんといつ屈辱」  
おまつは顔を被つて泣き出した。

静山は黙りこんで考えをめぐらせた。

「村岡さまの後ろには水野さまがおられる。その取調べをされるのは水野さま配下か?」

その言葉におまつはハッと顔をあげた。

「はい……確かに水野さまから出た話のようですね

「水野さまは敵対している阿部さまが円島さまと入魂にしておられたゆえ、その阿部さまを陥れるのに月島さまを火元とするのが得策とみたのであります」

「そんな……不道理な。実際は村岡さまが、夏川さまのお部屋から出火したのではありますか」

「事実など意味はないのだ。何事も政り」とが関わつてゐる

おまつには静山に既視感を感じた。

「の感じ……

やうだ、円島に似ているのだ。

「ひなつたら戦つしかあるまい」

静山の田はまつすぐ前を向いていた。

「円島さまの名譽と、我々の潔白を守るために  
「どうするのですか」

「まずは上様に潔白書けっぽくしょをお出しする。我々が潔白だとこう内容を書くのだ。そのうえで、もし取り調べを行うなら公正におこなうよう水野さまだけでなく他の方々にも参加いただぐ頃頃もお願ねがいしよう。阿部さまにも会わねばな」

「や、やつでござりますね」

「それで終わりではない。ビルとかして早急に金子きんすを作らねば……それも大きな金額だ。

実家に言つて送つてもらつが……時間がかかる。わたくしはいま大きな金子を持つておらぬのだ」

静山は頬をつぶつぶじつと考へた。

「あの……円島さまの金子を少し使つてはいけませんでしょうか」「どうこう事じや」

「わたしは、時折円島さまから大きな金子を入れたり出したりするよう仰せつかつたことがあります。そういう時は、いつも駿河町の両替店で金子きんすを出し入れしておりました」

「越後屋か。しかし出すには円島さまの手形がいるであらへ。ビルすむ」

「円島さまは預かり手形を分散させてお持ちになつてました。一番出し易いのは……寛永寺です」

「静山とおまつは田を合わせて大きくなづいた。」

「本当は、円島さまのお金は使いつないが……」

静山は少し浮かぬ顔をした。勝手に円島のものを使つのは気が進まなかつた。

「あいつと円島さまはお許しくださります。いいえ、あいつと静山さまと回じみつけられたと思ひます」

おまつは熱情を込めて言つた。

「……そうじゃな。それに、実家から金子がきたらすぐ円島さまからお借りしたぶんはお返しじよつ」

おまつは深く肯つた。

円島さまは静山さまを疑つておられたが、わたしは、この方を信じる。じとんに円島さまの事を真剣に慕つておられるのだから

山吹が円島に傾倒するよつて、元も静山を深く信頼した。入れ替わつた二組が、それぞれの試練に向かおうとしていた、

## 砲術師範の男

年も押し迫つたある日のこと。

妙安寺の子供たちに剣術を教えていた中年の男に小夜は口をやつた。

「の方は？」

高位の武士だが、目が大きく知性的でそれでいて人なつこい雰囲気があつた。

「ばくふぽうじゅつじはん 幕府砲術師範の江川太郎左衛門さまです」

春心が穏やかに答えた。

「あんじゅ 庵主さまの」親戚なので時折、ああやつて男の子たちに剣術を教えに来てくださるのです。お忙しい身の上なのに、気晴らしだ、とおつしゃつてくださつて」

「幕府の砲術師範……」

小夜は西洋流の大筒の話を思い出した。

老中の阿部や鍋島藩の斎正が言つていた異国船対策のことだらうか。

春心には砲術が何か分かっていないらしかつた。

「江川さまは緒方洪庵先生の門下生でもあられるので、医術の心得えもあり、わたくしどもよく助けていただいております」

剣術の練習が終わると江川は春心の出すお茶を飲むため部屋に入

つてきた。

「小夜さんには子供たちに学問を教えてもらっています」  
小夜は近所に住む出戻り女であるという設定になつていて、そのまま江川に紹介された。

「子供たちに学術を教えるのはとても大切な事です。失礼ですが、あなたはどこで学術を?」

单刀直入に聞く江川に小夜は少し面食らつた。

「わたくしは一通りの読み書きは習いましたが、女ですから特定の師について習つたことはございません」

「小夜さんは手習いの本をちょっとお読みになつただけで、すっかり理解されるのです。それを子供たちには上手に教えてくださるのでは大変助かっております」

春心があわててフオローレーした。

「それはすごいですね」

「ええ、本当に。漢語もすらすらとお読みになるし、算術もお得意なのですよ」

「江川さまは緒方洪庵先生に西洋医術をお習いになつたとか」

「春心さまはどこまでわたしの事をお話しになつたのやら」  
江川は苦笑しながらお茶をすすつた。

「緒方先生は信念を持つた方でしてね、全国から新しい学問を修めたい熱い若者が沢山集まつてまいりました。そこでは毎月試験がつて、それに三ヶ月連続で主席を取らないと上級に上がれないのでも

す。

しかし肝心の蘭和辞典は一冊しかない。新参者は先輩が使い終わる夜半にならないと貸してもらえたかったので大変でした「

「ハルマなら、長崎から取り寄せられなかつたのですか?」  
思わず小夜は口を滑らせた。

その頃、蘭和辞典はハルマと呼ばれていた。江川は一瞬驚いた顔をした。

「ハルマとは、よくご存知ですね。しかしハルマは入手するのが非常に困難なのです。高価ですし。ハルマをご存知なら、よくお分かりだと思いますが」

江川ははこつこつと笑つた。今まで安易に手に入れていた辞書のことを考へると、小夜は少し後ろめたい気持ちになつた。その貴重な辞書を火事で焼いてしまつたことも。

「しかし、これからはエゲレス語です」  
江川の声に力がこもつた。

「エゲレス語?」

「ええ。砲術や海術にはエゲレス語が多く使われています。きっとエゲレスが技術の先端を走つてあるからでしょうな。日本もいざれは追い越すため、もつと研究せねばなりません

「江川さまは、エゲレス語と和語の辞典をお持ちのですか?」

まだ直接和訳した辞書を見たことがなかつた小夜はたずねた。

「いいえ。英蘭・蘭英辞書が洋学所に一冊あるだけです。いちいちエゲレス語から蘭語に、それをまた和語になおすのは大変なので、自分なりにエゲレス語からの和訳を作つてみたりしておりますが……しかし、時間がかかります」

その言葉を聞いて小夜は小さくため息をついた。  
自分も読む本の範囲であつたが英和帖を作つていたからである。  
それもすっかり焼けてしまつた。

「小夜どのは語学に興味があるのですかな」

「いいえ。ただ、少しエゲレス語の本を読んだことがあるだけです。その資料をすっかり無くしてしまつたのが惜しくて……」

「なんですか？」

今度は本心から江川は驚いた声を上げた。

あわてて湯のみを茶托に返すと、小夜に向き直つた。

「ど、どちらでエゲレス語を勉強されたのです？」

「え？」

「どんな本を読んだのですか」

矢継ぎ早に江川が小夜に質問した。

「わ、わたくしが読んだのは、エゲレス語の詩や心学のよつた本です」

「それはどういった内容ですか？　蘭語から訳されたのですか？」

「はい。内容は……色々です。詩は心を打つ叙情的なものや風刺もありましたし、心学は小難しく人間のあり方について書いてありました。

心学は単語が難解で訳がなかなか進みませんでしたけど、詩のほうは同じ単語が繰り返して出てきますので理解しやすかったです。

分かった単語は江川さまのようにに自分のなりに和訳をして帳面に書き記しておきましたが……もう、手元にはありません

「なんと……」

江川はあっけに取られながら内容に興奮したようであつた。

「あなたは……何者ですか、ビリでエゲレス語を習つたのですか」「あ……」

通常の意識状態でない小夜は、口にしてはましい事がこの時は口ントロールできなかつた。何も言えず気まずそうに下を向いた。

「え、江川さま、小夜さんは雲庵といつお医者さまに縁ある御婦人です。多少、異国の知識があつたとて不思議ではございません」

春心が小夜に助け舟を出した。

「いいえ、町医者の範囲を超えておられますよ。小夜どのは」

江川はじつと小夜を見つめた。

「わたくしは……詳しく述べませんが、お金に困らない生活をしておりました。そこで、ちょっとした手習いとして外国の知識を仕

入れただけです。おなごのわたくしに学問を修める術はありません

そう言われると、実際にその通りなのでそれ以上は追求できなかつた。当時の女性が一流の学問を身につける術は無いに等しかつたのである。

「あまり追求すると、もう妙安寺に来ていただけなくなりますな。いや失礼。……実際エゲレス語には相当困つてあるもんで、思わず力が入り申した」

頭を搔きながら少し恐縮した様子に江川の人の良さがにじみ出た。幕府、高位の役人にはあらざる態度である。

けれども江川は感じていた。

小夜の非凡な才能と、利用価値と危うさを。

まだ誰も習熟した者はいないエゲレス語を多少なりとも知っているこの女人、何者であるか、果たして使えるのか

それが一番知りたいことであった。

同じ頃、雲庵では雲才と山吹が深刻な顔をして一通の手紙を前に黙り込んでいた。

一通は裳羽服津の炎才から、一通は静山ことあかりからの文である。

どちらも山吹と月島の居場所を尋ねてきている。山吹にとつては、月島である小夜の容態が落ち着くまで大奥に知らせたくなかつた。大奥に知らせると、必ず月島は連れ戻されてしまう。それは自由になれるかもしぬない機会を逃すことだ。

また、あかりだけに知らせる、といつ手も考えたが、それも悩むところであった。あかりはきっと必死で月島を探しているだろう。あかりの心情を考えると山吹の心は痛んだ。

だが、記憶の混濁した小夜となつた月島が、あかりを認識できるかどうか、も分からなかつた。墨越につながる記憶を呼び覚ましパニックになる可能性もあつた。

最近はやつと外に出かけていつて明るい表情も見られるようになつていたのである。

大きな刺激を与えたくなかった。

「とりあえず、あかりに小夜どのの無事だけでも知らせてはどうじやろ。あやつも心配しとる」  
雲才が山吹に提案した。

「……もし、お知らせしたら、きっとあかりさまは大奥を抜けてでも、月島さまに会いに来られます。そうなつては、あかりさまのお役目は破綻、そして月島さまの病状もどうなるか分かりませぬ」

「だから、じゃ。あかりには小夜どのは無事であるので安心しお役目を果たすよう、知らせるのじゃ。決してこちらへ来てはならぬ、と」

山吹は大きなため息をついた。

「それで納得されましょうか」

「納得するもせぬも、あかりはきつちりと忍びである」とを認識せねばならん」

雲才はこいつになくきつこ声で言つた。

「あかりは、一旦お役目を引き受けたのだ。途中で放棄することは許されん。だから、大奥を抜けて出るなどあつてはならぬのだ。わしがきつちりと話をつけてやる」

雲才はすくと立ち上がつた。

「年が明けたらつぐば屋として大奥へ参内する。そこであかりに会おう。山吹、そなたはあかりの元に帰らず、このまま小夜どのも一緒に居るとあかりに伝えてよいな?」

山吹は大きくうなずいた。

正月があけて江戸城では新年の行事が続いていた。

年末に火事があつたため華やかさは押さえられていたが、各藩からは『火事見舞い』と称される献上品も加わった為、貢物の係りは多忙を極めていた。

大奥もまた正月は忙しい。

特に御年寄りは出番が多いので月島の不在は大きく目立つた。必死で村岡たちが盛り上げようとしていたが、家賢をはじめ、御台所代わりのお美津の方たちの違和感は無くなることがなかつた。

改めて月島の存在感の大きさを皆が感じていた。静山は咄嗟に笛の演奏を願い出た。月島のいない寂寥感に耐えられなかつたのだ。

家賢は許可した。

笛の音は明るく澄み渡り多くの者に感動を与えた。それは家賢に静山の更なる寵愛に拍車をかけた。

ぎりぎりと見ていたのは、村岡と村岡の姪、笛野だった。近頃の閨ねやへの指名に笛野の名が増えてきていたからだ。

「今度、あんたさんにお部屋を与えるよつ、上さんに言われました」  
万里小路が静山を呼びつけたのは二十日正月が終わつてからすぐの事だつた。

「……部屋を? しかし……」

「分かつてます。あんたさんは、お子も産んでませんし、お部屋の条件にはかなつております。けど、上さんにとつてあんたさんは特別な存在です。ただの御中臆にしどくには不本意や、と申されました。これは大変なことですえ」

「…………」

「なんや？ あんまり嬉しそうやないな」

「お部屋をもらつたら、表の方たちと話すのて有利になりましょううか？」

「せりや、むちりんや。けど……なんぞしたい」とでもあるんかええ？」

静山は答こたえずじっと黙り込んだ。

「……大奥総取締りのほうが有利ではないですか？」

万里小路はぎょつと田をむいた。

「……お部屋をもらつより、大奥総取締りになるほうが有利ではありますか？」

「何を考えとるんや、あんたは。お子も生んでないのに部屋をまと同等の扱いを受ける、こうの大奥総取締りになつて何をしたいんや」

「わたくしは、円島さまの汚名を注そそぎたいのです。それには表の方の協力が必要なんです。老中の水野さまは村岡さまと結託して、火事の責任を円島さまに押し付けよつとなさつてます。そんなの……許せません」

静山は激しく首を横に振つた。

「あんたは、どこまで円島のこと慕まつつるんか……」

万里小路は大きくため息をついた。

「よつ聞きかや。あんたさんがお部屋をもらひ、こつのは、村岡側へ

の大きな牽制なんや。上さんもそれを承知でそう言いなさったんや。上さんも丹島のことをかばいたい思つてはる。けど奥のことを表まで巻き込んで、どういつの言つても避けたいんや」

「けども「実際は、水野さまが安部さまを落とすために大奥の事を利用しているではありませんか」

「だからこそ、や。もと丹島部屋やつたあんたがお方さまになれば、失礼な聞き込みはなかなかできん。あんたさんにとつたら、丹島の潔白が晴れな、納得できへんかもしれんけどな、にこには大奥や。

長くしづとく生き残つたほうが勝ちなんやで。結局それが丹島の潔白を後々証明することになるんや」

さすがは万里小路。現大奥総取締りは大層しづとかつた。

「分かつたな。あんたさんが部屋殿になるのは丹島にとつてもええ話なんや。村岡側はきっと邪魔してくる。条件にかなわん、言つてな。けど、そこで負けたらあかん」

静山は肯いた。

「あんたのお役目を忘れたらあかんえ。水戸、黒川藩が何て言つてあんたを送り込んだか……忘れたらあかん」

万里小路の重々と言い渡す言葉は、ずつしりと静山の肩にのしかかつた。

上様の更なる寵愛を受け、幕府改革を進めるよつ進言すること

水戸藩は、水戸学という独特な思想があった。

天皇の伝統的権威を背景にしながら、幕府を中心とする国家体制の強化によって、日本の独立と安全を確保しようとした考え方である。

しかし、幕府の力は弱体化し、それに幻滅していた水戸の藩士たちは過激な主張をするようになっていた。そのため昭は幕府に疎まれて隠居させられたのだ。

静山にとつて、水戸藩の思想を具現化するなど考えもしなかつたが、権謀術中の大奥で忍びの任務を遂行するなど、もはや幻のように思えた。

状況は悪くなかった。しかし静山は孤独だった。

山吹もいなくなつた今、自分と忍びを結びつけているものは何もない。たつた一人で、何をしろ、というのか。

月島の名誉を守る、という生きていく目的がなくなると緊張の糸がぶつりと切れそつた。

その夜。

冷たい月を見上げながら静山は泣いた。

『生きていると信じたいが、本当に月島をまは、この世にいらっしゃるのか。もし、もうおられないとしたら……わたしは、もう生きていけないかもしれない』

お部屋殿など何の意味もなかつた。大奥中から羨まれる身分が手

に入ったといふのに、愛する人を失った悲しみの前には、すべてが  
幻だつた。

つらかつた。胸が締め付けられる。  
死ぬほど月島に会いたかつた

## 呼応

小夜は田を覚ました。

誰かが激しく自分を呼んだ気がして。

『…………そつ…………』

覚えのある感覚。

先ほどの感覚を反芻する。

「ああ、 静山だ」

小夜は田を見開いた。

その瞬間すべてが戻ってきたように感じ、同時に胸が締め付けられて肩で深呼吸をした。

「小夜さま？」

隣に寝ていた山吹が異常に氣づいて体を起こした。

「どうしました？」

「静山が呼んでおるのだ」

その言葉に山吹は固まつた。

「なにか……泣いておる」

そう言つと、再度大きく息を吐いた。

「あか、 静山さまに、何があつたのです？」

「わからぬ。だが、胸が締め付けられるのだ。わたくしに会つたが

つておる

小夜は自分の胸に手をあてた。  
苦しかつた。

山吹が冷えないように小夜の肩に上着をかけた。

「……帰らねばならぬ」

小夜はつぶやいた。

「まだ、ダメです」

山吹はさきっぱりと言つた。

「あんなに静山が呼んでおるの」、か

「静山さまには月島さまがいらっしゃる事をお知らせします。  
今度、雲才さまが大奥へ行つて直接、静山さまにお田にかかつてくれると言わっていました」

「まだ知らせていなかつたのか？」

驚きとも怒りとも思える瞳で小夜は山吹を見た。同時に自分がすつかりと静山のことを忘れていた事も思い出した。

「わたくしは……今まで何をしておつたのだ」

「ご病気だったのです。いえ、まだ治つておりません。だから、あかりさまの事は言わないようにしておりました」

「あかり？ それが静山の名か？」

ふたりはじつと田を見合せた。じょろくして山吹は観念したよ  
うに田を伏せた。

「はい。静山さまはあかり、と申されます。育つたのは筑波山のある村で……わたしとは同じ村の出身です」

「密命を帯びておるのであります。そなたたちも因果な宿命よの

すいぶんと前から見破っていたであろう小夜の言葉に山吹は何も答えなかつた。

「だから、静山はあんなに苦しんでおるのでないのか？ そなたもいなくなつて、たつた一人……つらくないハズがなからう」

山吹は息を飲むと唇をかんだ。

「墨越の墓前にも行つてやらねばならん……」

あれ程恐れていた墨越のことも小夜はただぼそつと呟つた。山吹は表情が凍るのを感じたが小夜が淡々としているので、どう対応していいのか判断しかねた。

「この先どうしたらよいか

それは誰にも分からなかつた。ふたりしてじつと黙っていたが、どうやつてもいい考えが浮かばなかつた。

「冷えまする、お布団にお戻りください。じついた事は夜考えるといけません。明日になつたら、じつへうと考えましょう」

「けど、夜に泣いている静山が哀れだ」

「だったら、わたくしどもで静山さまに念を送りましょう。お布団に入つて『わたくしどもはあかりさまをいつも見ております』と愛

しご気持ちを畳えるのです

「そんな事が出来るのか？」

意外そうな顔をして小夜は山吹を見た。

「円島さまが静山さまが泣いている、とお感じになつたのに、反対が出来ないはずありません」

山吹は笑つて小夜を布団に戻すと夜具を整えた。

それからふたりは目を閉じると、じつと静山に念を送つた。

少しだけ胸が温かかった。

夢だつたのか。

円島がじつと包みでくれていたよつな気がする。そばに山吹もいた。

朝、静山が起きるとおまつが真つ赤な目をして泣いていた。

「夢に円島さまが出てきたださつたんです……内容はよく覚えていませんけど、夢の中でわたしはとても嬉しかつたんです、ああ、月島さま、生きておられたんですね、ずっと待つておつまました……でも田を覚ますと……お姿はなく……」

おまつは襦袢の袖口を田に当たると田泣した。

「何を泣く。円島さまは生きておられる、だから夢で何かを伝えようとなさつたんじや」

胸元から懐紙を出すと、おまつに手渡した。あわてて、その懐紙

で涙と鼻水を拭くおまつ。

「わたくしの夢にも、昨夜はちゃんと山吹へだつた」

「静山さまの夢にもー、して、どうなお姿で」

「……姿は……ない」

「はあ？」

おまつは田を丸くした。

「姿はなにか感じるのじや。田舎さまの空氣とこゝか氣の個性があるであつた。山吹もおつたぞ」

「山吹……もですか？して、ふたりは何と？」

「だから……勇氣を持て、そなたたちは一人ではない、とこゝにとじや」

「はあ」

理解出来ないおまつであったが、なんとなく静山の肯定感には元氣をもらえるところがあった。このところふざきがちだつた静山が久しぶりに明るこ。それだけで、おまつは嬉しくなつた。

部屋殿としてあがるのだ。お方さま、静の方となるのだ。

元氣、元氣、上様の寵愛が潤おしこものであつまつよつて

おまつは祈つた。

円島の叶えられなかつた威光を、静山にまことに受けでもらいたかった。

## 将軍といえど

午後から静山は、家賢の散歩に随伴することになつていた。

「そなたにあやまらねばならん事がある」

冷たさに映える椿を背に、綿入れを着た家賢は振り向いた。

「月島の探索を中止にすることになつた」

「そんなん……」

静山は真つ青になつた。

「火事で死んだ者の四十九日も過ぎ、不明者の探索も区切りをつけるよう嘆願が出てある」

「それは水野さまや村岡さまからですか？」

「町奉行所、ふじん普請奉行所からだ。町方は日々の業務が多大だと言わ  
れての。大体、江戸城でいなくなつた不明者を町方で探すのはおか  
しい、と。言われてみればもつともじや」

「しかし、わたくし自身、火事のおり小者に背負われて城下にまで  
逃げましてござります」

「……それを言つとやぶ蛇だ。本来、奥の女人は焼け死んでも門外  
に出ではならぬ、と言われているくらいなのだ。したが、それはあ  
まりに非情ということで、そなたの場合も大目にみられておるのだ」

静山は唇を噛んで下を向いた。

「普請方からは、本丸奥の再建が遅れると言われておる。不明者が

見つからないからといつて長つぽねの再建がいつまでも出来ぬとあつては困るのだ」「

はあ、と家賢は大きなため息をついた。将軍といえど自由に出来ることは何もない、その無力さについたため息だった。

「せめて円島の名譽だけは守つてやらねばならぬ。余は寛永寺より最高の戒名を円島に授けることにした。ゆえ、誰も火事の責任を負わすことはできぬ」

「上様……」

静山は田に涙を浮かべた。

「すまぬ……それで許せ」

家賢は静山の肩を抱き寄せた。それが家賢に出来る精一杯の愛情なのだと……静山はよく分かった。

月島さまは死人になってしまった……大奥での居場所が無くなつてしまつた

榮譽に満ちた大奥御年寄りの座を、静山は守ることが出来なかつた。

「本当は余も信じておらんのだ。円島が死んだ、など」  
「そう思わないと家賢も正氣を保てなかつた。

「あつと円島はどうかで生きておる。そして、いつか我々に会いに来る。……余は、そう信じておる。それまで、そなたと一緒にいたいのだ。せめて……本当の側室としてそばにいてくれ」

家賢は抱いている手に力を込めた。

静山は嬉しかった。

使命としてではなく、ただの女として本当に必要とされたことは無かつた気がする。また一步、家賢との距離が近づいた気がした。

しかし、静山は知らなかつた。

一步抜き出た龍愛は、嫉妬と羨望のただ中だと。そんな己が身を守らなければ、あつという間に底に沈んでしまうのだと。大奥が將軍と特定の女人の気持ちだけでやつていける場所でないことを。

粉雪がちらほらと降りだしてきていた。

「よし」

大奥へ持つていいく小間物を点検しあえた雲才は、大きくうなづいた。

明日あかりに会つて、用島と山吹の無事を伝えしつかりお役目を励むよう、諭すつもりだった。

どん、どん、どん、どん！

玄関戸を叩く音がした。日も暮れてだいぶたつのに急患であろうか。

「誰じやな」

「雲才さま……龍才です」

消え入りそうな声だった。

「なに?」

急いで戸を開けると、雪崩れるように龍才が倒れてきた。肩や腕  
が切られている。出血が多い。

「山吹! 来てくれ」

玄関戸を急いで閉めると雲才は叫んだ。

山吹と小夜があわてて顔を出した。

「奥の処置台に運ぶのを手伝ってくれ  
「分かりました」



雲才と山吹が処置台に龍才を運ぶ間に、小夜はありつたけの行灯あんどんや火鉢に火をつけ診察室に持ってきた。棚を開けて布を探す。

「肩から背中の傷が深い。」  
「うちから手当てしょつ」  
「けど右腕も肉が口をあけています」  
「山吹が叫んだ。

「切られた両側の皮膚をきつちつと合わせて……何か貼りつけておくものがあればよいのだが……」

「小夜が周りを見渡した。

「卵の薄皮がある。あれを全部使いなさい。右から三番目一番下の引き出しじや」

言われたまま乾燥した皮膜を取り出す。水に浸し、次々に雲才に手渡す。

「ううう」

出血と痛みのため龍才は意識が半分無くなりかけていた。

「次は肩だ」

背中の右上から左下に向かつて三寸半（10㌢）ほど切られていた。肩甲骨があるためそこで刀が止まつたのか、一部白いものも見えていた。

「うう……」

山吹がうめいた。今まで氣にならなかつた血の匂いに酔つ。

「出血がひどい。血が止まらねば死ぬぞ」  
「小夜さま、縫えませんか」

山吹がとっさに尋ねた。

雲才は驚いた顔で山吹を見た。

「縫う？」

「はい。糸と針で傷口を縫うのです」

「いや、その前にこの中からの出血を止めねば傷口を縫つてもだめだ」

小夜は何かを思い出すかのように真剣な眼差しで傷口を見ていた。

「中からの出血……」

骨膜や血管が切れている為、下からじわじわと溢れてくる血を見て山吹も押し黙つた。

「山吹、線香を用意して火をつけてくれ

山吹は合点がいかない顔をした。

「そうか、焼くのじやな」

雲才が叫んだ。

小夜はうなずいた。

静山が刺された後、読んだ外科の本に、焼いて止血する方法がのつていたのを思い出したのだ。雲才はしのびの術として、もともと焼き止めという止血方法を知っていた、が、それはあくまで皮膚の外傷用としてだった。現在ではレーザーがそれにとつて代わっている。

山吹は急いで奥へ走つていった。

山吹が返ってきてからの小夜の行動は素早かつた。

焼酎で消毒をすると、出血している部位を確かめて線香の火で焼いていった。

龍才はとっくに意識がなくなっていた。

「雲才先生、カイロを沢山作ってこの方に当ててください。出血のため体温がどんどん下がっております」

「お、おお」

小夜の補助をしている山吹は手が離せないため、雲才が外回りを受け持つた。

「もう…これでいいか」

血が出てこない。大丈夫なのか分からなかつたが、よしとせねばならなかつた。皮膚の縫合を終えると、腕の縫合に入つた。

小夜の額に汗が光る。最後に膿み防止のドクダミが塗られ厚く包帯をして処置は終了した。

雲才は龍才の脈を取つた。出血したため弱々しかつたが、死に脈は出でていなかつた。呼吸もしつかりしている。カイロのおかげで全体も暖かかつた。

「ふう」

「ふう」と疲れが出て雲才は椅子に腰を落とした。

「大丈夫みたいですね」

小夜がじつと龍才の顔を見ながら言った。

「ああ、やれやれじや。一時はもうダメかと思つた。あのように深く斬られておつて助かることは、まずない」

「ここまで歩いてこられたので、背中の傷が影響して歩けぬようになるとは思いませんが……右腕は使えぬようになるやもしません」

「ん……」

雲才はうなるしかなかつた。

忍びの長ともなる龍才の利き手が使えなくなるかもしれない、その重き試練。

一方で小夜の今回の活躍に驚嘆していた。大奥の年寄りがなぜ、ここまでケガ人を処置する腕を持つているのか。

「小夜さまは、どこで縫合の技を修得された？」

小夜と山吹は意外そうな雲才をかえり見た。

「雲才さま、小夜さまはあかりさまを一度縫つたことがあるんです」

「なんと、それは大奥ですか？」

二人は肯いた。

山吹は、小夜があかりを縫合したことの顛末を話した。

「状況はそうじゃつたとして……素人が人間の肉を縫うなど並みの度胸ではない。いやはや……小夜どのはすごいお人じや」

「前回より腕が上がりましたね」

山吹が笑つた。

「そろそろ医者として開業できるやもしれぬ」  
小夜はくすりと笑つた。

その顔を見て山吹はハッとした。

『そついえば火事以来だ。月島さまがお笑いになつたは』

心に灯りがともつた気がした。

顔をゆるませながら山吹はその後、テキパキと後片付けをした。

## 追隨する影たち

「では行つて来る。帰りは少し遅くなると思つんで締りを忘れん  
ようにな」

次の日。

雲才はつづけば屋の商材の入つたつづらを背負つと出て行った。大奥のあかりに事の詳細を報告するために。

そんな雲才を少し離れたところで見ている男たちがいた。四人の町衆姿。まだ若い様子の彼らはうなずき合つと雲才の後をこつそりつけはじめた。

そんな事を知らない山吹と小夜は、落ち着かない様子で雲庵の玄関に入った。  
果たしてあかりはびつ反応するだらう? 考えると気が気がでなかつた。

「小夜さま今日は妙安寺の日でしたね」「本日は休みにさせてもらひ。龍才どのも氣になるゆえ」

「私が診ておりますので、どうぞお行きください。子供たちに新しい歌を教える約束だつたのでしあつ」

「しかし……」

「雲庵はお休みですし……龍才さまも私と一人きりのほうが何かと氣を使わずに済みますゆえ」

「そつまで言われては行かぬ訳にはいかぬな」

小夜は苦笑すると妙安寺に行く気持ちを固めた。

『いい気晴らしにならう。静山のことをずっとと思い煩つているより子どもたちと居るほうが気も紛れるだらう』

支度をすると小夜は雲庵を出た。真冬の寒さがきりりと身に染みたが、空は青く高くいい天氣であった。

雲才の庵と妙安寺はほんの五五〇間（一キロメートル）ほどしか離れていない。往来の人々を観察しながら歩いているとすぐに着いてしまう。大奥に入つてからは外出もままならない身分だった小夜にとつては町は何度見ても楽しめるものが溢れていた。

「小夜どのー」

ふいに野太い声で呼ばれた。往来を振り返ると砲術師範の江川太郎左衛門が駆けてきた。小夜のもとまで来るとはずむ息をしたまま矢継ぎ早に質問した。

「これから妙安寺に行かれるのですか」「はい」

「拙者も今から行くところだつたのです。」一緒によろしいかな「ええ。もちろんです」

江川は小夜の荷物を受け持つと肩を並べて歩きだした。

「あれからしばらく妙安寺に来られなかつたのですね」「あ、はい。少し忙しかつたものですから」

「そうですか」

そのまましばらく無言のまま歩く。

再び口を開いたのは江川だった。

「あの、今日は少し時間をいただけませんか。あ、いや、子どもたちに教えた後でかまわないのです」

「何か？」

江川は気まずそうに口をそらす。そして「んん……」と、うなつた。何か言いにくそうである。それを見て小夜はくすつと笑った。

「分かりました。今日は子どもたちに歌を教えた後、お話を伺います」

「いや、かたじけない」

江川は照れたように視線を下に向けたまま頭をぺこりと下げた。

高位の砲術師範が一介の女人である小夜にここまでする理由はふたつしかない。ひとつ、小夜に惚れている。ひとつ、エグレス語をはじめとする外国語関連の相談。

小夜は一番田の理由である、と推測した。

あーあ……

前回のハルマ云々の口を滑らせたのは失敗だった。小夜は少し重い気持ちで妙安寺の道を歩いた。

ひゅん！

飛んできた光りものを雲才は一瞬で避けた。間髪入れずに町衆姿

の男たちが出てきて雲才を襲つ。

「やはり、忍びか！」

雲才の身のこなしを見て男のひとりが叫んだ。

江戸城の門前。門番の取り次ぎを待つてゐる間に男たちは雲才に飛びかかつた。

## 雲才の最期

「そのつづりの中身を見せよ」

がつしりとした体格のよい男が短刀を持ったまま鋭い目で睨んだ。雲才は何も答えずじつと間合いを測る。

『四人にはどう考へても勝てぬ……』  
あかりに嫌疑がかけられる訳にはいかぬ』

「分かつた。今、つづらをはずす」

雲才は背からゆつくりとつづらを下ろす。地面に着くか着かないかの瞬間に、がつしり男に向かつてつづらを投げつけた。

「そりよつー」

その一瞬、男たちの体勢が崩れた。雲才は投げつけた男の横を突破して…… としたが、すぐ隣の男が雲才の行く手を阻んだ。

冷酷な目だつた。

雲才と一瞬田を合わせたが、そのまま喉を刃で切り裂いた。

「ぐはつー」

血煙を吐いて雲才はどつと倒れた。

「何やつてんだ隼人！  
隼人<sup>はやと</sup> 殺したら何もならんだりつ」  
がつしり男が叱責した。

『……』  
いつは吐くくらいだつたら死ぬ。それがしのびだ。……雲庵と、この男が取りつきを頼んだ者の名が分かれば問題ない』

隼人と呼ばれた若者はフイッシュとつぱを向いた。

「ふん」

リーダー格だつたがつしり男は面白くなれりに鼻を鳴らした。

「小矢太そいつの身ぐるみを確かめる。長吉と隼人は門番の口を割らせる」

リーダーは他の三人に命令した。

「つば屋が殺され、おかしな男がわたくしの名前を聞いていった」と?」

血相を変えた門番が靜山に事の真相を知らせのは、それからすぐの事だつた。男たちは口を割らせた門番をわざと生かしておいたのである。

「そ、それで、つば屋はどうなつた」

「門前に喉笛を切られて倒れておりました」

雲才さま..

あかりは目をカツと見開いたまま固まつた。隣にいたおまつは倒れないかと心配したが、あかりはそのまま息を吐いた。

「つば屋の「がらはど」にある」

「平川門の庭に運ばれたと聞いております」

じつと黙りこんだあかりは、ぐつと門番に迫つた。

「そなた、その二人の男たちを見たのであらう。どんな風貌であつた」

「わ、若い町衆姿でありますたが……しのびであつたやもしれませぬ。

相当な手だれです」

「しのび……」

あかりは何かを考えるような目をしたあと人相を尋ねた。

「ひとりは眼光暗く整つた顔だち、年は一十四、五かと。もう一人は面長でやや垂れ目がち、年はやはり同じくらいであります」

「言葉になまりなどなかつたか」

「いいえ。江戸育ちかと見まごひつ口調であります」

はあ。

これでは分からぬ。

江戸城門前で起こつた殺人事件。あかりは窮地に立たされたのだ。門番は、表の役人にも同じことを言つだらう。

いくら大奥は治外法権とはいえ、あかりにとつて不利であるのは変わりない。重い気持ちになりながら雲才の遺体の検分に向かつた。目は閉じられていたが、喉を鋭利な刃物でパクリと切られた雲才を見た瞬間、あかりは激しい慟哭を感じた。

『これは、ひどい。なぜこんなことに……』

医術の師匠でもあつた雲才。あの温和でやさしい顔は、もう一度と見られなくなってしまったのだ。涙をこらえながら手をあわせ、全身を確かめた。

『雲才さま、何か手がかりは、ありませんか？』

奥歯の奥まで確かめたが期待していたものは何も出てこなかつた。門番が言つ手荷物のつづらは持ち去られたのか無くなつていた。

あかりは、悲しみとは別の、つまり事件と関連する胸騒ぎを感じた。こんな時、誰にも相談できないのはなんと不安なものか。

そうだ！

『つづら屋の根城、雲才さまの診療所が神田にある、と手紙にあつた。そこに誰か裳羽服津の者があるやも』

あかりはつづら屋の住居記録を調べるよつ御使番に言い渡した。

よしんば記録が見つかったとしても眞実の住所を書いていとは思えなかつたが、神田と雲才と診療所という情報があれば何とかなりそうな気がした。

## 大奥にはもどらない

小夜はじつと二冊の技術書を見比べてみた。

ひとつはオランダ語で書かれた鉄の精製方法、一方はイギリスのライフル砲の取扱説明書であつた。

幕府の最重要機密である。

他言しない」と、を約束に小夜にその書類は公開された。

「どうである?」

何も発しない小夜に江川はややじれていた。

「よく分かりませぬ。ライフル砲は後ろから砲弾を入れて撃つ方法が書かれておりますが、これはあくまで撃つ方法です。この書だけでライフル砲の作り方は分かりませぬ」

「うーん、やはりな」

この時代、日本では前から砲弾を入れて打つ大砲しかなかつた。後ろから入れて使うライフル砲は、次の弾を込める時間が短縮できただのだ。

「蘭語の書は鉄の精製方法がかなり詳しく載つているようですが、こちらを参考にまず炉を作りその鉄で簡単な大筒を作つてみてはいかがでしよう」

「そちらはもうだいぶ進んでる」

小夜は驚いた。既に鉄が精製できる炉があつとは。

「自宅の庭に小型の炉を作つて鉄を熱し鋳型に流しいれるところまではしたのだが、実際に試用しておらんので耐久性はまだ不明なのだ」

「なんと既に実験段階であるとは」

鍋島藩の斎正から以前大筒の話を聞いた時はその威力に無力感を感じていたが、江川の精力的な行動を知つて少し希望が持てた気がした。

「江川さま、わたくしで出来ることがありましたら、どうぞお使いください。この国が少しでも強くなれるようお手伝いしたいのです」

江川は深くうなずいた。

「小夜どのは、ライフル砲の説明書をまず訳していただきたい。その後、構造を我々と一緒に解明してくだされ」

「分かりました。けど、辞典が今手元にないのです。見たところ専門用語がかなり入つてありますので……わたくしには分からぬ言葉が沢山あります」

申し訳なさそうに小夜は目を伏せた。それを聞いて江川もしばらく考え込んでいたが、不意に何かアテがあるかのよつた表情になつた。

「では次の機会に拙者がお持ちしよう。蘭語訳で期限つきだがよろしいかな」

「もちろんです、よろしくお願ひします」

高まる気持ちで小夜は頭を下げた。

そうだ、このままやられる日本ではない

その為に自分に出来ることがあるかもしれないなんて、わたくし  
は幸運だ。大奥にて古いしきたりに振り回されるのは今や本意で  
はない。

この時、小夜は決めたのである。  
もう、大奥へは帰らない、と。

## 冷たい土と愛しい人

思ったより遅くなってしまった。

時間はまだ宵の口であつたが冬の日の暮れは早い。寒風吹きすさぶ神田の町を小夜と江川は急ぎ足で歩いた。雲庵の門前まで来ると江川は別れを言い去つた。

「小夜です、遅くなつてすみません」

戸を何度も叩き声を張り上げてみたが、中から応答はない。

『寝ているのかしら』

開かないと思いつつ戸を引くとするつと開いた。

『? !』

小夜は違和感を感じた。

ひんやりとした室内は奥の部屋まで真っ暗である。

「山吹一帰つたぞ。どこにある?」

中に入るのがためらわれたため声を張り上げた。返事は無くしんとしたままだ。意を決した小夜は持つていた提灯をかかげ、ゆつくりと奥の部屋に進んだ。

玄関のすぐ横の部屋は患者の待合である。その奥が診察所。今は龍才が寝ているはず。だが龍才の姿はなく布団が大きく乱れたまま、部屋には多くの足跡が散乱していた。

『これは…』

小夜は真っ青になつた。

大きく開け放たれたふすま、その向こう部屋に小夜は信じられないものを見た。

「ひつ」  
それは杭で心臓をひとつ突きにされている山吹の姿であつた。

畠に達するまでつき刺された杭につながれた山吹は呪詛のオブジエのように見えた。小夜がかろうじて提灯を持つ手を保つことが出来たのは、壁に紙が貼り付けられているのを見つけたからだった。

密教の札のような文字だった。小夜には全く読めなかつたが不気味でたまらない。

恐ろしくなつて家から飛び出た。

人どおりがない冬の町を、草履も履かずに小夜は駆けた。  
後ろから呪いの黒い影が追つてくるような気がして必死に逃げた  
のである。

「あつ！」

小石に足をとられて上半身からどつと倒れた。

倒れたまま後ろを振り返ったが、何も追いかけてなどはない。ほうと息を吐くと恐ろしさと悲しさがこみあげてきた。

『 いつたい何があつたのじや、山吹』  
涙があふれて止まらなかつた。

『どうして』こんな事になる……大奥にいたら『こんな風になる』ことな

どありえなかつたものを。『うしてわたくしは出でてしまつたのか』

ボロ布のようになつて倒れている自分を顧みて後悔が全身を被つた。今や世界でたつた一人になつてしまつた。姉妹のようだつた墨越も死に、たつた一人の味方だつた山吹も無残に殺された。

『やはり、神も仏もおらぬ。もつどうしてよいが分からぬしんしんと冷える土は、小夜の体温を容赦なく奪おうとしていた。

そのまま気が遠くなりそうだった。

『このまま眠れば死んでしまつ……起きなければ』

そう思つてゐるのに精も根も死き果て急速に意識が無くなつうとしていた。夢の中に静山が出てきて、ふわふわと笑いながら暖かい葛湯を差し出してくれた。

『ああ静山……体が温まるぞよ』

豪華な部屋には火鉢が焚かれている。

静山は優しく笑つてゐる。

いい気持ちぢや

「何かおつまする」  
ひとりの女が声を上げた。

通りを曲がつたところで黒い影が倒れているのを見つけたのだ。  
「行き倒れで『死』こましょ。なるべく離れて通りましょ」

道案内をする中年男が提灯を持っている。近づくにつれ、ふたりは警戒をしながらも倒れている影をじっと見た。

「女性のようです。少し声をかけてみましょう」「女が男に提案した。

「いけません。物取りかもしれませぬ」

「ここのように寒い中、倒れているだけでも命取りです」

命をかけて物取りをするなど考えられなかつた。女の決意を知つて男はとまどいながらも倒れている影に近づいた。

「これ、もし」

男は影の肩をゆすつた。

「ん……」

何とか生きているようだ。

「ここのような所に倒れてどうなされた」「提灯の明かりをその人物に当てた。

その瞬間、女は息を呑んだ。

「ああ」

弾かれたように倒れている小夜の肩を抱き上げた。

「円島さま」

青く閉じられていた瞼がゆっくりと開いた。  
小夜は不承な顔をして女を見上げた。

「静山？」

「はい、静山です」

「これは夢か……わたくしは死んだのか？」

「いいえ、死んでなどおりませぬ」

あかりは泣きながら小夜を抱きしめた。

「やつと……やつと念えました」

あかりは小夜の体をしつかりと抱いた。

『もう離しませぬ』

強くしつく抱きしめたその体は柔らかく細く、そして冷たく悲しかった。



## 肌のぬくもり

「寒い……寒い、寒い」

小夜の唇は紫色でがちがちと歯が鳴った。  
低体温になつていた。

布団に寝かしつけたものの自力で体温を上げられないのだ。  
あかりはお種たねに頼んで火鉢を持ってきてもらつたが、小さな炭火  
ではなかなか室温を上げられない。

意を決してあかりは衣服を脱ぐと布団の隣にすべりこんだ。  
「絶対に死なせませぬ」

小夜の腰紐を解くと肌と肌を重ねた。密着するほど体温を上げる  
ことが出来るはずだ。ぞくりとするほど小夜の体は冷たい。しかし  
放すことは出来なかつた。

『すべてわたしの熱を差しあげます。だからどうか……どうか死な  
ないで』

あかりは目をきつく閉じると、小夜の頬に唇をつけた。

どれくらいいたつたのだろう。小夜の血潮がほんのりと暖かくなつ  
た気がした。縮じこまつっていた筋肉も緩んで唇に赤みが戻つた。

あかりは安堵した。皮膚を隔ててはいたが、ぴったりと重ねてい  
たため、どこまでが自分の体かが分からなくなつていた。お互いの  
血さえ交換しあつてゐるようを感じる。

「のまま、いりつしてこよう

緊張がとけると急に眠気が襲ってきた。そして、小夜を抱いたまま眠ってしまった。

「ひじはじじや」

小夜は目が覚めると部屋を見回した。もう外は明るかった。

「気がつかれたんですね」

何かを思案している風だったあかりは相好を崩した。

起き上がる小夜に半纏をかけやりながら答えた。

「ひじらはお種さん、つて方のお家の二階です。お種さんは女髪結げなんい師で、頼りになるおかみさんなんです。わたくしも昨日の下男の源平を紹介してもらつたんです」

小夜は昨夜あかりと一緒にいた初老の男を思い出した。しかし、大奥にいたあかりがなぜ女髪結い師や下男と懇意なのか分からなかつた。

「いま、暖かい臼湯とおかゆを持ってまいりますね」

「静山」

小夜が何かを話したそうにしたのをあかりはやえぎつた。

「大丈夫です。ひじらにわたくしや月島さまがいることは誰も知りません」

そう言つてぱたぱたと階段を下りていった。

その間、小夜はふいに何かを思い出していた。

ずっと自分のそばで包みこんでいてくれた存在 暖かく安心で、

それでいて甘酸っぱいよつな…

『やうだ。静山であつた』

しつとつした肌の感触が思い出された。

素肌を含わせて抱き合つのは何ともいえず『気持ちがよかつた。

「おまたせしました」

明るく膳を運んできたあかりを見て、小夜はちよつと氣まずやつに顔をそらした。

おかしなことを口走つてしまいそうだった。

大奥にいるおまつは、落ち着かなかつた。

あかりことお静の方が出ていつてもう半田にならうとしている。下働きの娘に化けてお宿さがりの名田で出ていたのだが、いつ敵方の年寄りにばれるか分からぬ。考えただけで肝が縮こまりそうだった。

「もし、村岡やまや他のお年寄りが来られたらどうします？ いいえ、お年寄りならなんとか仮病でも誤魔化せますが、上さまが見舞いでもしたい、言われたらどうするのです」

「流行性の風邪ゆえ上さまに感染つては一大事、見舞いは『辞退申し上げる、と言えばよいのじや』

「やのよつに上手に具合にこきますかどつか」

出ていく時の会話を思い出しておまつは気が重くなつた。静山の

大胆さは月島以上である。門前殺人の事件も控えている今、いつ誰が取り調べに来てもおかしくないのである。

「あああ、早く帰つてきてください……お静さま」  
おまつはウロウロと部屋の中を歩きながら手を合わせた。

実際、大奥からひとりで出たあかりは、町を案内してくれる人が必要なことに気づいた。

知り合いのいない者にとつても、そこは江戸、口入屋など人を斡旋してくれる場所に事欠くことはなかつたが、いかんせん信用がおけなかつた。

そこで考えたのが、女髪結い師だった。

彼女たちは情報通であり、女性ならではのネットワークを持つているだらう、と推測したのである。髪結い所に入つたあかりは、そこで店で一番のやり手と思えるお種を発見したのである。

案の定、お種は面倒見のよい中年女性であつたし、ひと財産を築いていたらしく持ち家さえ持つていた。その一階に気前良く、小夜ともども泊めてくれたのである。それには何より、あかりの渡した多額の金子も効いていたが。

「火事の後、どうされていたのですか」

ひと段落ついた後、あかりはどうしても気になつていていたことを聞いてみた。

小夜はあかりの眼を見つめると、はあと息を吐いた。

「何から話せばよいのやら……」

そう言つたあと、今までの顛末を話し始めた。

## 風魔の狙い

「俺がつけられたとも知らず、雲庵に来たせいで……」  
山吹の亡骸<sup>なきがら</sup>を前に龍才は声を震わせた。

「ケガをしていたのです」

無表情のままサエは答えた。

「こゝは雲庵。小夜があかりと出会った次の朝のことだった。江戸に出てきていたサエと勘介は、とある長屋で暮らしていたのだが、朝早くに龍才から不意の文を受け取つたのだった。

×と雲の絵とが描かれた文。それは死人あり、雲庵に来い、といふことだと、ふたりはすぐに分かつた。

ふたりは山吹の殺された現場を見た。激しい衝撃を受けたが、呪詛と悲嘆に泣きながら山吹の遺骸をきちんと整えた。

そして今、布団に寝かせたところであつた。頭元にはささやかな枕飾りをこしらえた。

\* 枕飾り＝香炉や口

一ソク立てなどを置いた机

「風魔のやつ、絶対に許せねえ……」

「勝手なことするんじゃないよ、勘介。親方の指示を待つんだ」

「だつて山吹があんな目に合わされて黙つてうつて！ あの紙はあきらかに俺たちへの挑戦だろつ」

「だから余計にあんな挑発にのっちゃならない。雲才をまとも連絡がつかないのに」

山吹の殺された現場にあつた紙。

それは真言の呪詛文字で、最後には「風？」の一文字が刻んであつた。

風魔 を表している。

風魔一族は元は北条家のしのびであつたが、江戸幕府が開かれてからは直轄の主を持たず、ながれに近い形で存在していた。

だから風魔といふことが分かつても、その雇い主が誰なのかは不明である。動くのがやつとの龍才が逃げおおせたのは山吹が囮おとことなつてくれたからだつた。

風魔の四人もそれが分かつていて山吹ひとりを殺し龍才を逃がした。龍才の背後を知るためである。

「俺たちの正体があいつらに分かつたかどうかは分からん。けど、俺があいつらから逃げられん事は確かだ。だつたら、もうここから動く必要はない。それに……」

龍才は雲才と小夜のことが気になつていた。

一人が何も知らずにここに帰つてきたら危険だ。雲才はまがりなりにもしのびがあるので自分で何とでもしよつ。一番の気がかりは小夜だつた。

昨夜は帰つてきたのだろうか。

「もう風魔は襲つて来ぬと？」

サエが荒らされた部屋を見て皮肉な口調で尋ねた。

「我らの正体が分からねば再度、襲つてきても不思議はありません」「しのびを正面から襲つて口を割りせるなど不可能な事は風魔も分かつておゆ。あいつらも我らも、ここからは腹の探しあいとなる」

「家偉君の命を我らが狙つてゐるのを知つておる、とすると、それを阻止したい者……が裏におるところとか。まさか将軍家そのものとこゝ詫ではあるまい」

勘介がそう言つたあと、しばらく沈黙が流れた。

「もちろん将軍家も含まれるだらうね。だけど、それならお庭番か伊賀者を使つはず……まあ後腐れのない風魔を使う意味もないではないでしょうけど……」

「俺には将軍家が動いていると思えん。……それより今は我らの方が不利だ」

龍才是苦々しい表情でつめいた。

「この雲庵に我らの正体を現す手がかりが残つてゐるとは思えませんが……万一あやつらに知られておつたらどうするおつもりですか？」

我らの正体が分かれれば、自然お館さまの正体にも気がつきましょう」「サエの言つとおりだつた。裳羽服津は筑波を根城としているので、その直轄である水戸藩が浮かぶのは自明であった。

「俺が死んでこの一件が片付く、といつ問題ではもはやなくなつた」龍才是血の氣のない青い顔でつぶやいた。まだ傷も癒えぬ重傷者。その身に対しても過酷すぎる状況であるのをサエは気づいた。

「龍才さま、後はあたしと勘介で考えますゆえ、どうぞお休みください。いい考えが浮かんだらすぐに龍才さまにお知らせします」

そう言ひと無理やり龍才を布団に追いやった。

『そういうえば雲才さまはどうへいかれたのですか？ 状況みて姿を隠しておられるのでしょうか』

いつとつ声を落としてサエは龍才に尋ねた。龍才が眠りにつく前に雲才のことだけは聞いておきたかった。

その質問に龍才は言いにくそうな顔をした。

『雲才さまは……大奥のあかりに会いにいかれたまま戻られていな  
い』

サエの耳元で龍才はささやいた。どこで聞き耳をたてていられる  
か知れないからだ。

『あと、ここで山吹たちといっしょに暮らしていた小夜という女人  
がいるのだが、昨日、妙安寺に行つたまま姿が見えん。帰つたとこ  
ろに風魔に出くわしたか、山吹の死体を見たか……いずれにしろ行  
方不明だ』

その話を聞きサエは合点がいった。

ずっと龍才の様子がおかしかったからだ。危険な雲庵にいること  
にこだわったのは、色々な人間がまだ絡んでいるからだ。

雲才、あかり、そして小夜という女人。

## ふたりだけの時間

「ダメじゃ 静山、あそこに行つては危険じゃ。呪いがかかるてあるのじゃ」

小夜は雲庵に行くといつあかりを必死で制した。今でも暗闇でみた串刺し血まみれの山吹と、恨みに満ちた護符を思い出しそつとした。

「大丈夫でござりますよ。わたくしはこう見えても呪い返しの術を持つておりますし。山吹をそのままにはしておけません」

それは小夜とて同じ気持ちであった。火事からずつと一番身近にいて助けてくれた愛しい山吹。それを思つただけで涙が出てきた。

「だけど一人で行くのは絶対にダメじゃ。山吹を殺した奴らがまだあるかもしれん。わたくしも一緒に……」

「いいえ。月島さまは来てはなりません。これは我らが一族の問題なのです」

きつぱりとあかりは言いきつた。今までそのような口の聞き方をした事がなかつたあかりの迫力に小夜は飲まれた。

「だが、怖いのじゃ。そなたまで失つたら、もうわたくしは生きていけぬ。墨越も山吹も……皆いなくなつてしまつた」

「月島さま」

あかりは膝に置いている小夜の手をとつた。

「大丈夫です。わたくしもやつと月島さまにお会いできたのに死ぬ

つもりはありません

ふたりはじつと見つめ合つた。小夜はあかりの首に手をまわして抱きしめた。

「絶対に死んではならぬ」

「……はい」

幸せそうにあかりは答えた。小夜はあかりの髪を何度も撫で、そのままあかりの頬をなぞつた。美しい丸い頬を感じながら胸が熱くなつてきていた。

あかりは気持ちよさそうに目を閉じている。深いまつげがかすかに動いた。

小夜はそのままあかりの唇に口づけた。永い時を埋めるかのように、ふたりはお互いを味わつた。深く、深く、何度も。

あかりの左肩の着物を外そうとした時、小夜の手をあかりが止めた。

「いけません。お体にさわりまする」

「もう大丈夫じゃ」

「いいえ。月島さまは死にかけたのですよ」

「こんなトコで止めるほうが、体に毒じや」

その言葉にふたりは顔を見合わせるとい、ふつ、とふき出した。そのままあかりは小夜を押し倒した。

「ダメでござります。わたくしが、おぶそつておつますゆえ、もう月島さまは動けませぬ」

「人は嬌声を上げて笑いながらもがきあつた。

あかりに押さえられた四肢を、小夜はどうしても自由にする」とが出来なかつた。

「わかつた、わかつたから手を解いてくりやれ」

あかりは小夜の手を自由にすると、そのまま小夜の体躯をぎゅつと抱きしめた。小夜は、大奥にいた頃より少し肉がついたようだつた。それでも十分に細かつたが、外での生活のほうがストレスが少なかつたようだ。

「わたくしが、お守りいたします」

「うん」

満たされたように小夜は目を閉じてうなずいた。

「わたくしもそなたを守りたい。だから大奥へ帰る耳元でささやかれたその言葉にあかりは驚いた。

「え」

「そなたをひとりあの魔窟で戦わせるわけにはいかぬ」

あかりにとつてはもちろん、大奥のすべてを知りつくしている小夜にとつても、状況が生半可でないことが分かつていた。

「いいえ。戻つてきてはなりませぬ。先ほども申しましたが、月島さまは火事の出火元とされているのです。もし生きて戻ればどんなお咎めがあるか分かりませぬ」

「それは大丈夫じゃ」

小夜には何か算段があるようであつた。

あかりはじつと小夜の顔を見つめた。もちろん、あかりとしてはずっと小夜と一緒にいたかったから大奥に帰つてもらいたかった。だが、それは再び激しい戦いに駆り出すことだ。何より、小夜には大奥勤めは向いていない。

「まだ、いけません。月島さまのお体では」

「そなたがいるので大丈夫じや」

いたずらっぽく小夜は笑つた。

「いいえ。もう少しだめでいいります。その代わりわたくしが月島さまに文を差し上げます」

「文？」

「はい。月島さまが大奥に帰るころあいを整えます。だいたい、月島さま、どうやって大奥に帰るおつもりだったのです？」

そう問われては、小夜はぐつと黙つた。

「そなたイジワルじやな」

すねた顔でふくれる小夜はなんとも可愛らしく、あかりは小夜の唇をちゅつ、とつじばんだ。何度もお互に口づけを繰り返すと再び火がともりそうだった。

「次はいっぱいいたしましょう」

「そなたは本当にイジワルじや」

あかりに組み敷かれて手足の自由の利かない小夜はうわざる声でつぶやいた。

なんとかあかりの下から手を出せたので、お返しをするように田

一杯あかりを抱きしめた。

「絶対に迎えをよこすのじやぞ」

考えることは、山のよひにある。

だけど、今は

温かいふたりだけの時間を共有していたかった。  
それが何よりも大切なことだった。  
小夜は目を閉じた。

あかりが雲庵に現れたのは毎過ぎのことで、た。

裏口から影のように出現したあかりに気付いたのはサエだった。  
「なぜ、ここにそなたが？ 大奥を抜けてきたのか？」

肯いたあかりは、薄暗い室内で笠を脱いだ。

「サエはどうしてここへ？ 龍才さまは？」

「龍才さま……は奥で休んでおられる」

あかりはどうして龍才さまがここにいると知っているんだろう

「今朝、龍才さまに勘介ともども呼び出されたのを」  
不承ながらもサエは続けた。

四人は龍才の寝ている部屋へ集まつた。青白い顔していたが、無事であるらしい龍才の顔をみてあかりは胸を撫で下ろした。

小夜からもケガの状態を聞いていたが、実際に会うまでは不安だったのだ。

「山吹は？」

いの一番に聞きたかったことをあかりは口にした。

「死んだ」

龍才がきつぱりと言つた。

「遺体はきちんと整えて、妙安寺で弔つてもらつた」

沈痛な面持ちで経緯を説明した。

「それで……その……」

「山吹が殺されていたのは、この部屋だ。我らは忘れん。串刺しにされた山吹のうえに俺は寝ている。山吹の無念を俺の中に取り入れるためだ」

思いつめた龍才の言葉にあかりはどうも言つていいか分からなかつた。あの小夜こと円島でさえ、おののいた遺体状況である。だが、その恐ろしさより、龍才たけこは、怒り、恨みのほうが大きいのだ。

「これを見よ

山吹の遺体といつしょに貼つてあつた紙を龍才はあかりに手渡した。

「これは……密教で使うような文字に見えますが」

「呪の護符だ。これが山吹の遺体と一緒に壁に貼つてあつたのじや。だから、我らだけで風魔を片付けねばならぬ」

呪いが裳羽服津一族に及んでは困る

そういうことか。

あかりは納得した。

「今、風魔と言われましたが、ここに「風」と書いてあるのがその

証ですか

「そうだ」

「その風魔たちは若い江戸風の町衆ではありませぬか」「なぜ知っている」

あかりは一呼吸置いた。

「雲才さまが江戸城、平川門の前で殺されたのです」

「なんだって！」

三人は驚愕の表情を浮かべた。

「二十四、五歳の江戸風の若者が一人、いえ、本当はもつと多いのかもしだまぬ」

「四人だ」

龍才はすかさず訂正した。暗闇の中で一度も奴らと対峙したのだ。

「きやつらは雲才さまがわたしを呼び出したのを知っています」

「それで大奥を抜けてきたのかい」

サエがいぶかしげに尋ねた。

「ええ……」

自分の窮地を何とかしたい為に、裳羽服津の誰かに連絡をつけたかったのだが。今や自分に近しい裳羽服津の四人が窮地に立たされている。何とも複雑な様相を呈していた。

「これからどうされるのですか」

あかりは龍才に尋ねた。

「雲庵で風魔が来るのを迎撃つ所存だ。どのみち俺はこの体で動

けん」

「後、ちょっと……雲才さまが面倒みていた小夜つて人が、ここに帰つてくるかもしれないのも気になつてるんだよ。龍才さまは」

勘介が面白そうに口を開いた。

「えつ」

「なんでも女だてらに医術の腕が、かなりすごい人なんだって。ね、龍才さま」

「オマエはどうしてそう余計なことを……」

「大丈夫です」

あかりが口を開いた。

三人は驚いてあかりを見た。

「小夜さまは、安全なところへお移しいたしました。こちらには絶対に近寄らないように言いわたしております」

「お、おまえ小夜どのと知り合いだったのか」「はい」

あかりはにつこりと笑った。



## 暴かれた秘密

なんと運の向いてきたことか。

大奥年寄り・村岡は飛び上がりたいような心地であった。

なぜなら、姪の笠野が懷妊したからだ。その日のうちに笠野はお方さまと呼ばれるようになり、南向きの部屋さえ賜つた。

『大奥筆頭にいってどう近かつた月島も死に、笠野が懷妊したいま、次の大奥総取締りはこのわたくしじや』

冬も終わりに近づいたうららかな午後、村岡は水仙の香りを胸いっぱいの味わつた。

そんなある日、村岡は、ある饗宴きょういんに呼び出された。

「ほんに、老中首座復帰おめでとうござりまする」「ん」

上座には満足げな表情の水野忠訓みずのただくにが居た。五十歳の誕生日を迎えたばかりの水野は、細身で神経質しんけいしつそうな男であった。

「一時はどうなる」とかと思ったが、わしにもまだ運が残つておつたらしい」

政変にあい、老中を解任された水野だったが、再び老中の主席に返り咲いたのだ。

「何をおっしゃいまする」

「火事の再建費用を集められなかつた首座の土井が失脚になつたおかげだ。ほんに、何が幸いするか分からぬ。まあ、それはそなたの

おかげでもあるの」

水野は、嫌味たらしく、ふふふ、と笑つた。一の長つぼねからの出火を言つてゐるのである。江戸城本丸を焼いた火事は、村岡の部屋からの過失であった。

「せつかく政敵である阿部さま<sup>ひいき</sup>の丹島部屋の過失に出来そうでしたのに……」

「ふん、大奥が絡むと口クなことがない。じゃがの……あの何とかいう側室、色々とあるのがわかつてきただぞ」

「お靜の方ですか？」

「そうだ」

折にふれ、水野にはお靜の方となつた静山の邪魔くさりをぼやいていたのである。

水野は手を一度叩いた。奥の障子ががらりと開くと、がつしりとした体格の男が黒装束に身を包んで控えていた。

「平川門の前で殺された小間物屋と、側室お靜の方の関係をお話し

しる」

水野が低い声で命じた。

「はい。お靜の方さまは、びつやら家侍さま暗殺を企んでいたしのびの一味かと」

「なに、しのびじやと？」

村岡は顔色を変えた。

「はい。小間物屋を大奥からの連絡に使つてはいたのは確實にござります。しかし、一味はどうやら孤立してゐるらしく、今のところ家

「俺さまを新たに亡き者にする計画は立てられていない様子です」

「どうしてそうだと分かる？」

村岡はなじるよつに言つた。

「一味の根城をずっと伺つておりますが、動きが全くありません。  
誰かに連絡をとつた様子もありません」

「いつたいそこには何人くらいあるのじや」

「女ひとり、男ふたりの三人です。静の方を入れると四人であります

すが」

「たつた四人かえ」

拍子抜けしたように村岡は笑つた。

「四人であつても油断はなりませぬ。しおびであればたつたひとり  
でも……」

男が全部を言い終わらない間に村岡が口をはさんだ。

「そんなことより、お靜の方が、家偉さまの命を狙つてゐる大逆賊  
の一味とは……とんでもない秘密じや」

「で、あらう」

満足そうな顔をして水野はうなずいた。鬼の首をとつたかのよつ  
な表情で村岡は立ち上がつた。

「ほほほ、この切り札。なんと使つてやひひ」

「落ち着かれよ、村岡どの」

「水野さまはどうされるおつもりですか」

「どうもせぬ」

「どうもっ。」

怪訝な顔で村岡は水野を見た。

「先ほども言つたとおり大奥は下手に手を出せば、さつちに火の粉が飛んでくる。こちらは切り札としてお静の方の身元を知つておればいいだけだ。だいたい、まだ何もハツキリしたことは分かつておらんのだ」

「しかし、家臣さまの命を狙つた連中と分かつてはいるではないですか」

「背後も分からぬでは、小者をあげたとてどつする。捕まえたとしても口を割るとは思えん」

水野があごをしゃくると、黒装束の男は障子をパタンと閉めた。しのびの周到な行動をみて村岡は、じつと考へた。

あのお静の方がしのびであるとすれば

「お静の方は黒川藩出身と聞いておりますが……お静の方の大奥入りに関わっている万里小路さまも何やらありそつぞくじこます」

「ほう」

よく氣付いた、という顔をして水野は肯いた。大奥の背後には各藩の思惑が渦巻いている。

「わしも黒川藩を少し調べてみたが、ほんに金に困つてあるようじや。そんな藩が多額の金子のかかる大奥にどうやって娘を入りこませる?」

「藩のどじかから金山きんざんでも出たのでしょうか」

「そう都合よく金山が出たら黒川藩は借金をすぐに返しておるであらう。村岡どの、お静の方は間者まわしじや。貧ひん乏ぼう藩がそいつた組織を持つると思ひつか? 恐らく、取引であるうつな」

「取引?」

「どじぞの組織か藩かは知らぬ。したが、黒川藩の窮状を肩代わりする代わりに、間者の身元として取引されたのであるう」

「こつたどじの誰がそのようなことを……」

答えが出ないのは分かつていてもつぶやかずにはいられなかつた。

「村岡ど、万里小路どのもお忘れめさるな。静の方の後見を最初から買つて出でられているからには由ゆとはいえない。万里小路どとの静の方に共通するものを調べるのが早道であるうな」

その言葉に村岡は深くうなづくのだった。

「そうだ。万里小路は何か知つていてる。そして、何かを企んでいる。しかし、こつたど何を?」

「村岡にとつて邪魔な静の方と万里小路がいなくなれば、大奥総取締は手に入ったも同じである。」

みずのただくに水野忠訓みずのただくには村岡を動かそとしていた。しかし、動かなくとも損はしない。

「コントロールがききにくい女の園は、下手に手を出すと何が出てくるか分からぬ。それならばいつそのこと野心に燃えた村岡に好きにやらせたらうがよい。責任は村岡が持つてくれるのだ。」

水野忠訓は慎重であつた。

## 江川の考え方

小夜はやはり大奥に戻ることを決意した。

あかりは手紙を待て、と言つたが、何より情報が手に入らない立場には耐えられなかつた。

しかし、どうやつて帰る

一介の町の女となつた今、誰が自分を大奥の御年寄り、などと認めよう。

しばらくたつて思い浮かんだのは、鍋島斎正のことだつた。

『彼に相談すれば、何とかなるかもしねれない』

そのためには、まず佐賀鍋島藩の江戸上屋敷の場所を調べるところからだつた。

「お、ここだ。山下御門内やまとしたいじもんないだよ、こりや」

奉行所の下つ端役人は、大仰な声をあげた。

鍋島藩の上屋敷は江戸城の外堀ぞいにあつた。さすが、大大名である。小夜は書いてもらつた地図を持って奉行所から出るところで、不意に声をかけられた。

「小夜どのではないか

それは江川太郎左衛門であつた。

小夜にとつて何とも時機の悪い再会だ。

「ずっと探していました。家のほうに行つても、ずっと留守で

「申し訳ありません」

気まずい思いから口を合わせることが出来ない。江川は、一瞬で何かを感じ取った。

「今から団子でも食べに行きませんせんかな」

「ううだ。江川には、きちんと断りねばならない。」

「……はい」

小さいながらもハツキリとした声で小夜は返事をした。

江川太郎左衛門は、簡易な軽食も出す料理茶屋に入った。

そこには個室となつており、寄合、饗應から句会や碁会などの用途に使われていた。上流階級の女性としての生活しか知らない小夜はキヨロキヨロしながら後に続く。

「めずらしいですかな」

「はい」

江川は慣れた様子で注文をすると、話を切り出した。

「いやー なかなか翻訳が進みません。やはりエグレス語から蘭語に直して、また和訳するという作業が一度手間で……」

「あの、その」とですが、江川さま  
ん? という顔をする江川。

「わたくし……その、翻訳のお仕事が出来なくなりました」  
「なんと」

何かあることを予測していた江川はさして驚くでもなくそつまつた。

「本当に申し訳ございません。もうひとライフル砲のことは決して他言いたしません」

しばらくの沈黙。

そして

ふう、と江川は息を吐いた。

「小夜どの」

小夜は頭を上げられなかつた。

「もし、よろしかつたら理由を話してくれませぬか。いや、翻訳のことは少し置いておいて。あなたと分かれて何があつたのか。どうして雲庵はずつと休業なのか」

「休業？」

「？しばらく留守にするので休業します？」と、う張り紙が貼つてあつたのだが、知りませんでしたか」

「あ、はい」

ふたたび沈黙がふたりを包んだ。小夜としてはどう説明していいか分からなかつた。雲庵のことやあかりたちの裏のことは知らないのである。しかし、自分のことなら分かっている。大奥に帰りたい、といふ意思だ。

小夜は、江川に帰る手立てを相談してみたくなつていた。鍋島斎

正に頼ろうとしたが、本人が国元くにもとから帰つてきているかも不明なのである。協力者は多いほどよいのではないか。

小夜は意を決した。

「江川さま、わたくし、大奥の年寄りでした」

一言ずつ言葉を区切りながらはじめた。それを聞いて江川の目が少し大きく見開かれた。

「年末の江戸城の火事をご存知ですね」

「ええ」

「あの火事でわたくしは焼け出されたのです。もちろん故ゆえあつてですが。一時はもうこのまま町で暮らそうと決意しておりました。ですが、そもそも言つていられなくなりました。大奥に帰らねばならぬのです」

小さく息を吐いた江川太郎左衛門は、おだやかに微笑んだ。

「あなたさまが、帰らねばならない、と決めたのでしたら、それがよろしいのでしょうか」

「それが……分からぬのです。江川さま、わたくしがどうやつて江戸城、大奥に戻ればよろしいのでしょうか」

その後、小夜が大奥では焼け死んだことになつていてこと、雲庵で山吹が殺されたこと、それが大奥や幕府の問題と関係あること、などを話した。

「うーん」

江川はうなりながら田をとじた。そして、うなりながらあつちを

見たり、じつを見たりして何か考えていろよつだつた。

「出来るかどうか分かりませぬが、やつてみましょ？」

「では？」

小夜は期待で田を輝かせた。

「少し……段階が必要ですがよろしいですか。何しろ、大奥は表から攻略は全く効きませんからな。ましてや、小夜どのは、失礼、月島さまは死んだことになつておられるのですから、これを覆すとなると……並大抵ではございません」

「時間がかかりますでしょ？ うか」

「うーん。月島さまの働きによりますな」

「わたくしの？ わたくしは何をしたらいよいのでしょ？」

「翻訳です」

「え？」

意味が……分からぬ。

「とにかく、こちらの資料の翻訳をしてください。うまくいけば三ヶ月ほどで大奥に帰れるでしょう」

「どうこつ意味ですか？」

江川太郎左衛門はにやりと笑つた。

## ハメられたあかり

卯の花も咲き終わり、大奥では夏の衣替えにさしかかる季節となつた。

衣装は女の見得の張り合いを含んでいたので、呉服屋が出たり入つたり大騒ぎの時期もある。高級女中たちは数度しか袖を通さない呉服を、何十枚も購入する。

大変な金額だ。商人にはおいしい商売であり、この利権にあずからうつと賄賂が横行していた。もちろん、呉服以外でも、同じである。大奥の異常ともいえる贅沢に、あかりは今もつて慣れることが出来なかつた。小夜のこと、龍才たちのこと、水戸からの指示、で頭がいっぱいなのに、おまつたち部屋は、衣装」ときにあれこれとうるさいのでだ。

そんな中、突然、村山がたすきがけ、鉢巻きをした女たちを伴つて、あかりの部屋に現れた。

「お静の方、上意である。そなたをこれからひつたてる」

「ええ?」

おまつたち部屋は声をあげた。

「そなた、不審なやからと結託して家侍いえさちさま暗殺を企てる大逆賊なり。これより審議に入るゆえ、神妙に縛はくにつけい」

一しまつた! どこでバレたのであう? 証拠の文はすべて焼いておるが――

「び、びつこひことじで」じこますか。なにゆえ、お方さまを、その  
よつこ「たつこ」

縄で縛つたとある女たちに、おまつは割つてはいた。

「お静の方が懇意にしておつたつくば屋はクセモノの巣窟であつたのことが判明したのだ」

「なにか証拠があつたのでしょうか」

おまつがなおも食い下がる。

「もううんじや。お静の方とつくば屋が交わした、暗殺をもくろむ文が発見されたのじや」

「そのよつなもの、でつちあげにござりまするー。」

あかりは声を荒げた。暗殺のことなど書いたことがなかつたし、何よりしのびの辯として、文を置いておくことなど決してなかつたのである。

「言い訳するとは見苦しいぞ。そら、ひつたてよ」

あかりの力を持つてすれば、数人の女たちから逃げることは可能であつたが、様子を知りたかった。そのまま縄でしばられると大奥の隅にあつた牢に入れられたのだった。

ハメられたことは確実である。

何度か取り調べを受けるうちに色々と分かつてきた。つくば屋、つまり雲庵に取り調べの手が入つたこと、龍才たちは役人に抵抗して逃げたこと、そして自分の類者として、黒川藩、万里小路まで密

かに取り調べを受けている」と、などである。

困った。龍才たちは無事に逃げおおせたのであるつか。せめてもの救いは丹島である小夜に類が及ばなかつたことである。

静かだつた牢の入り口で、なにやら人の言い争つ声が聞こえた。家賢だ。村岡らに着いてくるな、と怒つている。ほどなく一人、牢の前に現れた。

「顔をあげよ」

あかりは、ゆっくりと面を上げた。きりり、とした表情は悲壮感もなく、とまどつほどに美しかつた。家賢は信じられなかつた。あかりが、暗殺集団の仲間などと。

「じつじでんせ、じつじでんせ余を騙しておつた  
「騙してなどおつません」

「では、あの文は何なのだ。そなたの筆跡であつたそつではないか  
「わたくしではありません。誰かが真似て書いたのです」

その言葉のあと家賢は、考へこむようじて黙つた。そして両手をとじて拳をぎゅっと握つた。

「余はそなたのその言葉を信じたい。だが、状況がそつはいかん。つづば屋のあるじは平川門の前でしのびに殺されたそうではないか。そういうたやからと懇意にしておつた事実は事実ではないのか」

「いつかいの小間物屋の類が、なぜわたくしにまで及ぶのでしょ  
か。わたくしはただ品物を買つただけ……」

何か必死で言い訳しているように感じてあかりは黙つて下を向い

「え

た。

本当はその通りなのだ。家賢を騙すつもりはなかつた。だが、忍びであり密命をおびてきたのは間違いないのだから。

「そうであろう。そなたはただ、小間物屋で物を買つただけなのじや。余もそう申したのだ。だが、周りがどんどんどんどん証拠を出してきて、噂が止められぬ。大奥では、いつそなたが処刑されるか、とこゝとこゝまで話がなつておるのじや」

「わたくしが処刑？」

「ああ、靜、わしはどじつしたらいのだ」

家賢は顔をしかめると、牢屋の格子をつかんだ。將軍家への反逆は大罪である。このままではあかりが殺されてしまつ。よほど取り乱していたのか、一人称が余からわしとなつた。

## 万里小路の思い

「と、とにかく時間をかせいで。そなたの身の潔白を証明するまで……それまで少し辛抱するのじゃ」

「上様……」

あかりは何も言えなくなつた。自分の身は潔白などではない。それを信じている家賢の誠実さに悲しくなつた。

「わたくしは大丈夫でござります。上様、そのようにお嘆きになつてはいけません」

「そなたは殺されようとしておるのだぞ」

「仕方ござこませぬ。それもさだめなら」

「そのようなさだめは許さぬ。このまま死ねばそのほうは大逆賊として語り継がれる。それが余には我慢ならん」

その表情には、生まれついての誇りの高さがあつた。自分に連なる者たちへの誇りでもあるのだろう。

「横井の父にも類が及ぶのでありますようか」

「今は藩の意向で自宅蟄居になつておるそだ……」

家賢はうなだれるように下を向いた。懲罰は確実であろう。自分の実刑が確定しないことにはどうなるか分からぬが、下手をすれば一族として処刑、よくて切腹か。家は断絶であろう。

養父・横井 定利。<sup>さだとし</sup>ほんの数年であつたが養父となつた男はどうなるのだろう。そして、黒川藩と水戸藩はどうするのか。自分の失態が今になつて大きな影響を及んでいる、という事実にそら恐ろし

を感じてきた。

「あと万里小路は京にかえすことにした」

「万里小路さまで？」

失脚なのか。

「なぜで」「ぞいますか？ 万里小路さまはわたくしをただ、大奥に入れてくださいただけです」

「それだけならよかつたのじゃが……少し乱心しあつたのだ」

「乱心？」

「御台所の墓を荒らしたのだ」

あかりには全く意味が分からなかつた。あの冷静で口のたつ万里小路が御台所の墓を荒らす？ 想像が出来なかつた。

家賢は、はあ、と大きくため息をつくと、よほど疲れていたのか、牢の前に腰を下ろしあぐらをかいだ。

「万里小路が死んだ御台所、たかこ教子に京都から着いてきたのは知つておるな。あれは教子の乳姉妹で姉のようなものだ。ふたりは心底に信頼しあつておつてな、教子が死ぬとき『京に帰りたい、父母に会いたい』と言つうの聞いて、骨を京都に埋めてやろうとしたのだ」

徳川に嫁ぎ、御台所となれば一族の墓に入ることしか許されない。しかし、その話がなぜ自分の事件と関係があるのか、それが分からなかつた。

「そなたと類ある万里小路は自分に嫌疑が及ぶのでは、と取り乱したらしい。自分がそなたのように捕まる前に、骨をもつて京へ帰ろうとしたのだ」

そう聞いても、あかりはやはり納得いかなかつた。そもそも、なぜ黒川藩からの頼みを聞いて、自分を大奥に入れたのか、が分からぬ。

いや、ちがう。反対なのだ。京都に骨を持つて帰りたい、という願いが先だ。もし、自分が御台所の骨を持つて帰りたい、としたら、どうするだろう。徳川の墓からは決して出られない。と、すると……大胆な発想しか出てこなかつた。

### 徳川幕府がなくなればよい

そうだ。幕府がつぶれれば帰れる。なんという不可能な願いであるか。しかし、それしか出てこなかつた。

もちろん、本気で幕府転覆を、しかもひとりで出来るなど思つてもいなかつただろう。が、水面下では幕府の抵抗勢力があり、それを密かに応援することは可能だ。あかりは万里小路の熱い思いを知つた。

「あまり気にするでないぞ。万里小路は本当に少しおかしかつたのだ」

だんまりと考へこんでいたので誤解を与えたらしい。万里小路のことには責任を感じてゐると思われていたのだ。

「万里小路さまにまで多大なご迷惑をかけました」

「あやつも生まれ故郷の京に帰れるのだ。御台の髪と共にの。そんなに気に病むな。人のことより自分のことを考えよ。そなた……」

家賢は急に悲しそうな顔をした。そして牢屋の部屋入り口を気にしながら、格子の間からあかりに手を差しのべた。

「手を握ってくれ。そなたを本当に愛しておったのだ。本当に、そなたまでいなくなつてしまつのか」

「上様」

あかりは泣きながら手を握った。何度も上様、と繰り返しながら、その暖かさを感じていた。

家賢のことは好きだった。政治的なことがなれば本当に愛せたのかもしれない。

水戸のお殿さま、親方、あかりは本当にいります。お役田は果たせませんでした。死んでお詫びをしたいけれど、それも出来ません

血書をして、さうに家賢や円島を悲しませる」と、は出來なかつた。

円島さまは、わたくしの文を待つておられたの……ござつて

う

この先どうなるか、全く分からなかつた。

奉行所の急な手入れに、龍才たち三人は逃げるだけで精一杯だった。

煙幕えんまくを使ってちりじりになつた、龍才、勘介、サエの三人はかねてから決めていた集合場所に再び集まつた。

それは竹やぶの中の小さな小屋であった。

「何があつたのだ？ なんで突然、役人が俺たちを捕らえにくる？」勘介は青い顔をしながら小屋の戸口に張り付いている。外をうかがつているのだ。

「？結託けつたくして不穏な動きをしている？」と役人は言つておつたな。：「風魔の雇い主が表から指示したのだろうか」奥にいた龍才は傷口を確かめながら答えた。

しばらくの沈黙。隅にいたサエもじつと考えていた。

「何か……あつたのは確かですね。風魔なら、こんな邪魔臭いことする必要ないし……表、表の世界……将軍家？」

「うーん……風魔の雇い主か、それとも、もつと別の政治的な関係か……」

龍才は頭をかかえた。そしてハツとした。

「あかりが、あぶない」

表の世界で、自分たちを捕らえる動きがあつた、ということは、？結託している？あかりも何がしかの影響を被るはずだ。その考え

をサエと勘介に話す。

龍才是当然、あかりの様子を探りにいく、としたが、それに意を反したのはサエだった。

「危険すぎます。我々は追われる身なのですよ。それなのに、大奥にいるあかりの様子など、探れるはずないじゃありませんか。無謀です。ここは、引くべきです。一旦、引いて、親方の指示を待ちましょう」

「うんうん、そうしましょう。龍才さま」  
これには勘介も同意した。冷静に考えれば、こういった緊急事態に動き回るのは危険なのだ。しのびの教えにも反していた。

だが龍才是焦っていた。家侍の件で手入れが入ったとしたら、自分たちは？大逆賊？である。そして、もしかりが、その一味であると分かつてしまつたなら、当然、死罪である。

いや、あかりを陥れるほうが真意であつたなら余計、危険だ。その最悪のシナリオがどうしても頭から離れなかつた。一旦、もはき裳羽服津に帰つて、何かする時間はないのだ。

龍才是目を閉じた。

「おまえたちは、裳羽服津に帰れ」

「龍才さまー」

サエと勘介は声をあげた。

「その通りだ。今は引くのが一番よい道だ。……親方に伝えてくれ。後を継げなくてすまない、と。でも、俺は、俺の生き方のほうを選

んだので、悔いはない、とな

死ぬつもりだ

サエと勘介には、分かつた。

そして、止めることは出来ない、と。龍才はあかりと共に死ぬつもりだ。

しのびは情に流されて、冷静な判断を過つてはならない、と徹底的に教わってきた。そんなこと、優秀な龍才には分かつている。ひとりの判断ミスが、一族全体にまで影響を及ぼすからだ。

だから、失敗したら自ら死ぬべきであるし、それを？切つて？いく関係が何よりも大事なのだ。

だが、あえて龍才はあかりを選んだ。

自分の生き方を選んだ、と言つた。それは『決して仲間を見捨てない』ということなのだろうか。それとも、あかりだけが特別で、心中してもいい、と考えているのか。恐らくどちらもだろう。

今回は信念と感情が合致したが、恐らく信念だけでも、動く男だ。龍才は。だから、もし窮地に陥つたのが、あかりでなくとも、龍才は助ける道を選んだろう。

サエはふつと笑つた。

「龍才さまには負けたねえ」

腕を組むと、笑いながら目を伏せた。バカなことをしている、と思いつつ、龍才に協力しようとしている自分がおかしかった。

小屋の外はざわざわと竹が鳴っていた。



汗が出ないように小夜は、ややきつめに伊達締めをしめた。

\* 伊達締め=着物下に着る襦袢を結ぶ

小さめの帯。

今日は江戸城に参代する日である。

江川太郎左衛門は砲術の資料をまとめた。その詳しい説明を江戸城ですることになっていた。それに同行するのが小夜である。今回は翻訳者として不可欠な人材として登録してあつた。

名前は、「いとうやまがつこう」 薙山月光。

苗字は、江川の治める地、伊豆「いづ」 薙山からとつた。月光は、もちろん月島をもじつたものである。

政治の表舞台である、本丸表は男の世界なので、女性である小夜が江川に付き従つて歩くのを見ると、人々はぎょっとして振り返つた。

中でも、大名クラスは、大奥年寄りだつた月島を知つていただけに、真つ青になつて立ち止まつた。

なぜ、ここに死んだ大奥年寄りがあるので、幽靈を見ているのか

ふたりは側用人に付き従い、長々と廊下を歩かされた。そして、老中と将軍が会議をする隣の部屋に通され、そこで控えているように言い渡された。

じつと待つ。

異国船対策についての話をしているようだ。リベラルな老中・阿部正宏と、過激な保守・水野忠訓は相変わらず対立している。しかし、今回、江川を呼んだのは、水野であった。

水野は江川を高く買つており、幕府の砲術指南役として何かと便宜をはかつていた。

「江川太郎左衛門と、葦山月光、これへ」

水野の声でふすまがスッと開く。

頭を下げるふたり。

「今日は西洋で最新式と呼ばれる、大砲の……ん？」

「」で水野、以下全員が女性である小夜に気付いた。御前会議に女性が入ってくるなど経験したことがなかつたからである。

「申し上げます」

江川が頭を下げたままで声を張り上げた。

「我が隣に控えまするは、今回の翻訳作業にて、強力な力添えをした葦山月光と申す者でござります。是非、上様には格別なるお声を賜りたく、参代いたしました」

「なに？ 女の身で翻訳作業とな  
家賢がつぶやいた。

「それは、何とも殊勝なことじや。顔をあげよ」

小夜は一瞬、息を飲んだが、すぐに意を決して顔を上げた。

「一。」

そこにいた全員が固まつた。

老中以下、主だつた大名たちは、みな、月島だつた小夜の顔を知つていたからである。

「そ、そなた……月島？」

真つ青になりながらも家賢が、最初に口を開いた。

上様、月島さまは生きております

静の方だつた、あかりが、何度も何度もそつ言つていた。やはり、あの言葉は本当だつたのか。

「月島、いや、そのほう……」

「月光にござります」

江川が補つた。

「月光には、別室で待つよう伝える」

家賢の声は上ずつていたが、力がこもつていた。

「はい」

月光こと小夜は深く頭をさげて、御座の間をさがつた。

側用人たちの異様な空氣を背にすると小姓が小夜を個室に案内しにきた。

御小座敷。

つまり將軍の私的間に通された小夜は、不思議な気持ちで正座をしていた。ここは中奥、お鈴廊下の向こう。ずっと行けなかつた先にいま自分はいる。いや、もう今は焼けてしまつたか。再建中の

か。

ぼうと考へてゐる間に、せかせかした足音が聞こえて家賢がやつて  
きた。

「顔をあげよ」

いちいち言つのも面倒なようだつた。

だが、小夜は顔を上げられなかつた。家賢に不忠を働いたことが  
分かつてからだ。

「そなたは余が、どれほど怒つてゐるか分かつておるうな」

「はい」

長い沈黙がおりた。

険しい目で小夜を睨んでいた家賢であつたが、じぱりとするといは  
つと息を吐いた。

「わつよ、顔をあげよ。これは命令じや」

わづくつと小夜は顔を上げた。しかし、目は伏せたままである。  
将軍の顔を見るのは無礼にあつたからだ。

「ひらを見よ、と申してゐるのだ、月島」

小夜は、視線を上げた。澄んだ瞳はさらに深く、だが、どこか輝  
きを増していくようだつた。

「息災でおつたか」

「はい」

あくまでも態度を崩さない小夜に、家賢は再度ため息をついた。

「いい加減……元にもどつてくれぬか。余はそなたを歸しようなど、  
露とも考へておらぬ。少し戸惑つておるだけじや」

「歸つべき言葉がみつかりません

「どうしたおつたのじゃ」

「……火事のとき部屋子が危険と判断して、わたくしを江戸城より連れ出したので」しゃります」

「大奥の女はたとえ焼け死んでも外には出ぬ、といつ不文律を知つておるそなたが、部屋子の指示に従つたとは思えぬ」

「情けないことに、その時わたくしは意識が<sup>1</sup>しゃこませんでした」

「なるほど。では、その部屋子に褒美をとらせねばならぬの。そなたの命を救つてくれたのだからな」

家賢は<sup>2</sup>冗談っぽく笑つた。

「したが、どうしてすぐ帰つて」んんだ。罰を恐れたのか？ いや、そのようなそなたではあるまい」

「本当に申しひらきも<sup>3</sup>しゃこませぬ」

「余はわけを聞いておるのだ。あやまるのは禁ずる。……余が嫌になつた、と申すなら、それでもよいのだ」

「とんでも<sup>4</sup>しゃこませぬ」

小夜は首をふつた。

「記憶が……記憶がとんでもいたので<sup>5</sup>しゃこます。しばらく部屋子の知り合いの家にやつかいになつていていたおりに、江川太郎左衛門さまに出来つたので<sup>6</sup>しゃいます」

「なるほど。だが、どうして砲術指南所などで男に混ざつて働いておるのじゃ。そなたは大奥年寄ぞ」

小夜にはどう説明していくか分からなかつた。ことは複雑すぎた。

しかし、家賢には複雑であつても説明せねばならないと思つた。

「上様」

強い意思を込めて小夜は、家賢の眼をじっと見つめた。

「Iの日本は危機にむかひそれであります」

「うん」

神妙な顔で家賢も肯いた。

「砲術指南所は日本の防衛に關わる大切な仕事をする場です。異国の言つがままにならぬようにするには大砲の開発は必至でIのやつます」

「もちろんやつじや。だが、なぜそなたがそこにゐるのか、と聞いておるのだ」

小夜は覚悟を決めた。

「それはわたくしが、異国語が少し分かるからでIのやつします」

「それだけか?」

意味が分からなかつた。小夜は怪訝な顔をした。

「……それだけ、とは?」

「なんだ、そうであつたか」

なぜかホッとしたような様子で家賢は胸をなでおろした。

「え?」

「余はまたそなたが江川に惚れこんでおつて、仕事に協力してあるのかと思つたぞ。……あれだけ異国の本を読んでおつたそなたが異国語が出来たとて不思議はない。だいたい異国語が出来ることは（静……から聞いて）知つておつた」

「……」とは……といふ言葉を言つた後に一呼吸おいた家賢だが、小夜はそれに気付かなつた。

「そなたが火事で死んだとなつてから、書庫のばばから預かつていった異國の本を余は見たのだ。そなたが訳して書本もだ

「火事で焼けてしまつたのではないのですか」

「ばばが火事と聞いたとき、貴重な本を一生懸命運びだしてくれた

そうだ」

「その言葉に小夜は何ともいえない嬉しさがこみ上げてきた。焼けていなかつた……

「それを見たとき、やはり、そなたはタダ者でない、と思つたのだ。多くを見渡せ、学問に聰いおな」などいぬ

「もつたいのひざります」

「小夜は頭を垂れた。

「月島」

家賢は上座から立ち上がり、小夜の元にしゃがんだ。

「帰つてまいれ、余のもとに」

「帰つてまいれ、余のもとに」

「上様……」

「そなたを失つて以来、余はそなたが本物で妻であったことがハツキリわかつたのじや。徳川開幕依頼、妻は夫に従い、内助の功で助け、良妻賢母であること、としてきた。したがそれは正しいのか？」

だいたい將軍家はその教えにさえ則つておらぬ。御台所は、内助の功どころか、公家の姫をもひつて政治に口を出させぬよつ大奥にひつじめたままだ

「では上様は何をもつてして、わたくしを妻だと言われるのでしょうか」

「本氣で惱んでくれるといふ……ではないのか。同じ立場にたつて答えを出そつとするところではないのか。武将はおなごに政治の話をせずとも、側用人がある。しかし……太平の世が続いた今となつては、側用人でさえ利権が絡んでくるのじや」

「側用人の代わりを妻がせねばならぬと、言われるのですか」「違つ、もつと私的なことじや」

「私的？ 上様に私的なことなどありますぬ  
あまりにきつぱりといつ小夜に家賢は面食らつた。

「ふふ、なんとはつきりと言ひ。だから、そなたは最高の妻なのだ。類稀なる頭脳と、余を恐れず、敬わず、本当に余のことを考え、意

見してくれる」

小夜には黙つて聞くしかなかつた。

「そなたに女の道を求めてはおらぬ。妻として一緒にいて欲しい、と言つておるのだ」

「わたくしが」一緒にいて、あれこれ言えれば何か変わるものでしょうか。幕府の体制や、上様の判断が、変わるものでしょうか」

小夜はよく分からなくなつてきた。ここに来るまでは大奥に帰らねば、と思っていた。だが、このまま家賢のそばにいて何も意味がないよつて思えてきた。

「なぜ、そのように小難しく考えるのだ。余でさえも幕府の体制をなかなか変えられぬ、といふのに。そなたは余のそばにいて、色々な相談につてくれればよいのだ」

小夜はその言葉を聞いて、深い溝が開いていくのを感じた。家賢はただ、己のカウンセラーが欲しかつただけなのだ。それも都合のいい意見を言つ。

小夜は少し意地の悪い気分になつた。きつと怒るであつて、ことを言つてみたくなつた。

「異国が攻め込んできて、もしも幕府が無くなつたら上様はどうされます?」

家賢はきよとん、とした。だが、少し気まずそうに手を動かすと答えた。

「もし、徳川幕府が負けたら、それは切腹して果てるまでだ」

「日本の民は、どうなりますか？天子さまも見捨てて、自害ですか？」

「もちろん負ける前に、死ぬまで戦うのだ。その為に、そなたも江川たちも新しい武器を開発しているのであります。異国に簡単にやられる我らではない」

「戦つ」とが矛盾しておられます。？負ける前に死ぬまで戦つ？？といつのは、負けると心の中で思つておられる、ということです」

家賢は怒りで顔が真っ赤になった。このように將軍の心の中に抜けずけと入りこんで屁理屈のよつた口問答をする女などいなかつたからだ。

だが、家賢はここで一呼吸おいた。失礼を働くのは御前会議でも、ちょっとちゅうだつたのだ。

「そなたと、無益な議論をする氣はない。いつたい、何が言いたいのだ」

「徳川幕府を、解体、できませぬか」

意味が……分からなかつた。家賢は、はじめて和語を聞いたかのように、不思議な顔をした。

「時代の境では、必ず旧体制は崩れます。そうしないと新しい世の中が来ないからです」

「今が時代の境だといふのか。どうしてそれが分かる」

「一百数十年、続いてきた徳川幕府の考え方、体制では、現状に全く対処が出来ていませんからです。時代が大きく揺れているのが上様にもお分かりなはず」

確かに。家賢にもそれは分かつっていた。

「しかし、幕府を解体して何とする？ 社会は大混乱じや。誰が、次の体制の指揮をとつていく、というのか」

「それは自然とできまじょう。最初は力の強いものが出来張つてきますが、その後は全く予測できない者が出でまじょう」

「予測できない、とは何じや」

「だから、予測できないので分かりません。今のわたくしたちの想像では限界がありますゆえ」

はああ。家賢はため息をついた。分からぬけど来る、など、全く、理屈が通らない。そんなことでは政はやつていけない。どうした、月島らしくもない。

「そなたの言つことは無茶苦茶だ。話にならん」

だが、月島のこの予測は、明治政府といふ思いもよらなかつた議会政治体制となつて、後に結実するのである。

「とにかく大奥に帰れ。そなたは火事の病氣で宿下がりをしておつたのじや。分かるな？」

哀願するような家賢の目だつた。

月島は心の中でため息をついた。やはり、自分の意見は届かない。旧体制にいる家賢や老中に何を言つても無駄なことが分かつっていたが。

何かがざわつく。

それは、やがて内外からくる大きなエネルギー。

小夜には時代の動きがひしひしと感じられた。

「うだ、 静山はどうなったのか

「上様、 静山どのはお元氣でおられましょうか。 お部屋殿になられ  
たとか」

その言葉を聞いたとたん、 家賢は凍りつゝよつた顔をした。

「静のことは口にするでない」

「どうして」と口に洩れつまするか

不穏なものを感じた小夜は、 引き下がらなかつた。

「上様！」

あまりに激しい小夜の表情だつた。 苦々しい顔をしていた家賢は、  
やがてあきらめたように口を開いた。

「知らぬほつがよい。 ……だが、 大奥に帰つたら嫌でも耳にするの」

それならば余から話そつ

そして、 家賢は顛末を話し始めた。

## 私が私の現実をつくる

「今は信州高遠・駿河守清枚の館に、お預けの身となつておる。死罪だけは何とか免じて、高遠に遠島となつた」

「まさか、高遠に行くまで晒されるのは……」

小夜は真っ青になつた。

「いいや、それはない。ただ……高遠に着くまでに毒殺されるやもしけぬ。側室だった女人を罪人とするのは、將軍家の体面が悪いのでな」

「それで、上様はいいのですか！ あんなにも可愛がつておられたではありますぬか！」

小夜は家賢に詰め寄つた。

「だから、こそじや！ 静はわしを裏切つたのだ」

「その証拠の文とやらを信じておられるのですか。あやしすぎます、証拠が明確すぎます」

分かつていた。ふたりとも。あかりが大逆賊などでないことは。もう証拠がどうというレベルでないことも。ただ、政治的な落とし穴に、あかりは落ちてしまつたのだ。

「どうする」ともできない

「よせん、世の中とはこんなものなのだ。」

……

いや。  
違う。

ぜんぜん違うー。

世の中など、ない！ どうすることも出来ないなど、嘘だ！ 未  
来は決まっていないのである。

今的小夜は違った。

何かがすっかり壊れていた。それは、今までの価値観。理論的だ  
と思っていた、自分の思いこみ。  
すべてを分かつたふりをして、あきらめる？生き方は  
嫌だ！

小夜はすっと後ろに下がると、深々と頭を下げた。  
「これにて失礼いたします」

口を開けたまま家賢は、立ち上がる小夜を見ていた。  
「どこへ行く、月島ー！」

「退散いたします」

襖を開けて、廊下に足を出した途端、家賢が叫んだ。

「誰か、その者を捕らえよー！」  
わらわらと小姓たちが三人、飛び出してきた。行く手をさえぎら  
れる。

「行くな！ 月島」  
「静山を、助けねばなりません」  
振り返った瞳には炎があつた。凄みさえ感じられる。

「將軍の余計で、どうにも出来なかつたものを、そなたがどう出来  
る、といつのじや」

「考えます」

そうだ。今まで自分には何の力もない、と思っていた。肩書きや  
権威がなければただのちっぽけな女。すぐに嵐の海に投げ出されて  
しまう、と。

しかし、今、悟った。力は自分にある、と。

幕府になど、そして、自分の外になど力はなかつたのだ。

現に家賢はたつた一人の女さえ救えない。きっと陥れられたのが  
自分であつても救わないだらう。

家賢は將軍なのに。多くの人より何か出来るハズなのだ。それが  
たとえ理不尽であつても、心からの願いなら自分を中心に考えて動  
くべきなのだ。

わたしは違う。わたしの意志がある。わたしのやりたいようやれ  
るよう、考えるのだ。

「じきなさい」

小夜から青白いオーラが立ち上るのが、見えたような気がした。  
その迫力に小姓たちは、一瞬たじろいだ。

光のよすに小姓の間を抜けると、小夜はさつやと歩いて行つてしまつた。

「お、お待ちなされ……」

「よこ

家賢が近くにまできて止めた。

「そなた、あの者を江川太郎左衛門邸まで、丁重にお送りするのだ。  
くれぐれも粗相のないようにな

「はい」

小姓のひとりが小夜を追いかけていくのを見ながら、家賢は少し  
胸が高鳴るのを感じていた。なにか、小夜がやつてくれるそうな頼も  
しさを感じたのだ。

『そなたは何をどうやるといつのだ』

この袋小路だらけの現実に。

そう思いながらも家賢は小夜の姿が消えた先を見たまま立  
ち尽くしていた。

江戸城に参代した次の日、本所にある江川太郎左衛門邸から小夜  
の姿は消えた。

?お世話になりました?という内容の他に、自分の使っていた南蛮  
の資料や辞書を、届ける手配をしてみる、という書置きが一通あつ  
た。

江川は雲庵や妙安寺に何度も足を運んでみたが、小夜の行方は知  
れなかつた。

## 小夜のたぐらみ

夏本番、水無月の空を見上げながら、小夜は考えていた。今まで幕府に逆らつた事件は、どんな顛末を辿つたかを。

島原の乱、赤穂浪士、大塩平八郎

どれも、失敗しているというか、最後には幕府に処刑されているが（大塩は自害）……本懐を達成したのは赤穂浪士だ。なにかヒントが落ちていてもしかれない。

紙を取り出すと、赤穂浪士について分かつていてことを書き始めた。

床一面に書付を散らかしている部屋は、女髪結い師・お種の家の二階だつた。あかりと共に世話になつたお種の家は、金さえ渡せば、好きなだけ気ままな生活を送ることが出来た。寝食を忘れて考え事をするには、そういう環境が必要だつたのだ。

江川邸を出た理由はもうひとつあつた。自分ともう関係を持つて欲しくなかつたのだ。自分はこれから幕府に対しても弓を弾く可能性が高い。幕府の官僚である江川に類が及ぶのは避けたかった。

? 天野屋利兵衛は男でござる?  
不意にこのセリフが出てきた。

これは、赤穂浪士の芝居で有名なシーンのひとつ。天野屋利兵衛は、恩義ある赤穂藩に報いる為に、江戸の浪士の武器調達に奔走する。やがて奉行所の知れるとこになり投獄されるのだが、自分だけ

でなく長男までもが拷問にあり、口を割るよつ迫られる。

「どこの世に、我が子の可愛くない親があるものか。されども「信義」は曲げられぬ　？天野屋利兵衛は男でいざる？」と。

どこまでが脚色なのは分からぬが、天野屋利兵衛がひつかかつた。武器調達といふ部分。

そこからば、囲碁の先手をどんどん読むような要領で、小夜は頭を働かせた。

ふふふ。

笑いがこみ上りてきた。自分がやることを想像すると、おかしくてたまらなかつた。

これからやることの下見のため、小夜は出かけることにした。玄関を出ですぐの曲がり角。小夜は突然、駆けだした。慌てたのは、小夜のずっと後ろにいたひとりの男である。急いで後を追う。曲がり角を曲がってすぐに誰かとぶつかりそつになつた。

小夜であつた。

「そなた、お庭番じやな」

不敵に微笑んでいる小夜に、その大柄の男はうつろたえた。

「上様である。わたくしの後をずっと着けてござせたのは、何も言えず、ぶすと黙りこむ」としか出来ない。

「まあ、よい。そなたわたくしの言つとおり動く氣はないかえ？それを上様に確かめてござれ」

「た、確かめてどうするつもりですか……」

「また、戻つて来て、わたしと一緒に色々とするのじやん。

「色々とは?」

「色々じやん。

艶やかに小夜は微笑んだ。

## 「在り」と「なし」

あかりは障子にうつる影を見ていた。

外は蒸しているようだけど締めきつているおかげで、存外この部屋は快適だ。

ああ、こつまでこのように押し込められるのだろう。処刑なら処刑でさつさとやつてくれればいいものを、本当にお役人仕事はのろのろしていいライラクする。

ただ……

月島さま。

どうなされてこらだらつ。

わたしの文が来ぬことを怒つておられるだろうか、それとも、心配されてこらだらうか。ううん、何よりわたしが月島さまのことをすっかり打ち捨ててしまつた、と思われたら……それだけは耐えられない。

月島さまの居場所を知つているのはおまつだけ。

そのおまつも、どうなつたか分からぬ。下手をすればわたしと同じような目にあつてゐるやもしれない。もし、そなう……すまぬ、おまつ。そなたはわたくしとは一切関係ないのに。

ずっと考えるのは、「雨月物語」の「菊花の契り」。

菊の節句に会つ約束をした、義兄弟だが、義兄は訳あつて捉えられてしまいその日までに帰れそうにない。「人一日に千里をゆく」とあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」とこづいとばを思つ出しき

て、自死し、幽靈となつて義弟の元までたゞつづけてゐた。

わたくしにも出来るであらうか。死んでこの姿を脱ぎ捨てれば円島さまに会えるのだろうか。だけど、そうなると円島さまに会えるのは、もつと一回もつとなる。その一回でお別れするなど……出来ようか。

ふふ。

一度会えるだけでも贅沢なのに、わたしなんと業の深い女であろうか。？菊花の契り？は約束したことは命を賭して果たすという、義を説いた話じゅうに、わたしは何とこつ罰当たりであらうか。

しかし、この菊花の義兄は本当に幽靈になれる、と信じていたのだな。下手したら幽靈にもなれずに？おしまこ？ではないか。

そうだ仮定してみよ、あかり。  
わたしがこのまま死んだとする。  
すると、意識はなくなる。

すると

……

何も無くなる。  
何も。  
あれれ？

「なあ、静山、そなたこの世は確かなものと思つか？」  
「これが円島さまはそう言つてこいた。

そうだ。

もし、自分がこの世になくなつたら、この世界は存在してこる

といえるのだろうか。この障子も、襖も、畳も……

だんだんと現実感がなくなつていいく。

あれ？

これが……空ではないのか？ わたしがこの世を認識できなくなつたら、すべて消えてしまうなんて、なんていい加減なのだ、この世は。それとも意識は何かに変化するのだろうか。幽霊のような靈魂に。そして、この世界は相変わらず存在するのか。

あー、分からない。

こんないい加減な世界なのに、それでも、この世を生きていく意味は何であろう。

こればかりは古今東西の知恵者が考え抜いてきた問題だ。わたしに簡単に分かるようなものではない。それよりも。

月島さまが幻など、それは絶対に違う。わたくしが感じているこの感覚が幻なハズがないであろ？ 確かに感覚に形はないが、？なし？などでは絶対にありえぬ。

そうか。月島さまは、こういったことを知りたかったのだ。  
わたしが感じている？あり？の感覚を、どうにかして探さなけれ  
ば。

死ぬに死ぬぬ……

## 慈悲の縁（えん）

あかりは、空の話から、般若心経に関する本を持つてきてもうれないか、と役人に尋ねてもらつた。

罪人であつても、坊主や仏典を取り寄せるることは認められていたので、それはすぐに叶えられた。ただし、役人が許可したものだけである。

本気で求めているものは「えられる」。

届けられた書本のなかで、面白い解説をしているものがあった。

? 「空の根底」には「因縁」「縁起」というものがある。釈迦は「万物は因縁より生ずる」ということに気付いた?

ふむふむ。では因縁とは何か。

? 因縁とは、「因」と「縁」と「果」の関係をいった言葉で、「因」とは原因のこと、結果に対する直接の力。「縁」とは因を扶けて、結果「果」を生ぜしめる間接の力。この世を原因と結果だけでみるとはできない。もつと複雑で多様的な関係がある? とのこと。

? 粕が稻穂になる過程。粕は直接原因の「因」、これを土中に蒔き、それに雨、露、日光、肥料というよくな、さまざまな「縁の力」が加わると、豊かな稻穂となる。これが「果」である? とある。

ひとりの人間とつて、他人との出会いは、土や日光に当るようだ。

いやいや、違う。お互いに土や日光になつてゐるのだ。そして皆、それぞの「稲穂」になる。

だから、稲穂といつのは、反応した結果なのだ。

人も稲穂のようになつてゐるため、お互いに反応しあつてゐる。

それは、分かる。分かるが、それが、わたしと月島さまが密接に惹かれあう理由になつてゐるのか。そして、この感情も。

『因縁は確かにあらう。空間的にも時間的にも、一瞬、一瞬の関係だといふことも分かる。しかし、より濃い関係と、薄い関係があるのも確かである。それはなぜ書いていないのか』

十一因縁の項を読むと、愛とは好きなものに心がとらわれる「」とある。

とひわれてゐる？ 最初はそつであつたが、今は違つ氣がする。

そう、なにか彼女は重要な存在なのだ。私にとつて、激しく反応することが出来るといふか、根本から変えてしまつといふか

本当はそれが答えるひとつであつたのだが、あかりにはそれは分からなかつた。

濃い関係は、共鳴作用が働いてゐる、と現代ではされてゐる。すべての物質には周波数というものがあり、波打つてゐるのだが、周波数の似た物質は、互いに共鳴しあつ。

共鳴はエネルギーが高まるので、乱雑な軌道へと移ることが出来、カオスへとなだれ込む。カオスは混沌である。が、新しい現象を

起こすともいわれている。

あかりと小夜が、惹かれあうのも、お互いに強烈な反応と現象を起こすことが分かっているからである。現に今、ここまで現象をお互いに起こしてしまった。

人間たちも干渉しあい、カオスを起こし、そして、何かが発展していくのである。

だから、カオスを起こす関係性は濃い関係、ともいえる。それは、よい関係・悪しき関係どちらもある。個人、個人、みなカオスを起こす関係は違うので、これが縁の濃い、薄いとなるのであろう。

あかりは猛烈な勢いで本を読み始めた。この世のこと、死を悟ることが出来なければ、死ぬことは出来ない、と考えはじめていた。どうして、しのびという死に近い場所にいたのに、ここまでこの世界のことを深く探求しなかつたのか不思議であった。

蓑羽服津もはきつでは、ただ、死んだら仏のいる極楽浄土か、地獄に行く

か、その中間か、と教えられていただけだ。

……そんなの、絶対に変だ。

そんな人間の考え方の場所に行くなど。カエルは動いているものしか理解できない、と月島さまは言っていた。なら、あの世は人間の理解できない世界であるはずだ。

ただ、この世には人知を超えた、知を理解できる人もいるだろう。お釈迦様はきっと分かつてらしたに違いないが、……経典を残されな

かつた。

仏陀の死後に書かれた、仏教の經典では、何か不十分な気がした。もちろん、全部読んだわけではないが、あの月島こと小夜さえも「使えぬ」と言つていたではないか。

あかりはとうとう疲れて、『ごろり、と横になつた。どうせ、見張りなど部屋に入つてこない。』のようなこと、大奥であつたら絶対に出来なかつたであろうが。

「手と手をつないで、いつしょに行ひへ そらやへ みんなで歌うたお」

急に子どもの歌が聴こえていた。この屋敷の子どもなのだろうか。楽しそうに何度も繰り返している。

「手と手をつないで、いつしょに行ひへ か

小夜とならずつと手をつないで、同じ瞬間を多く持つていけそうな気がした。本質的に直感的な関係なのだ。話さないでも分かるといふか。お互いの見ている世界は違つていても、同じ時間と空間接点が多くあればあるほど、見ている世界の相違は少なくなつていくような気がした。

パートナーとの関係は、穏やかな愛を感じること、勇気づけられること。それは、仏の世界からやつてくる慈悲の分化したものだと分かること。そして、この慈悲はやはり？あり？なのだ。空即是色。形はないが在り。そう考へれば、かなり納得することが出来た。

『ちよつと分かつてきただじやないの、あかり』

嬉しくなつて、思いつたりのびをした。



じめじめした蒸し暑い日、小夜のもとに三人の女性がやつてきた。おまつと、伴をしていた女性がふたり。

あかりから、お種の家の場所を聞いていた、おまつは向とかしてあかりのことを知らせようと神田にまでやつてきたのだ。

「円島わまー やはつ生きてこらした」

涙で顔をぐしゃぐしゃしながらおまつは、肩で息をしていた。

「たいへんなのです。お静わまが…… 静山わまが、死罪になつそうで……」

小夜が生きていて嬉しいのと、あかりの現状を伝えなければ、といつ切羽詰つた感で、言葉が上手く出でこない。

滂沱と泣くおまつを抱いてやりながら、落ち着くのを待つていた。伴の女たちは近くの茶屋へ行かせた。

あかりが逆賊容疑で捕まつたことだけは知つてゐる、と、小夜はおまつに話した。

「どうやって来たのじゅ。そなたはお宿下がりにならなんだのか」

「は、はい…… お静さまの…… 部屋子は、み、みな、お暇を出されるハズだったのですが、な、なぜか、わ、わたくしだけが美津波瀬みつはせさまの部屋子に、指名されまして」

しゃくつあげるのを、なんとか我慢しながら、ひとつひとつ話すおまつ。

「美津波瀬どに？」

小夜は落ち着かせるため、おまつの背中をさすつてやる。

「はい。……じつは、あ、あれから、大奥の中味がガラつと変わりまして……いまは美津波瀬さまが、総取締りとなられたのです」おまつは小夜の知らない話を始めた。

「万里小路さまがお辞めになつたあと、村岡さまは自分が総取締りになれると思いこんでおられましたんで、いい気味です」真つ赤な目をしながらも、おまつは意地悪な目をして笑つた。

「万里小路さまは、静山のとばつちりを受けて失脚なさつたのか？」

「よく、分からぬのです。噂ではお静さまの後見だつたので辞められた、と言われていますが……もつと何か上のほうで不都合があつたようになります。村山さまに呪いをかけられて体調を崩されたとか、他にも色々な噂はありますけど」

呪い、と言われて、小夜は山吹の死んだ時にあつた呪詛のことを思い出したが、すぐに考えを振り払つた。

「それで、そなたは今日はどうやつてここへ参つたのだ？」美津波瀬どのの部屋子なら、すぐに大奥へ帰らねばなるまい？」

「大丈夫です。本日はお宿さがりとして出てまいりました。美津波瀬さまは村岡さまへの対抗として、わたくしを自分の部屋子されたんです。総取締りと言つても、村岡さまの力は依然として大きなものがありますので、村岡さまに恨みを抱いているであつて、わたくしを部屋子にするのも意味があるのでしよう」

「そなたはとても聰く氣も効く。その才能を買われたのだ  
「わたくしは、月島さまのしたで働きとう存じます！」  
おまつは興奮して小夜に訴えた。

小夜は少し気分を変えたくなつた。

「せうじや、冷たい井戸水を汲んでくるゆえ、少し待つておれ。遠  
いところ何も出さずすまなんだの」  
「そんな！ わたくしがいたします」

「よいよい、そなたは客人じや。わたしは貧乏御家人の娘ゆえ、本  
当は何でもやれるのだ。ここでの暮らしは案外快適じやぞ」  
そう言いながら、やかんとタライを持つて出ていつてしまつた。

みーん、みーん、みーん。

冷たい水、と言われて、おまつは初めて自分がぐつしょりと汗を  
かいているのに気付いた。大奥の女性は大体において着すぎでもあ  
つた。

そう、もう本格的な夏だ。お静の方が捕まつたのは衣替えの日  
であつたゆえ、何日たつたのであらうか

自分がここへきた本来の目的を、思い出した。お静の方をどうに  
かして救いだせないまでも、月島がただひたすらに、お静の方を待  
つていることだけは耐えられなかつたから、一瞬は悲しまれても、  
事実を伝えたい、と思いここまでやってきたのだ。

しかし、月島こと小夜は、お静の方ことあかりが捕まつたことを  
知っていた。そのうえ、驚くことに、あつけらかんと生活している

のである。

「あーやはり暑くなつてきたの」

井戸の水で手ぬぐいをしぼり、自分に差し出す小夜の姿がどうにも令嬢がいかなかつた。質素な町屋は、よくみれば散らかし放題である。考え方をするのに紙を床にどんどん広げたり、片付けを後回しにしたりしていたからだが。こんな荒れた部屋に住んでいるかと思つただけでおまつは耐えられなくなつた。

「お止めください！」

差し出された濡れてぬぐいを持つていていた手を拒絶するよひ、自分の手の平を立てた。

「そんなこと……なきらいでください。月島さまは、月島さまが、大奥御年寄りです。上様の寵愛も信頼も厚く……とても高貴なお方なのです。わたくしたち女性の憧れなのです……」

おまつは再び泣き出した。悲しかつた。自慢の主がこんなみずぼらしい部屋で、荒れたまま使用人も持たず暮らしている。そのうえ、使用人だった自分の汗を拭く用意をするなど。

顔を被つて大泣きしているおまつの横に、小夜はゆっくりと腰をかけた。

「すまぬな、おまつ」

小夜は自分をうちわでおさぎつゝ、その風がおまつにもかかるようした。

「わたくしは、他の女性や上様の為に生きるほど殊勝ではない。自分勝手な女なのじや」

おまつは驚いた顔をして顔をあげた。他の女性はともかく、上様の為にも生きぬ、と言つたからだ。

「上様は制度の奴隸じゃ。そんなお人に仕えるのはもへいぬんじや」「そんな……」

「おまつ、もう幕府はそんなにもたぬぞよ。こつまでも古こ体制では新しい時代はやつていけぬのだ、賢いそななら分かるだらう?」

茫然とした。確かに。月島は、大奥年寄り時代から経済問題にしても異国問題に対しても、おまつたちには色々話していた。

「だ、だからといって、月島さまはこんなボロ屋にずっとおられるつもりですか? 幕府が嫌だからといって、こんなトコにいるのですか? 今までの月島さまなら、上様に言上して色々と改革の力になられたハズ……」

「静山を見捨てるような上様に、言上することなど何もない」

おまつはぐくり、とした。

「小夜の皿に青田に光が点つたからだ。

「おつらみされているのですね?」

「いいや。上様は上様の生きようがある。それをどういは出来ぬ。人をうらむ、とは人を自分の思い通りにじよつとすむからじや。わたくしは、そんなこと思わぬ。

大体、將軍相手に、どういは出来る人間など、果たしているのか? だが、自分自身ならもうちょっとやりようがある。だから……わたくしは自分で考えて我がままに生きることにしたのじや。例え間

違つておつても

とつもなこととを語つておきながら、小夜はおまつに向かつて  
うつと笑つた。

「あなたはもう帰れ。もう、ここへ来てはならぬぞ、そしてわたく  
しのことはおれよ」

「こやど」「わこます！」帰つてからださつませ、円島さま  
「帰らぬ。ここでやることがあるやう。そなたは、幕府が嫌だから  
ここにこゐるのか、と言つたの。違ひ。ここでやることがあるから居  
るのじや。この家が豪奢な城であるつがボロであるつがそんなこと  
は関係ない」

その表情をおまつは知つていた。  
円島が決意をした時は、この顔をするのだ。

「分かりました。では、わたくしもここで円島さまをお手伝いしま  
す。今までどおりわたくしはちゃんとお役にたちます」

「だめじや

「なぜですか！　わたくしは決してしぐつたり邪魔をしたりいた  
しません」

「だめじや、そなたは邪魔じや

「なり、邪魔いたします」

おまつも引き下がらなかつた。今までせんざん悲しい思いをして  
きたのだ。たとえ、ここで小夜と一緒に死んでも本望だつた

## 別れ

小夜は困った。自分がしゃべりすぎたことを今更に後悔したが遅い。

何とかおまつを上手く騙して返す方法をひねり出さなければならない。着てこぬよう怒ったふりをして外へ出た。おまつも、この場所へ小夜が帰ってくるのは分かっていたので居座っていた。

風にあたつて頭を冷やす。数間歩いたところで、自分をじつと見つめている男・旭を発見した。

旭は、小夜を見張っていた家賢のお庭番である。

小夜は周りを見渡すと、スッと旭のもとへ寄つた。  
「静の方の遠島の口が決まりました。来月の一日です」

すばやく文を旭は手渡した。

来月の一日。あと八日しかないではないか。

「行程などはそちらに書いてあります。上様は、わたしに遠島さま

の言つとおりにせよ、と言われました

「わうか」

「ただし、報告はせよ、と言われてあります」

それは予想内のことである。どうせ、他のお庭番もいるかもしれない。

「困られていますな」  
「聞いておつたか」

おまつとのやつとのことだ。

「わたしが何とかいたしましょ、つか」

「ほお」

小夜は少しホッした表情で旭を見た。

「後でうらまれるかもしされませぬが」

「よい。うらまれてもおまつには息災であつて欲しいのだ。あれの家族に類が及んでも困るしの」

小夜は少し寂しそうに笑つた。

おまつの待つ家へ、ひとりの大柄の男が駆け込んできた。

「今、そこで妙齢のべっぴんさんが台車に跳ねられたんだ！ そこいらの人人が言つのに、この家の人がだつて言つじやねーか。あんた、家族かい？」

血相を変えた男の表情を見て、おまつは驚いて立ち上がつた。

「いえ、あの……」

「今、医者へ運ばれたんだが、かなり血が出てて……」

「ど、ど、どこの、お医者ですか」

「いま、そこで籠を待たせてある！ 早く、早く

パニック状態になつたおまつは、旭の用意していた籠にあつさりと乗つた。そして、そのまま江戸城平川門まで連れていかれてしまつた。

「な、なんですか？」

籠を降りたおまつは、せんじ見た景色に愕然とした。門内に入つてしまつと、大奥の中である。

「存知のとおり、大奥の門内」

振り返ると、さきほど大柄の男が腕を組んで立つていた。

「どうこうじですか？ そなた、わたくしをだましたのですか」

「ああ」

悪びれる風でもなく男は肯いた。

「よくもそのよつな……なぜわたくしをだまして、ここへ連れてきたのです！」

男の態度にカッとなつたが、すぐに月島の策略だと氣付いた。

「ああ、ひどい月島さま……」

再び、自分が見捨てられたのだと分かつて、おまつは心底落胆した。もひ、これ以上歩けないほどに悲しくて倒れそつた。

「これ、あんたに渡してくれって」

旭は茫然とへたりこんでいるおまつに、布にくるまれたかんざしを差し出した。銀の地に金で牡丹が透かし彫りしてある。

「これは……？」

「月島さまがずっと着けてらしたかんざしだ。それを、あんたに、つて。それから、まつはわたしにとつて大切にしたい、かけがえのない存在なのだ」と伝えてくれ、つて

その瞬間、おまつはかんざしを握り締めて絶叫した。

「永の別れだつた。

それがいま、はつきりと感じられた。

「襲うなら、ここ。小仏峠の関所前だね。ここを出てしまつと、どうにつけた道を通るか分からなくなる」

サエは広げた甲州街道の地図の一点を指差した。

あれから、あかりの義父だつた黒川藩、横井定利の家を張り込み、何とか情報を得たのだった。高遠藩お預け、そして文用の一日に高遠へ移送されることを。

「小仏峠は狭くなるところがある。そこを通るとき一列になるから、一気に切り込めば何とかなるかもしれない」

そう言つてからちらりと龍才の顔をみた。重傷を負つていてる龍才は、果たして使いものになるのか。あれから毎日、鍛錬をしているとはいえ多勢に向かうのだ。

「あかりだつて自由になりや、あいつだつて戦えるしな」  
暑さのため、勘介は首元をハタハタとさせた。

「あかりはどうにつけた状態か分からぬので戦力にいれぬほうがよい。弱つているか、眠らされているか……」

「もう少し先まで着いていつて、見張りの手薄になる機会を狙つてもいいですが、長い距離を着けていくと相手にも怪しまれるし、こつちの体力も落ちてきます」

「敵は何人くらいださう」

「恐らく一、三十人くらいではないでしょうか。女の警護ですし、あまり金もかけられないでしょ」

サエが冷静に判断する。

「だが、幕府からの用命となるとあまり人を少なくも出来ぬが……いや、あんまり目立つてもいけないか」

「そこが微妙なトコなんです。なので、多くても三十人と」

「ならば何とかなる。火器やら飛び道具も使えば。……やつかいなのは」

風魔だ。

龍才は一人に順番に視線を合わせた。どこまで風魔が未だに自分たちを狙っているか、だ。表の世界にいるあかりを窮地に落としたのは誰であれ、今回、あかりを取り返しにくることくらいは想定している。

高遠藩の見張りに紛れていることは十分考えられた。

それでも、やらねばならない。三人は出来うる限りの予測をして作戦をたてた。が、それは全く思いもよらない因子、つまり小夜によつて滅茶苦茶になつてしまふのである。

## 意思が運命を変える

なにかへんだ。

あかりがそう気付いたのは、水無月の二十日すぎ。つまり、信州高遠に移送される、と知った夕方のことだった。

夕食に出されたものを食べてから、気持ちが悪く軽い腹痛もする。これは毒なのか？

はつきりとは、まだ分からぬが、その日から食べるものには細心の注意を払うこととした。できるなら食べないでもよいが、この暑さだ。全く断食をしてしまつのも危険だ。

高遠に移されると聞いて、最初に感じたのは『一応、助かった』ところの安堵感だつた。配所へと移送、ということは、そういうことである。幕府の咎人とがにんを高遠藩が勝手に処分するわけにはいかないからだ。どうなつて遠島という沙汰が下つたのかは分からないがホッしたのは事実である。

だが、今日の食事に毒が入つていた、となれば安心など遠い話である。なにか……分からぬ陰謀が始まつたと考えてよかつた。

汁もの……は、手をつけないでおこつ。一番毒物を入れやすい。だが、飲んでいない、と分かれば他のものに入れるだらう。なら、汁ものはどこかへ捨て飲んだとみせかけねばならない。そして、ビリやうの。小さな戦争のはじまりだつた。

「はあ……」

あかりは思わずため息をついた。もつ何度もついてきたが、今回  
はまた別のため息だつた。

毒物の勉強をしてきた自分が毒殺されようとしているなど皮肉以外の何ものでもなかつた。そのうえ、この後に及んでもまだ生き残ろうとしている自分がいたからだ。

「最後の最後まであきらめてはならぬ」  
そう言つたのは親方だつた。

それは時間内に鍵を開ける練習をしていたとき。どうしても開けられなくてあきらめようとした時に言われたのだった。

「鍵はよい。別にあきらめればすむことだ。しかし、鍵のかかつた土蔵の中に大切な方がいて爆薬がしかけてあつたらそなた何とする。じりじりと導火線の火が減つていて。鍵を開ければその人は爆発とともに吹つ飛んでしまうのだ。時間はもちろんない。そんな状況であつたらそなた何とする」

「壁をぶち抜きます」  
「ほお、それもひとつの方だ。じゃが、壁は頑丈でじゅうとやつとでは抜けぬとならどうする」  
「屋根にあがつて穴をあけます」  
「それでは、そなたが入れても大切な人を外へ出すことは間に合わぬ」

あかりはじつと田をとじて考えた。

「もういちど……よく考えます。穴の形状と使つてゐる鍵あけの道具が適当であるか」

「して？」

「合っていたなら、何も考えずにむづこけで鍵を開けてみます」

「では、やうせよ」

あかりは手元にあつた鍵の鍵穴をさぐつたあと道具を変更した。  
新しい道具で探つてみるとピキンと鍵は外れた。

「やうじや。よく出来たな。あかり」

炎才は嬉しそうにあかりの頭をなげてくれた。

「しおびはな、お役目のために簡単には命を捨てよ、と教えられているかもしだれぬが、それは嘘じや。本当に大事なことは最後まで生きることをあきらめぬことにある。それが本当のお役目遂行だから。死んではお役目は遂行できぬ」

「お役目を遂行するの」、元のびじても死ぬ必要がある場合はないのですか

「ないの」

炎才はまきつぱつと言つた。

「どうしても生きりれぬ、とこつ場合はあるかもしだれぬ。しかし、それは今回のように最後の最後まであきらめねば、ほとんどない、と言つてよい。どこかに？もう、いいか？といつ気持ちがある場合のみ、死ぬのだ。本当に大事なのは意思なのだよ、あかり」

よく分からなくてあかりはぽかん、と口を開けた。あの時はまだ十一歳くらいだった。

「意思が運命を変えるのだ。それをしつかり覚えておくのだ」

「はー」

あの時は、よく分からぬまま返事をしたけど、今になつてその

言葉の重みを感じる。

親方はわたしに生きる意思の大切さ、運命を切り開く手がかりをくれたのだ。そして、あの温かい手でわたしのことをちゃんと愛してくれた。

母上はわたしには父者は死んだと言つたけど、今にして思えばずっと親方のことを想つていたのが分かる。時折、たずねてきてくれた親方と過している時間は、本当に嬉しそうだつた。小さな頃は、わたしは親方の膝に座つていた。

外ではだめだぞ、つて言つておきながらわたしを放さなかつた親方。それを見ていた母上の幸せそうな顔。わたしは両親からちゃんと愛されていたんだ。それが今になつてよく分かる。

だから

わたしは死ぬわけにはいかない。父や母のためにも。親方の教えを守るためにも。そして月島さまとの約束を果たすためにも。

どうにかして逃げ出す手はずを考えねば。ここで逃げるか、高遠に行く道にするか、それとも高遠で手薄になつた時を狙うか。

もう、あかりはふつきれっていた。

横井家の断絶のことも、家賢のことも、どうでもよかつた。いまいましい父権社会の制度にしばられたこの世界から、心は自由にならうとしていたからだ。

わたしが運命に見捨てられていない、とすれば、何か合図があるハズだ。『『『まだ!』』』といふ合図が。逃げるべき兆候というもの。

それを見逃れなこよひにしづくへは。

## 賽は投げられた

迎え出た小夜が旅の身づくろいをしているのを見て、旭は不思議に思った。

「その格好は？」

「今から、泥棒をして逃亡するのじゃ。そなたも早う支度せべ」

「ど、泥棒？」

「大きな声を出すでない！」

家の戸口に突つ立つていた旭を家の中に引き入れた。戸をぎっちらと閉める。

「そなたは、お庭番のくせに声が大きい！」

「や、ですが丹島さま、何を盗むんですか」

「そなたは黙つて、わたくしの後に着いてくればよいのだ」  
内容を聞いてしまえば家賢いえよしに報告する義務が発生してしまつ。小夜はいちこむけ答えるようなことはしなかつた。

「今から？ ですか？」

真昼間である。それも真夏。ぎんぎらと刺す太陽の光線はどこにも影を作らないほどだった。

「そつじや。そなたは、その台車を引いてわたくしの後をついてま

「いれ」

仕方なく、汗をぬぐいながら旭は、小夜の後をついていくことにした。

江戸時代、真夏になると、ほとんどの町人たちは働くことはしなかつた。商人たちは、朝と夕方だけ商売をしたり、町人たちは銭湯で一日中ゴロゴロだべって過していた。したがって、町の通りにいるのは、小さな子どもくらいである。

そんな中、笠をかぶった女とガラガラと台車をひく大柄な男が、通つても誰も気にかける者はいなかつた。

「いは……江川さまのお屋敷？」

表札を見上げると反射光が目にはいつてくるので、旭は目を細めた。

本所にある江川太郎左衛門の屋敷は、広く、有志たちのサロンのようなものも兼ねていたが、今はひつそりとして人影もなかつた。

「あれ、月光さま」

屋敷の庭から気付いたのは、初老の下働き風の男だつた。

「しばらくお姿を見ませんでしたが、どうされましたか」「たしか嘉助かすけという下男だ。この様子では、小夜がいなくなつた事など、詳しいことなどは何も知らないようだ。

「今日は、お預けしていたものを取りにきたのです」

「はあ……お代官さまは、今お留守で」

それは想定済み。江川は月末に定期的に留守にする。

「大丈夫です。わたくし、もう伝えてありますから。勝手にもつてまいりますわ」

「左様でござりますか」

「申し訳ないんですが嘉助さん、運ぶのにちょっと人手が足りませんので、下男を何人か集めてもらえませんか」

「そんなに大きなもので」

「ええ」

小夜はにっこりと笑った。

がらがら、がらがら…… 真夏の道を、数人の男たちが大きな荷物を運んでいく。藁で周りを包まれた物体を台車にのせて押していく。しかし、それでも気にかける人はいなかつた。

番所の前でさえ何も言われなかつた。あまりの暑さに、奥にひつこんだ役人たちがダレ、半分寝ぼけたような風体であつたからだ。

小夜は、運ぶ下男たちに最初に給金をはずむ、と告げ、士気を上げていたし、時折、酒も買ってやると言つたので、やる気は落ちなかつた。

「どこまで行くんですか」

日陰で休憩と水を取つていた旭だが、汗が流れ落ちるのが止まらない。それほど暑かつたのである。ひよわい大奥女中の小夜は、もつと疲れているはずだ。

「今日は新宿まで何とか行けたらいいが……」

「新宿！」

まだ、本所を出て両国にまでしか来ていないので。あと十キロメートル以上はあつた。この炎天下で、小夜の体力では絶対に無理である。

「無茶です、男の私でもこの炎天下はキツイ」

「確かに……」

「舟を使いませんか」

「川を遡るのは、時間がかかる……」

小夜は顔をしかめた。

「でも、江戸市中の水路はそんなに流れがありません。えーと……浅草御門から飯田橋までいけば、あとは川の流れに沿つていけます。あちらのほうがラクです」

旭に言われたことを確認するために、小夜は荷物の中から地図を出した。

「確かに。そなたに言われるまで、私は下から上がる経路しか考えていなかつた」

「丹島さま、おひとりで計画を立てられるのはいいのですが……私にも少しばかり相談ください」

「でないと、体力を考慮しないではないか、と続けたかった、が止めた。小夜は家賢に報告されて止められることを何よりも嫌がっているからだ。

「もう、上様に報告はできません。丹島さまに着き従つて旅に出てしまつのですから。ですから、これから計画を話してください」

「そう。それが何よりも大事なことだった。江川太郎左衛門の屋敷から盗み出したものを使つていつたい何をしようといつのか。」

数秒考えていた風だったが小夜はやがて納得した。

「そうじやな。旭の言つとおりだ」

そして計画を話し始めた。

登場

文月一日。

元・將軍家側室・靜、信州高遠へ搬送。

千代田にある上屋敷から出てきたのは、小さな籠かごとそれに伴う十四人の男たちであった。暑さを避けるためか夜明けと同時に出発するらしい。

それを密かに追うのは、龍才以下三名。

一向は肅々と歩き、昼には内藤新宿には到着していた。ここには高遠藩の下屋敷があるので長めの休憩を取るらしい。サエはその情報を持って近くの飯屋に戻ってきた。

「お天道さんが高いうちは休んどいて、夕方になつてから少し歩くみたいです。うーん、今日は高井戸で泊まりかねえ」

「あかりの姿は見えなかつたか」

龍才はそばをすくついていた箸を止めた。

「見えませんでした。なんせ下屋敷に入つちまつたもんで」「今度はおれが、ちらつと下屋敷の辺りを見てきますわ」勘介はお茶をぐびり、と飲みほすと飯屋を出ていった。

「思つたより警護が少なくて安心しました

「はあ」

龍才は大きなため息をついた。

「何だか拍子抜けというか、風魔もいるのかいないのか……隙のな

い護衛は一人いるかいないかという感じだ。女人の護送とはこんなものなのだろうか

「分かりません。ま、今の状況は我々にとつては好機です」

「そう……だな」

不承ながらも龍才は返事をした。高遠藩一行は、サエの予想どおり、その日は高井戸宿まで行き、そこで一泊することになった。

一方、その頃のあかりは、困っていた。

本当に体調が悪かつた。  
確かに毒だ。

試しに食事をしなかつた次の日は体調がよかつたのである。そのまま絶食をしたかったが、そうなれば水に毒を入れられるであろう。それは避けたかった。数日くらい食べなくて大丈夫であるが、水を飲まなければ一日とてあやうい暑さなのだ。

しかし、そう考えるとなぜ水に毒を入れないのか、のほうが不思議でもあつたのだが。あまりにあからさまな方法をとるのは避けたい理由があるのだろう。仕方がないので、何とか少しだけ食べては、見ていないとこりで捨てる、という攻防が続いていた。

しかし。

もう時間はあまりない。

このまま毒を飲み続けたり絶飲食をしたら自分の体のほうが参ってしまう。

逃げる体力を考えると、もってあと一日。

合図はまだ……」ない。

文月一日。

次の日も夜明けと同時に一行は高井戸宿を出発した。同じようなペースで進んでいく。

布田五ヶ宿、府中ときて田野との境である、玉川（現在の多摩川）に差し掛かったとき事件は起こった。

ドドーン！

高遠藩一行のすぐそばが爆発したのである。

「なつ」  
采配役である郡代ぐんたい・鈴木隆興は固まつたままだった。他の者も同様である。

間髪あけずに、今度は反対側が爆発した。

ドオオン！  
土が数メートルも跳ね上がった。

「うわーカミナリさまのタタリだー！」

籠を担いでいた人足たちは、籠を放りだして逃げ出した。そのまま、あかりは地面に落とされ籠の外へ飛び出た。

「おちつけ、おちつくんだ！」

鈴木は自分に言いきかせるように大声で叫んだ。周りの一団はオロオロと周りを見わたすだけだった。

やがて、もうもつとした土けむりの向いに、黒ずくめの人姿が

浮かび上がった。

大きい影と小さな影。

そして、なにやら、大筒と思しきもの。<sup>おほ</sup>

きた

その時あかりは実感した。

そう。

ずっと待っていた時が来た。

「わちり高遠藩お預け・お静の方とみた。その籠、じちりに貰い受け  
ける」

小さなぼうの影が、よく通る声で発した。

その声、その姿。

小夜だ。

あかりは目を見開きながら背中から胸に向かって何かが貫くのを感じた。その気のようなものは、一瞬にしてそのまま小夜の胸へとつながった。

カシヨーン

実際には音などしなかったが、ふたりは感じていた。

そのまま胸の奥から熱いものがどんどん広がっていく。

『ああ、広がる』

一方、鈴木隆興は相手が人間の女であつたことを知り、俄然、我に返つた。

「おまえら、何者だつ

がぜん

「ほら、そこにはお静の方に私怨を持つ者なり。我が手にて恨みを晴らしたく候えども、そちらが断るとあらば、このまま、大筒にてそこもとひびと吹つ飛ばす所存である。わあ、返答やいかに」

「ひつと詰まつた鈴木は、周りの者の顔を見渡した。誰もがどうしてよいか分からぬようであつたが、中には、ほとんど逃げ出さんとしている者もいた。

「わたくしが行きましょう」

その時、あかりが口を開いた。

「し、しかし……」

「このままでは、そなたたちも巻きこんでしまつ。どうせ、わたくしはどこかで処分される身。ここで賊に渡しても惜しくはありますまい」

そう聞いても鈴木はぎりぎりとしていた。まだ体面を気にしていた。

「時間がせぎは許さんぞ。かせいだとて、これはライフル砲といつてすぐに実弾が発射できる最新鋭の大筒なのじゃ。それ！」

小夜は後ろにいた黒装束の旭に向かって手をあげた。

その合図で旭は、大筒を少し前にやると火を点火し、そのまま発射した。

「ああん！――！」

今度はすぐ後ろに落ちた。

「うわー」

土と砂のつぶでがモロに体に飛びかかってきた。その破壊力と地

響きに侍たちは真っ青になつた。

「わ、わかつた。わかつたから、止めてくれ」

鈴木は手をあげて止めた。もはやパニックだつた。急いで、あかりの足の縄を解かせた。

あかりは、そのまま黒装束一味に向かつてそろそろと歩いた。その顔に微笑みが浮かんでいるのを見ることが出来たのは小夜と旭だけだつた。用意してあつた馬にあかりを乗せると、そのまま小夜も一緒に乗り川上へ消えてしまった。

「さあ、あんたたちはもつ少しここにいてもらおつか」

旭は大筒を再度、高遠藩一行に向けた。

高遠藩一行はパニックだつたが、高遠藩一行たち以上にパニックだつた男がいた。

ずっと後を着けてきていた龍才である。

『いつたい、何が起つたのだ？』

あの声、姿はどう見ても？ 小夜どの？ ではないか。それが大筒をぶつ放し、高遠藩の一行を襲い、あかりと逃げてしまつたのだ。いつたい何なのだ？ 何が何だかサツパリ分からぬ。

「龍才さま、後を追いますよ」

勘介の声でハツと我にかえつた。

「あの黒装束はいつたい何者でしょう？ 風魔ではないですよね」龍才があまりあわてていないので見て、サエは訝しがる。

「いや、違う違う。あれは小夜どのが。おれの傷の手当をしてくれた女人だ。よく分からんが、小夜どとのあかりは知り合いのはずだ」

「じゃ、あの私怨を持つ、とか言つのは嘘？ なんですよね。小夜どのはあかりを助けた？ んですよね？」

「う……ん、恐らく」

あいまいにしか答えられない。

『しかし、大砲を持ち出してぶっぱなすか？ どうやって調達し

たんだ？ 全く信じられん。下手したらあかりに当るかもしれぬの  
に手加減や迷いは一切ないとは。あの小夜どの……乱心しておるの  
か』

けれど、自分の傷の手当ての仕方から尋常ならざる平素、の小夜  
を知つている龍才是小夜が決して乱心していないことは確信して  
いた。

『まさか本当に私怨を持っている……のではないよな』

近くの宿場から馬を調達してきた三人は、とりあえず上流に向か  
つて走ることにした。玉川をずっと上がっていくと、多摩丘陵と武  
藏野台地につながり、どちらに分け入ろうとつづりとした森につ  
ながる。

『おんな一人を乗せて、そう遠くへはいけないハズ』  
龍才是注意深く足跡を探していった。川砂には足跡が残つてゐる。  
同時に、追つ手を考慮して、あちらこちらへと自分たちの足跡を散  
らしてまわる。

「どこまで行つたんだ」

「花火をあげてはどうですかね」

勘介が提案したのは、もはきつ裳羽服津で居場所を知らせる手持ち花火の  
ことだった。

「いや、高遠藩のやつらに見つかってもマズい。もう少し探そう」  
龍才是馬を進めた。

実際には高遠藩は旭が十分にひきつけていたので、未だに同じ場

所で汗をかきかき突つ立つっていたのだが。

龍才が辿つた足跡は、やがてひとつ山道へと分け入つていた。

「ここだ」

青々とした木々がつつそうと茂れる。木立に入ると真夏の陽射しがスッとさえぎられ、体感温度が急に低く感じられた。

「あかりのやつ、どこへ行つたんだろう」  
サエがきょろきょろと辺りを伺つた。

「ここからは獣道だ。足跡も残らぬ。よく考えぬとな」

「よし、アスカを飛ばそう」

勘介が口笛を吹くと、どこからともなく大型のハヤブサが現れた。勘介は鳥類を飼いならすのが得意なのだ。飛鳥は勘介が飼つている猛禽鳥だった。

「どこにいたんだ」

「ずっと着いてきましたよ」

信じられない面持ちで龍才は、腕にアスカを停まらせている勘介を見ていた。

「ここいらに人間がいなか、ちょっと見てきてくれ」

勘介はアスカに話しかけると腕を上げた。アスカはババッと羽を広げると飛び立つていった。

## 現れた敵

龍才たちから、そんなに離れていない場所に小夜とあかりはいた。小夜は腕の中のあかりの顔が真っ青であることに気が付いた。流している汗も脂汗である。

「どうした？　どこが悪いのじゃ」

「少し……吐き気がするのです」

気持ち悪いのを我慢するように口をきゅうとつぶつた。

木立の中は涼しい風が吹いていたが雑木林だけしか見えず、休めそうな宿や家はどこにも見当たらなかった。目的の村落に行くには、この山を越えなければならない。

小夜はあたりをきょろきょろと見渡して、一本の櫛の木元にあかりを降ろした。そこは少し平らになつたスペースがあつた。

「気持ち悪ければ吐けばよい。少し馬を飛ばしそぎたようだ」  
背中をさすつてやりながら声をかけた。

「申し訳……『ざこません。水を』

体に入った毒を出すには水を大量に飲むしかなかつた。一日前から食事はもうほとんど摑つていないのである。吐くものはなかつた。が甘かつたことを悟つた。

さわさわさわ……

木立を渡る風は気持ちよかつたが、この調子では夜も冷え込むことが予想された。夏なので、野宿も視野にいれていた小夜は、自分が甘かつたことを悟つた。

あかりを見ると瞼は蒼い影を作つていて尋常でない様子が伺えた。ハツと息を飲んだ。

そう言えば家賢はあかりが毒殺されるかも、と言つてはな  
いか。

「毒じやな？」

その言葉にあかりは苦笑いするような顔で肯いた。

「なんとか食べぬよう努めていたのですが……なかなかに難しいも  
のがありました。今日、月島さまが、あのようになるとんでもない方法  
で乗り込んでこられる、と分かつていたら意地でも絶飲食を通しま  
した」

「なかなかであつたるう？」

「はい。面白ひでございました」

あかりはニヤリと笑つたが、印象は薄かつた。

しばらくふたりは、檣の木元にじつとしていた。田をつむつたま  
まのあかりと、それをじつと見つめる小夜。

遠くできゅーーきゅーーい、と鳥の鳴き声が聴こえた。とんびのよ  
うな飛び方をしているが、とんびではない。

あのよつに飛んでいけたらよいのに。

そう思つたと同時に、その灰色の鳥は直下降して何かを襲つた。

「うわっ！」

途端に、人間の男が悲鳴をあげながら灰色の鳥に追われて木立か  
ら出できた。

「し、しー、あつち行け！」

バサバサと鳥を格闘している。

と、同時に、木立から三人の男が仕方なさそうに顔を出した。

小夜とあかりはキツと表情を引き締めた。

「不細工すきるだ長吉」

体格のいい男が、鳥に襲われている男に向かつて言い放った。

「素晴らしい活躍でしたなそちらの御」。さすがに我らも驚きました。よもや、大砲をぶっぱななど想像もできませなんだ」嫌味たらしく男は手を叩いた。

「上様公認のお庭番ですかな」

「おまえたち、風魔であろう」

あかりは身を起こしながら小夜の懷にある短剣をちらりと見た。やはり風魔はどこかで高遠藩一行を見ていたのだ。

「ほお、よくご存知で。ああ、お静の方もしのびでありますな」「雲才さまを殺したのは、おまえたちであろう！ 山吹を殺したのも！」

それを聞いて一番驚いたのは小夜だった。

こいつらが、山吹を

驚きと怒りがないまぜとなつた瞳は大きく開かれ、爛々と光りはじめた。

すちやつ。

懷剣の鞘を抜いた。

だが、あかりが小夜をかばうように手を広げて前に出了。

「それをわたくしにください。わたくしがお守りいたします」

少し考えていた小夜だったが、すぐにその懷剣をあかりに渡した。

「そんなもので我らに勝てるとお思いか？ お静の方。こちらは男四人だぞ」

「 もちろんじや。だが、これならビリジヤ」

小夜は懐から、短筒つまりピストルを出した。ゆっくりと銃身を上にはね上げ、薬きょうを充填した。

男たちは半歩後ずさつた。

「 大筒を扱うわたくしが、短筒を持つとは思わなんだか」

見たこともない短筒に一瞬焦つた風魔たちだが、小夜のいつとう近くにいた小矢太は火繩がどこにもないことに気付いた。  
あれでは火をつけられぬ

つつづ。

一瞬にして迫りくる小矢太の姿に、小夜はためらいなく引き金を引いた。

パアアン！

バサバサバサ、と森にいた鳥たちが飛び立つた。

信じられない顔をした小矢太は、胸を押されたまま、どうと倒れた。

「 小矢太！」

その瞬間、その銃が火繩式でない、といふことが風魔たちにもはつきり分かった。

「 気をつける！ 新しい銃だぞ」

体格のいい男はこの三人の組頭なのだろう。他のふたりに言い放つた。

じりじりとにらみ合いが続く。

小夜は、あと一発しかない弾を思い、どうしようかと考えていた。輸入もののサリンジャー銃は護身用なので一発しか銃弾を装填できなかつたのだ。江川邸にあつた他の銃は重いか火縄式だったので自動着火式はこのサリンジャーしかなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9328w/>

---

二人静 - ふたりしずか

2011年11月30日12時48分発行